

Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア

世界を解く
笑う

〈メッセージ〉

新入生へのメッセージ

〈対談〉

日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

国際基督教大学学長

鈴木典比古氏

一橋大学長 杉山武彦

進化する大学

慶應義塾大学と教育・研究上の
連携・協力協定を締結

リニューアルする
「一橋大学の歴史」の授業

語学留学

スペイン企業派遣

〈Practical Training in Spain〉

HEC Paris学長からのメッセージ

〈対談〉

一橋の女性たち

成城大学経済学部経営学科講師

金春姫氏

商学研究科准教授 山下裕子

個性は主張する

弁護士

松本三加氏

〈特集〉

地球の風 地域の風

吉野寿司株式会社 会長

橋本英男氏

CONTENTS



10



21



24



26



28



36



39



62



65

1 新入生へのメッセージ、新任研究科長・院長挨拶

巻頭特集 10 日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

●対談

国際基督教大学学長／鈴木典比古氏 VS 杉山武彦学長

**対話による教員とのダイナミックな関係が
学生の「個」を磨き、国際的に通用する人材に育てる**

17 新任者挨拶

18 教育・学生担当副学長／盛 誠吾

19 研究、国際交流、評価担当副学長／田近栄治

20 学外理事 住友電気工業株式会社社長／松本正義氏

特集 21 進化する大学

22 慶應義塾大学と教育・研究上の連携・協力協定を締結

24 リニューアルする「一橋大学の歴史」の授業

26 語学留学

28 スペイン企業派遣《Practical Training in Spain》

30 HEC Paris学長からのメッセージ

32 研究室訪問 chat in the den

連載企画 36 対談 一橋の女性たち

成城大学経済学部経営学科講師／金春姫氏

商学研究科准教授／山下裕子

連載企画 39 個性は主張する One and Only One

弁護士／松本三加氏

連載企画 46 世界を解く——第14回テーマ

「笑う」

47 ◎essay

50 ●会計学

52 ●経済学

54 ●法哲学

56 ●環境科学

58 ●文学

60 ●労働経済学

Book Review

62 「書評について考える」

63 『悩む力』

Love of Culture

64

特集 65 地球の風 地域の風

吉野寿司株式会社 会長／橋本英男氏

Campus Information

71

CsPR特別企画

74

Campus Information

75 ●前回に引き続き、AAAを取得しました

76 ●本学学生が、第107回文学界新人賞を受賞しました

●大学キャンパスが、テレビドラマ『ヴォイス—命なき者の声—』のロケ地として使用されました

77 ●アルコール・ハラスメント対策



新入生へのメッセージ ② 杉山武彦学長

新入生へのメッセージ、新任研究科長挨拶 ③ 商学研究科長／小川英治

④ 経済学研究科長／佐藤 宏

⑤ 社会学研究科長／落合一泰

新入生へのメッセージ、新任院長挨拶 ⑥ 法科大学院長／松本恒雄



新入生へのメッセージ



新入生へのメッセージ ⑦ 法学研究科長／大芝 亮

⑦ 言語社会研究科長／佐野泰雄

⑧ 国際企業戦略研究科長／竹内弘高

⑧ 国際・公共政策大学院長／渡辺智之

⑨ 経済研究所長／西澤 保



学長
杉山武彦
Takehiko Sugiyama

自ら求めて 勉学の場に入ってきたことを 忘れないでほしい

本を読まない学生は、定義的に、学生とは言えない

いま大学に対する社会の要請は、大学が「教育力」を整え、学生に「学力」をつけて社会に送り出すことです。学力を構成する要素はいろいろです。まず、基本的な「知識」、次に言語や数量的スキルなどの「汎用的技能」、そして、自己管理能力などの「態度・志向性」、さらに、総合的に物事を考える「創造的思考力」などが挙げられています。つまり、ITリテラシーや語学力といった基礎知識も必要ですが、さらにプラス・アルファを身につけることが期待されているのです。学生として、まずは、こうした社会の要求を知っておく必要があります。

そこで、大学は何よりもまず勉強する場です。学生が自分から何かを求める姿勢を持っていることが教育の前提です。皆さんは自ら望んで入学してきたわけですから、いつでも何よりも勉学を最優先する、という気持ちを堅持して下さい。それが基本のメッセージなのですが、一つ付け加えると、私は「本を読まない学生は、定義的に、学生ではない」と思っています。思索の力は本を読まないと得られない、と言っても過言ではありません。ぜひとも、本をたくさん読んで下さい。

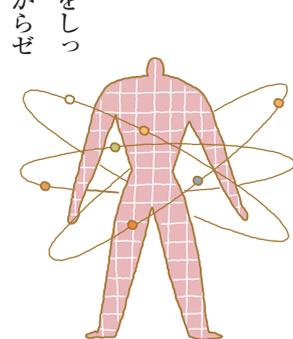
もう一つ。キャンパスは、品位と知性の支配する場、そして相互信頼とフェアプレイの場でなければなりません。大学は生活指導を行う場ではありませんから、これらの実現については、もっぱら学生個人個人の意識と努力に委ねることになります。しかし、ルール遵守の精神の形成と社会的マナーの習得は皆さんの将来にとってきわめて重要であることを強調しておきたいと思います。

大学は自由と自主独立を尊ぶ世界です。したがって、学生生活の基本も、自由選択と自己責任です。大学という環境を活用しながら、自由に自分で課題を設定し、チャレンジを続けてほしいと思います。チャレンジする心の持続のためには、人の日常の交流が大切です。仲間や教職員とのコミュニケーションの中から、皆さんがたくさんのことを学び取ってくれることを期待しています。(談)

自分に付加価値をつけてほしい



商学研究科長
小川英治
Eiji Ogawa



商学部の学生には、4年間商学・経営学をしっかり学んでもらいたいと思います。1年次からゼミで鍛え、積み上げ方式のカリキュラムで体系的に学び、現実の事象を深く見詰め、考える力を付けてください。4年間で自分に付加価値をつけているので、上手に活用してください。私たちの役割は、優秀な学生がより多くの付加価値をつけるための場を提供することだと考えています。

具体的には、1年次の導入ゼミでは議論をしながら専門書の読み方やレポートの書き方を学びます。2年次には英語の専門書を読み、ディスカッションします。そうした経験が、3、4年次に自分で本格的に勉強する際に役立つのです。実際に、私のゼミの学生たちは自ら進んでグループワークを行い、内外の大学の学生たちと活発な議論を戦わせます。

MBAの学生は実務経験者が多いので、この2年間で、いかに深く現実の事象を見詰め、そのメカニズムを論理的に考察するかという訓練をしてほしいですね。授業も教授陣による講義のほか、実務家が行う寄附講義もありますから、併せて受講メニューに加えてください。また、短期間の海外派遣も経験することができます。

学部生も大学院生も、英語のコミュニケーション・スキルを磨く必要があります。日本人学生は、内容のあるプレゼンテーションを留意したとしても、いざディスカッションとなると気後れしてしまいがちです。英語で議論できる能力を鍛えておかないと将来のビジネスシーンで立ち往生しかねません。さまざまな材料は用意されています。それらを活用して英語でディスカッションできるようにすれば、それこそ新しいグローバル時代の一橋大学生らしくなったといえるでしょう。(談)

新任研究科長挨拶

商学研究科長としてイノベティブに教育改革を推進する

さらに完成度の高いカリキュラムづくりを目指す

商学研究科は、実践志向の強さと国際性の高さといった伝統のなかで、一橋大学の中で最もイノベティブ(革新的)に教育改革を行ってきたといっても過言ではないでしょう。教育カリキュラムにおいて、導入、基礎、発展の段階的なカリキュラムによる4年一貫の積み上げ方式はもとより、「学部・修士5年一貫教育」をいち早く導入する一方、一橋大学の教育の最大の特色であるゼミナール教育を1年次から必修科目として履修できるようにしました。

具体的には、1年次に専攻分野に必要な基礎知識を習得するための基礎科目を学び、同時に導入ゼミで学問の世界へと誘います。2年次からは、商学や経営学のコアとなる標準科目がスタート。前期ゼミでは英文のテキストが使用されます。3年次からは、それぞれの専門領域における高度な内容の標準科目や選択科目を履修することになります。また、一橋大学伝統の後期ゼミが始まります。大学に入学してすぐに、商学や経営学の専門領域の勉強ができるような仕組みが用意されているのです。

さらに、「学部・修士5年一貫教育」によって、商学部の優秀な学生には5年間で、学士とともに、MBAなどの修士号を取得できる経営学修士コースと研究者養成コースがあります。

私たちは、学生にとって最高水準の教育を提供することに常に努めてきました。次期中期目標・中期計画では、これをさらによいものにすべく検討しているところです。このように、よりよい教育カリキュラムを実現していこうというタイミングで研究科長になったわけですから、責任の重さを感じています。

英語教育の充実と企業との連携強化

如水会の会員から企業人としての意見を聞くと、コミュニケーション

ン・スキルとしての英語を身につけた学生への期待の声が多く聞こえてきます。英語教育を充実することで、こうした実業界のニーズに応えていきたいと考えます。英語教育そのものの改善が求められます。同時に、英語による専門科目の授業を増やしていくことも必要です。

企業との連携強化も必要です。商学研究科では、すでに多数の寄附講義が提供され、2007年度からは経営学修士コースに金融プログラムも立ち上がりました。さらに、2009年度から経営学修士コースに「ホスピタリティ・マネジメント」関連科目が提供されます。一方、研究者養成コースにおいては、優れた研究プロジェクトとして採択された、グローバルCOE「日本企業のイノベーション——実証的経営学の教育研究拠点」を通じて、国際的な学会やコンファレンスで積極的に発言する経験を積んで、国際的に活躍できる若手研究者を養成しつつあります。

改革により伝統を発展的に生かしていく

整理すれば、学部教育のカリキュラムでは、1年次の基礎科目と導入ゼミから始まる4年一貫教育において、入学当初より専門領域の学問に触れながら、一橋大学の教育の特色であるゼミで教授陣とともに学べます。経営学修士コースについても、実業界のニーズに応えながら、更なる発展を進めています。研究者養成コースではグローバル化をさらに進めて、若手研究者の国際化をサポートしています。

伝統のなかで守勢に回って過去の遺産を食いつぶしていくのではなく、イノベティブに改革を続けていくことで伝統をさらに発展させて、生かしていこうという発想です。

今後は、商学研究科における教育及び研究の成果についての広報にも力を入れていこうと考えています。学生向けによりよい教育を行うために、企業向けに商学部、商学研究科の教育をアウトリーチするのが目的です。ホームページなどを有効に活用して、英語での発信にも力を入れていきます。(談)



経済学研究科長
佐藤 宏
Hiroshi Sato

経済学の広さと深さを体験してほしい

大学時代、もっとも大事なことは、学問的な「ものの見方」を身につけることです。授業で学ぶ個別の事からは、いずれ陳腐化していくかもしれませんが、複雑な社会現象を、経済学の視点から整理する訓練は、生涯の財産になります。経済学の視点から整理する訓練は、生涯の財産になります。学部入学直後から勉学を積み上げていく必要があります。このため経済学部には、理論から歴史までをカバーする入門・基礎レベルのコア科目が設置されています。経済学の基礎的な問題関心は、人々がどのように意思決定し、行動するのかという点にあります。人々の行動は、さまざまな社会的・歴史的制約条件のもとにあります。すなわち、経済学を深く理解するためには、社会、政治、文化、歴史、そして科学・技術に及ぶ幅広い領域に関心を向ける必要があります。その意味で、経済学部で学ぶということは、将来、専門的な職業人として活躍するための教養を身につけることにはほかなりません。ところで、海外には、修士や博士の学位を取得して専門的な仕事に携わっている「文系」出身者が数多くいます。グローバル化のなかで、皆さんは、否応なくこうした海外の人々と付き合っていくこととなります。経済学研究科には「学部・大学院5年一貫教育システム」が設置され、熱意と努力次第で学部入学から5年間で修士学位を取得する道も開かれています。皆さんが、学士課程を通じて経済学を中心とした教養を深く、広く身につけ、将来の糧にしていくことを、願っています。(談)



新任研究科長挨拶

確かな専門知識と幅広い教養が備わっていること。それがグローバル社会で活躍する人材の姿です

経済学部の幅広さ

学士課程の教育について、もっとも大事なことは、学生に学問的な「ものの見方」をしっかりと身につけてもらうことです。経済学部の学士課程カリキュラムの一つの特長は、学部入学直後から、コツコツと勉学を積み上げていけるように、経済理論、経済思想、統計学、計量経済学、経済数学、経済史の諸領域をカバーする入門・基礎科目(100番・200番台コア科目)を整備していることです。入門・基礎科目は、経済学部生にとっては専門教育の入り口であり、他学部生にとっては、社会科学分野の教養科目として役立っています。コースワークを補完するものが本学伝統のゼミナールですが、3・4年生のゼミだけでなく、1・2年向けの基礎ゼミを質的に充実させ、関心がばらけてしまいがちな1・2年生を、確かな専門知識とそれを支える幅広い教養の修得へ動機づけていくことが重要だと考えています。

大学院レベルの知識を到達目標とした学部・大学院一貫教育

海外には、修士学位や博士学位を持って専門的なポジションで活躍している「文系」出身者が数多くいます。グローバル化のなかで、日本の経済学部卒業生も否応なくこうした海外の人々と付き合っていくこととなります。この状況をふまえて、経済学研究科は、これまで約10年間をかけて、入門・基礎レベルから大学院レベルまで、階段を踏みしめるように学んでいく、大学院・学部一貫教育カリキュラムを構築してきました。より進んだ勉学を求める多くの学部学生が、大学院レベル(400番台)の科目を履修しています。さらに

2004年度から、「学部・大学院5年一貫教育システム」という制度を開始しました。これは、通常6年かかる学部入学から大学院修士修了までを、熱意のある学生であれば5年間で終えることを可能にする仕組みです。また5年一貫教育システムのなかに、「公共政策」、「統計・ファイナンス」、「地域研究」という、目的を絞った「専門職業人養成プログラム」も用意されています。大学院修士課程入学後に、2年間で修士学位を取得することを前提として、このプログラムに参加することもできます。

先端的な研究活動にもとづく教育活動

経済学研究科には、経済学研究科と経済研究所における2つの21世紀COEプログラムを継承して2008年度から始まったグローバルCOEプログラム「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」を始め、文部科学省受託事業、大学院教育改革支援プログラム、そして大型科研費(基盤研究S、基盤研究A)など、多くの大型研究・教育プロジェクトが走っています。2008年には21世紀COEの成果を発展させるとともに、経済学研究科が担う研究・教育プログラムを長期的に連結する「環」として、研究科長をセンター長とする「現代経済システム研究センター」が発足しました。これより先、2007年度には大学院教育改革支援プログラムの支援によって「金融工学教育センター」が設立されています。さらに2009年度からは、JICAとの連携による「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム」がスタートします。今後も積極的に大型の競争的資金を獲得し、先端的な研究活動にもとづく教育を推進していくことが、社会科学の研究大学に属する経済学研究科の責務であると思っています。(談)

「一専多能」の力を大いに磨いてほしい



社会学研究科長
落合一泰
Kazuyasu Ochiai

皆さん、入学おめでとございます。

21世紀に入り、産官民学の間で人材の流動化が加

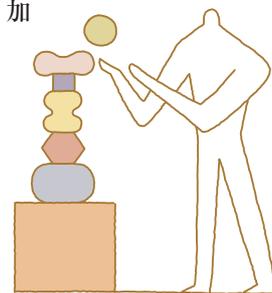
速しています。こうした社会で必要な力とは、「一専多能」——一つの深い専門性を持ちながら、多くの分野において知識や能力を広め高め、それを持続する力です。それが身につけて初めて、社会人となったときに応用力や展開力、リーダーシップを発揮できるようになります。

社会学部・社会学研究科では、この「一専多能」をめざす学生を組織的に応援しています。それが可能なのは、「社会学」だけを勉強する教育組織ではないからです。商学、経済学、法学以外の社会科学・人文科学のさまざまな領域を広く深く学際的に学ぶ場だからです。

社会学部では、入門ゼミ、基礎科目、専門への導入科目、発展科目、卒業論文と勉強を積み重ね、ゼミで仲間とともに優れた教授陣に採まられてください。さらに、大学派遣留学生制度にも挑戦してください。

大学院社会学研究科では、専門性を高めるとともに企画力や実践力を強化する「高度職業人養成科目」が用意されています。その後の進路選択を支援するキャリアアカウンセラームも2名常駐しています。

高名なチンパンジー学者ジェーン・グドール博士は、「仕事とはまず、自分をたべさせてくれるもの。また、自分に喜びをあたえてくれるもの。そして、できたら他人にも喜びをあたえることができるもの」と言いました。謙虚ですが、社会の役に立つ人間でありたいという強い意志をたたえた言葉です。大学での日々は、それを考えるためにあります。新入生の皆さんには、数年後にどのような自分として卒業・修了したいかをつねに考え、その目的に向けて自分を鍛え、「一専多能」の力を大いに磨き、学び続ける力を養ってほしい。そう期待しています。(談)



新任研究科長挨拶

10年以上にわたる大学院教育改革の成果を踏まえて、学部教育にも取り組む

大学院教育の充実を図る

大学院重点化政策の進展に対応して社会学研究科は、10年以上にわたり大学院教育の充実に努めてきました。平成18～19年度には文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」助成を獲得して「社会科学の先端的研究者養成プログラム」を展開。大学院生の実践力、調査力、企画力、英語発信力、プレゼンテーション力、教育力などの高度化を目指す実践的な科目を開設しました。

このプログラムには1年半でのべ422名の大学院生が参加。そのうちのべ56名が留学生と、対外的にもアピールする内容でした。事業期間終了後の事後評価書では、最高の評価を得たばかりでなく、人社系大学院で唯一「他大学への波及効果が期待できる特徴的な取組」と特記されました。このことも、この取組の先進性と充実した内容を示しています。

平成19年度からは、この事業をさらに拡大して、文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」の一環として「キャリアデザインの場合としての大学院——入口・中身・出口の一貫教育プログラム」を推進しています。

ほかに、フェアレイバー研究教育センター、ジェンダー社会科学センター、平和と和解の研究センター、市民社会研究センターなど研究科内センターの活動も活発で、公開講座、連続市民講座などとともに社会との連携を深めています。

社会学部としての学士力を考える

このように10年以上にわたり大学院教育の充実に努力を注い

てきましたが、「学士力」が問われる時代となった今、大学院教育に力を注ぎつつ社会学部の学士課程の充実も図っていく必要があります。

学則には社会学部の人材養成目的がこう記されています。

「社会学部は、様々な専門領域にわたる社会科学の総合的な学修に基づいて、現代社会の諸問題を多角的な視点から批判的に分析できる知性を持ち、豊かな構想力と実践的な解決力を備えた人材の育成を目的とする」

この理念が現行のカリキュラムでどのように実現されているか、その整合性を再点検し、必要な改善策を講じたいと考えています。

教員の1/4が定年を迎える時代を逆手に取る

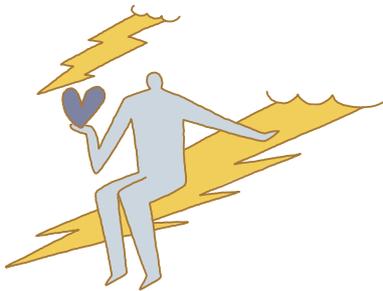
社会学部の教員は現在64名ですが、今後4年間で16名が定年退職を迎えます。手をこまねいていると、ゼミや開講授業の減少など、学部、大学院教育への影響が生じます。このピンチを、逆に教育強化のチャンスへと転じたいと思っています。それには、学則が謳う人材養成理念の実現に向けて、将来構想、人事計画などを含めた総合計画を策定することが必要です。それは、「社会学部」のあるべき姿を鮮明に打ち出すものになるでしょう。

こうした考えを具体化するために、将来構想・将来計画委員会を研究科内に立ち上げました。研究科長、評議員のほか、今後を担う若手の教授や准教授がメンバーです。次期中期目標・中期計画、定年退職教員再雇用制度など、大学執行部の提案を勘案しながら、鋭意検討していきたいと考えています。(談)

クールな頭とホットな心を持つ法曹を目指そう



法科大学院長
松本恒雄
Tsuneo Matsumoto



法科大学院には多様なバックグラウンドの人材が集っています。互いに刺激し合いながら法律以外のことも積極的に学んでほしいと思います。これは、法曹を目指す学部学生も同様です。法律は、世の中を動かすツールです。法律の対象となる社会や人間、自然を学び、歴史というタテの流れと世界というヨコの広がりを知っておく必要があります。幸い、一橋大学は社会科学の総合大学ですから、こうした知識を身につけるには最適の環境といえます。

法科大学院生には、「法曹になろう」と思った最初の「志」の実現に向けて、教員やクラスメイトと深い関係をつくりながら勉強をしていってほしいと思っています。目先の受験ではなく、自分の目指す将来の法曹像を目指して、モチベーションを保ち続けてほしいということです。

一橋大学法科大学院は高い司法試験合格率を出し続けています。2008年度の合格者は78名。年次をまたがった合格者もいますが、1学年の定員が100名で78名の合格ということは一橋の教育力の高さを示しています。これは、合格率以上に意味のある数字だと思います。目先の受験にこだわるのではない長期的な視点による教育で実力を付けることと、合格とがリンクしているのです。

法曹を目指す学生や院生には、「クールな頭とホットな心を持つ」と言いたいですね。クールな頭とは、冷静に法律の議論ができる力のこと。そして、ホットな心とは、世の中の不条理な問題に本気で憤ったり、共感したりできる力のことです。憤りや共感を法律の議論に乗せることで、社会正義を実現するのが法曹の役割といってもいいでしょう。(談)

新任院長挨拶

新司法試験はあくまで通過点、資質豊かで特色ある法曹を社会に送り出す

ビジネス法務、国際的な視野、人権感覚

一橋大学法科大学院では、(1)ビジネス法務に精通した法曹(2)国際的な視野をもった法曹(3)人権感覚に富んだ法曹——という三つの資質を兼ね備えた法律家の養成を目指しています。つまり、一人ひとりの学生はこれらのすべての資質を兼ね備えたいうに、独自の特色を身につけていくことを期待されています。これは時代の要請であり、一橋大学の強みが発揮できる分野でもあります。

まず、ビジネス法務。そもそも一橋大学は商法講習所としてスタートした大学であり伝統的にビジネス分野で強みを発揮しています。ビジネス街の神田キャンパスにある国際企業戦略研究科経営法務コースの教員や大手渉外事務所の弁護士等の協力を得て、3年次にはビジネス・ローコースを提供。このコースの特徴は実践性にあり、新司法試験受験には直接役立ちませんが、多くの学生は趣旨を理解して受講しています。

次の国際性については、国際的視野を養う科目を用意しています。教員も、母国の弁護士資格を持つオーストラリア人や商社のイギリス現地法人で経営や法務に携わったソシリター資格を持った人などが専任教員として指導。国際社会が求めるリーガルマインドおよび実務的な法のあり方を学びます。

人権関係に関しては、人権実践に関するリーガルクリニックなどの科目を設けて、21世紀社会の人権について、実社会や実務、現行法との関連の中で学べるようにしています。さらに、人権クリニックなど現実に進行している訴訟に間接的ではありますが関与するという実践型の教育も行っています。

合格実績が素晴らしいのには理由がある

一橋大学法科大学院では、「新司法試験は通過点に過ぎない」と考えています。あくまで、法曹として活躍できる人材の育成を目指しているのです。新司法試験で、トップクラスの実績を維持していることから、この方針に誤りがなかったことがわかります。

私なりに成果を挙げられた結果を分析すると、(1)入学試験で優秀な学生を選抜できた(2)教員が熱心で創意工夫に溢れる授業を行っている(3)1学年の定員100名と適正なサイズだった——の3点が挙げられると思います。

「あなたは、一橋大学法科大学院のためにどのような貢献ができますか?」。入学試験の面接で行う定番のこの質問は、学生に入学後の学習生活を考えてもらう面では、それなりの効果があるようです。

入学定員は、ただ少なければいいというわけではありませんが、背景の多様な学生が多様な議論を戦わせ、切磋琢磨ができる環境づくりには少人数集団である必要があるのです。議論を戦わせることがないと理論の理解が深まりません。実際に、いい仲間にも恵まれた人が新司法試験に早く合格しています。

なお、2007年の大学評価・学位授与機構による認証評価で、一部評価基準に適合しないとの指摘を受けました。教育効果の問題というのではなく、ごく一部の科目が大学側の予想を上回るなどの事情で上限受講学生数をオーバーしていたのです。そこで、2008年度からはその科目を2クラスに分けるなどにした結果、現在ではすべて基準に適合しています。

学生の能力、教員の熱意、少人数教育の優位性を生かして、これからも三つの資質の上に豊かな個性の花を咲かせる法曹を社会に送り出していきたいと思っています。(談)

《新入生へのメッセージ》



法学研究科長
大芝 亮
Ryo Oshiba

大学、あるいは大学院を通じて 「何が問題か」を発見してください

「ご入学おめでとうございます。」

高校の勉強と違って、大学では「世の中で何が問題になっているのか？」を自分で発見していかなければなりません。それができただけでも4年間の大学生活は十分実りがあるものだと、私は思います。しかし、いきなり問題を発見しろといっても、実際にはそう簡単なことではありません。では、どうしたらいいでしょうか。

一橋大学自体小さな大学ですが、中でも法学部は一番小さな学部です。170名の学生に対して教員は60名超と、その比率は極めて高いものがあります。この環境を活用して積極的に教員と接してほしいと思います。

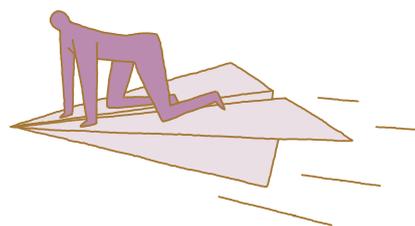
2番目に、法学部ですから、法律や国際関係を主として履修するのは当然ですが、一橋大学は学部学科の垣根が低いので、商学部や経済学部、社会学部など他学部の科目も併せて履修してほしいと思います。これが将来、必ず生きてきます。

3番目に、授業ばかりでなく大学の各種のセミナーやシンポジウムにも参加してほしいと思います。法学部の特別講演会をはじめ、国連大学や各官庁、シンクタンクによるセミナーがあります。法学部関連のインターカレッジなセミナーにも参加して、他流試合をしてきてもらいたいですね。

4番目に、充実した留学制度を活用して留学することを極めて強く勧めたい。もし迷っているのであれば、まず留学試験を受けることです。

大学院のレベルでは、専門的な研究に加え、ディベートや論文の書き方など研究のためのスキルに関する授業も充実させてきました。これら履修して、プレゼンテーションの技法も学んでほしい。また、如水ゼミでは、法律や国際関係に関する先輩方からゼミが提供されていますから、積極的に参加してください。教員とはまた違った話がきけます。

こうしたさまざまな機会を生かして、自分自身でグローバルな現代社会において「何が問題か」を、4年間、あるいは大学院を通じて発見してもらえればと思います。(談)



《新入生へのメッセージ》

社会は成熟した人格を求めている



言語社会研究科長
佐野泰雄
Yasuo Sano

何かと束縛の多い受験生活を抜け出した新入生諸君が大学生活に期待する第一のもの、それは自由でしょう。確かに、解放感とともに大学のキャンパスを歩いていると、大きな自由と可能性を手に入れた気になるかもしれません。自由と可能性を手に入れているという実感は快いものです。ただ、この快い感触に固執するあまり、卒業に必要な単位を取るために最低必要なことしかせず、あとは、負担と労力のかからない好きなことをする(結局なものもない)といった行動様式が生まれがちです。そうした行動様式の原理は、自己愛的で唯我的で没倫理的な「欲望」です。しかし、遅かれ早かれ、人は、欲望を統御すること、目の前に広がっているかに見える可能性なるものに一つ一つ見切りを付けていくことによって成熟の階段を上っていかねばなりません。学生諸君が学部の4年間で知的な訓練(デイシプリン)を身につけ、それを利用して成熟のプロセスに乗ってこれれば、と願っています。一橋大生はいわゆる就職貴族ですから、今のところ、欲望全開・成果ゼロの4年間でもそれなりの就職先は得られるでしょう。しかし、社会は、学士課程修了者に対して、成熟した人格と知的訓練の成果を期待し始めており、右記のような古いモデルも遠からず淘汰されていくように思われます。もちろん、大学側もそうした潮の変わり目に敏感に対応し、制度改革を進めていかなければならないことは言うまでもありません。(談)



大学のアセットをテコにして 世界の学生とコラボしよう



国際企業戦略研究科長
竹内弘高
Hiroataka Takeuchi



今日の金融危機は何を表しているのでしょうか？それは世界が連動していることです。これまでの日本は、国内市場があり、産業基盤がありましたから内向きでもよかったのです。しかし、産業をみても典型的なドメスティック産業と思われていた小売業さえ確実にグローバル化しています。グローバルゼーションには段階があります。1.0が国、2.0は企業、そして3.0は個人のグローバル化です。グローバル化、フラット化が進む3.0の社会には、日本人のためのポジションなどありません。できる人材が仕事を獲得できるのです。

国際企業戦略研究科（ICS）も例外ではありません。今年の入学者の約80%は留学生です。残念なことに、面接を含める入学試験を終えると日本人が減ってしまうのです。特に、一橋大学出身者が激減しています。その差はどこにあるのでしょうか？問題は、語学力と教養です。つまり、学部時代にどれだけ自分を鍛えてきたかが、問われるのです。大学時代の4年間にどれだけ実のある体験をするかに掛かっています。一気にグローバル化が進んでいることを認識して、取り残されてしまうのではないかとという危機感を持つてほしいと思います。一橋大学に入学したのですが、一橋大学を超えなければなりません。大学がオファーしてくれるもので満足してはいけません。一橋大学が持つアセットをテコに世界を相手にする気概と実行力が必要なのです。（談）

高度な知識とスキルを備えた、政策立案者を育てます



国際・公共政策大学院長
渡辺智之
Satoshi Watanabe

国際・公共政策大学院（IPP）は、政府、官公庁、国際機関で活躍する人材や民間の政策アナリスト等を育成する専門職大学院として、体系的な高度専門教育を先端研究の基礎に立って行う場として機能しています。留学生比率も3分の1を超えており、国際性を身につける環境も整っています。

英語による講義も充実させており、英語でのセミナーやシンポジウムなど、英語で政策問題を考える機会も数多くあります。また、イタリアの大学との交換留学制度をはじめ、外国の大学等との交流機会も増やしています。グローバル化という世の中の流れに沿った人材育成を行っているのです。

現在は経済状況が芳しくありませんし、日本では大学院修了者への需要がまだ少ないのも事実です。しかし、長期的トレンドで見れば国際化、情報化時代に求められる高度専門職業人への期待には変わりはないでしょう。これからの社会で重要なのは、自分で発想し行動できる人材です。その意味では、大学も大学院も教育の質が厳しく問われるようになっていきます。

実務経験者である社会人学生は自覚の強い人が多く、勉強に対する姿勢が違います。また、新卒学生も明確な目的をもって入ってくる人が増えています。こうしたリカレント組と新卒組が交じって学ぶことは大いに意味があります。さまざまなバックグラウンドの人が違った発想で議論に加わることで、互いに刺激しあって幅広い見方ができるようになるからです。（談）



“Cool Heads but Warm Hearts” : 社会科学の統計・実証研究と古典



経済研究所長
西澤 保
Tamotsu Nishizawa

経済研究所は、一橋大学の附置研究所です。大学の附置研究所は、特定の領域の共同研究を集中的に深めたり、一定の広がりのある研究領域を対象にして公共性・継続性のある研究を長期的に進める機関です。本研究所は、日本とアジアの「長期経済統計」など、統計データに基づいた社会科学の実証研究をコアにし、加えて補完的な理論、制度・政策研究を推進しています。この趣旨に沿って、本研究所は国内外の研究者コミュニティの独創的かつ先端的な共同研究の国際的な拠点となるべく、研究活動を進めています。文部科学省の21世紀COEやグローバルCOE、特定領域研究、学術創成研究、特別推進研究、等々、統計データを活用した実証研究、制度・政策研究を中心に、「日本と世界経済の高度実証分析拠点」に向けて、さまざまな共同研究を展開して大きな成果を上げてきました。

経済研究所は経済学研究科と共同で大学院教育に携わっていますが、こうした共同研究プロジェクトにも大学院生がフェローや研究員、RAなどとして積極的に加わっており、そういうことを通じて若手研究者の育成にも力を入れています。研究成果を国際コンファレンスやセミナーで公開するなど、研究に関心と意欲がある大学院生には、国際水準の研究に参加する環境を整えています。大学院生など若手研究者をはじめ学生の皆さんには、さまざまなデータを使った実証研究を通じて、事実をきちんと見極める姿勢を養ってもらいたいと思っています。

私個人の専門に引きつけて新入生に伝えたいメッセージは、社会の状況をきちんと観察・把握し適切な判断をするために、事実を科学的に見極める「冷静な頭脳」

「Cool Heads」と哲学する「暖かみ心」「Warm Hearts」を養ってもらいたい、そのために社会科学における古典を学んでほしいということです。「Cool Heads but Warm Hearts」は、マーシャルのケンブリッジ大学教授就任講演の一節ですが、感受する心を養い、客観的な事実を冷静に分析する姿勢を身につけるためにも古典を学ぶことは重要だと思います。(談)



金融危機に関する公開討論会

未曾有の世界的金融危機に対して、一橋大学は何ができるか？

——「金融危機に関する公開討論会」を開催

2008年11月19日(14:30~17:00/於兼松講堂)に「金融危機に関する公開討論会」が開催されました。主催はグローバルCOEプログラム「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」。一橋大学の金融専門家が集まり、この危機の本質、マクロ経済学への含意、政策当局の対応、金融工学の効用と限

界、アジア経済との関係、といった複合的な観点から解説を実施。参加した462名もの研究者、学生、市民からの質問にも対応して、熱のこもった議論が展開されました。

※発表資料や映像記録は一橋大学ホームページ

(<http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2008/1225-2.html>) 参照



●講演プログラム

1	開会挨拶	山内 進 (一橋大学副学長)
2	総論	北村行伸 (経済研究所教授)
3	金融危機の本質とは	齊藤 誠 (経済学研究科教授)
4	マクロ経済学から見た問題点	塩路悦朗 (経済学研究科教授)
5	金融政策当局の対応	前原康宏 (国際・公共政策大学院教授)
6	金融工学と金融危機	渡部敏明 (経済研究所教授)
7	アジア経済との関係	小川英治 (商学研究科教授)
8	質疑応答	

日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

リベラルアーツによる世界基準の全人教育を目指しているのが、国際基督教大学。

その鈴木学長は杉山学長と同期の一橋大学OBでもあります。

しかも、現在は、一橋大学の経営協議会委員をお務めいただいています。

そこで、リベラルアーツを推進している立場はもちろん、一橋大学のOBとしての視点、

私立大学を運営している立場から、大学のあり方や

国際的に通用する人材の育成について、忌憚なく語っていただきました。





対話による教員とのダイナミックな関係が
学生の「個」を磨き、国際的に通用する人材に育てる

国際基督教大学学長

鈴木典比古氏

一橋大学長

VS

杉山武彦

リベラルアーツの基本は、徹底した「対話」による全人教育にあります。
それは一橋大学伝統のゼミのあり方と相通ずるものがあります。かつての一橋大学の教育を振り返り、
国際基督教大学のリベラルアーツを知り、グローバルゼーションの中にある大学経営のあり方を探る……。
鈴木、杉山両学長の「対話」の中からも、さまざまな刺激的な意見がでてきました。

一橋大学の教育は、 50年もののビンテージ教育？

杉山 世界はグローバルゼーションの真っ只中にあります。こうした時代に、大学はどうあるべきか、どういう人材を社会に出していったらいいのかなど、大学はさまざまな課題を抱えています。国際基督教大学（ICU）の鈴木学長に、私立大学の学長としての立場、一橋大学のOBとしての視点、またリベラルアーツ教育の推進に高い評価を

得ている教育者としての立場などから、いろいろなお話を伺いたいと思っています。

鈴木 私は、一橋大学には感謝しています。授けてもらった教育はもちろん、学園が与えてくれたすべてのものに対してです。タヌキが顔を出すキャンパス環境も含めて、自分が十分咀嚼してどれだけ自分の肥やしにすることができたかわからないくらい、そこには深いものがありました。私の思い出と経験からいえば一橋大学は社会科学の総合大学ですが、それと同時に全人教育の場でもあり、ICUが目指すリベラルアーツ教育に通じるものがありました。私



はそれを存分に享受することができたのです。

学部では板垣興一先生、大学院では小島清先生の指導を受けました。実は、ICUの教員になってから数回、板垣先生にICUにお出でいただいて学生と対話をしてもらいました。その内容や対話の仕方はICUにぴったりでした。実際に対話した大学院生もそう言っています。一橋大学にはこうした総合的に学問を修めた先生方がいらっしやいました。ですから、一橋大学は自らが思っている以上にポテンシャルがあると信じています。ちなみに一橋の素晴らしさは、30~50年経ってじわじわと効いてくるものです。一橋大学の教育もICUのそれもビンテージものなんです(笑)。卒業後数年で、「良い教育を受けた」と思うような教育では逆に問題があるのかもしれないね。

杉山 ICUは内外に知られたリベラルアーツのリーディング大学です。リベラルアーツでは、対話を中心とし

た全人教育がポイントになるということですね。

鈴木 板垣先生は博学で学問的にはきっちりとした世界を持っておられましたから、板垣ゼミでの対話といっても1対1というより、学生は板垣先生の掌の上で暴れていたようなものです。学生に自由に考えさせて発表させ、学生同士のディスカッションをさせるといった具合に、学生を主役にしてくれる雰囲気のあるゼミでした。時に先生が手を差し伸べて、掌の上で転がされるといった雰囲気は、杉山先生の指導教官で、私も学部の壁をこえて指導していただいた宮川公男先生のゼミにもありました。私は勝手に宮川先生の教え子だとも思っています。小規模校だけに、学生と教員のコンタクトは密接で、自ずから対話が発生します。そうならないとコミュニケーションがスムーズにならないのです。もっとも、こうした環境を生かさなければならぬのは学生のほうですが……。

杉山 先ほどおっしゃった「卒業後数年で、良い教育を受けたと感じる」ような、いわば即効性に優れた教育で十分なのか、という指摘が印象に残ります。自分が成熟してきて初めてそのよさがわかる「ビンテージものの教育」であるべきだということですね。

その一方で、大学はまずは学生に「学士力」をつけて社会に送り出すべきだという社会的な要請もあります。この学士力については、どうお考えですか。

鈴木 やはり、キーワードは対話です。私はアメリカのビジネススクールで10年間教育を行ってきましたから、対話の重要性を心の底から叩き込まれています。クラスは教員と学生とでつくりあげるもので、対話が中心になります。学生は授業で対話ができるように予習をしなければなりません。準備するにはその内容を前もって知らなければなりませんから、シラバスが重要になってくるのです。日本でもここ数年でシラバスが定着してきましたが、まだ対話を可能とするレベルのシラバスと言えるまでに至っていないのが現状ですね。

クラスでは対話により知識や考え方のやりとりをするわけですが、そこには自分というものがなければなりません。私は対話をピンポンやボクシングに喩えます。ラリーを続けていくことがいいトレーニングになりますし、それに耐えていくには精神力とロジックが欠かせません。これこそが「個」を磨いてくれるのです。



鈴木典比古 (すずき・のりひこ)

1945年生まれ。1968年一橋大学経済学部卒業。同大学院経済学修士。インディアナ大学経営学博士(DBA)。ワシントン州立大学助教授、准教授、イリノイ大学助教授などを経る。その後、国際基督教大学国際関係学科教授、同大学学務副学長を歴任。2004年同大学学長就任。社団法人日本私立大学連盟常務理事、財団法人大学基準協会理事、同大学評価委員会委員長。『多国籍企業経営論』『日本企業の人的資源開発』『企業戦略と国際関係論』など専門分野の著書、論文多数。



学士力 = f (教育力) これを逆転するダイナミズム

鈴木 学士力というのは、教科書的に言えば知識の量で量るという面があるでしょうが、それ以上に対話に耐え得るような人材づくりが重要だと思っています。それが学部教育のすべてであり、それに耐えられる教師力、教育力が大学側や教員側に備わっているかどうかが問われているのです。学士力と教育力の関係は数式で言うと——。「学士力 = f (教育力)」になります。対話を基本とすると、学生は「あの先生をやっつけてやろう」と準備してきますから、「学士力 = 教師力」となることがあるかもしれません。場合によっては、「教育力 = f (学士力)」のこともあり得ます。教員も学生から教えられるわけですから、逆転することがあってしかるべきなのです。そんな気概のある学生をつくりだす、そんな場を提供するのが教育なのです。

杉山 対話に耐える力を持つことがどういう教育から生まれるかという、学士力の要素の一つであるリテラシー（基礎的なもの）を学ぶ過程で付随的に身につくという面もありますよね。学ぶ過程で同時に対話に応じる力がつく、という関係もあるような気がします。

それはそれとして、関数関係は本当に逆になり得るのでしょうか。

鈴木 学生と教員との関係がダイナミックな状況にあれば、関数関係は逆転します。

杉山 残念ながら最近では、「先生を凹ましてやろう」という学生が少なくなってきました。

鈴木 確かに、大学で積極的な対話力のある学生をつくるという視点で言えば、本来の意味での高大連携が必要になります。高校での下地があってはじめて大学教育は継続できます。高校教育が文系理系に分かれて知識のつめ込みをしているようでは対話を中心とした大学教育に継続できません。学生は、磨かれるべき原石ですが、原石磨きは対話による切磋琢磨による自分づくりが必要です。20世紀は偏差値だけで考える人工植林型の人材育成で、それなりの成果を挙げてきました。しかし、21世紀には1本1本の木に個性がある雑木林型人材育成が必要になってきました。その基本になるのが対話であり、関数関係が逆転するぐら

いのダイナミックな教育状況が理想になります。

中央教育審議会は学士力を、「知識」「技能」「態度」「創造的思考力」の4分野13項目で示しています。学士力に対して、教師力、教育力として何がオファーできるのかが、私たちには突きつけられています。これを教員たちはきちんと認識しているのでしょうか。それが問題ですね。

主役の交代を図った ICUの大学改革

杉山 ICUでは、学科の壁を完全に取り払ってしまいましたね。

鈴木 2008年4月に改革しました。この改革は大学の主役の交代でもあります。これまでは、大学が各学科にふさわしい原石を選んでいましたが、これからは学生が入学して



杉山武彦（すぎやま・たけひこ）

1944年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業後、1970年同大学大学院商学研究科修士課程修了、1974年一橋大学大学院商学研究科博士課程単位修得退学。1974年成城大学経済学部専任講師、1977年一橋大学商学部専任講師、1980年同大学商学部助教授、1986年同大学商学部教授、商学部長、副学長を歴任し、2004年12月より現職。研究分野は交通経済。





から自分がどうなりたいのかを2年間掛けて考えるのです。学生は大いに悩みますが、それだけの価値があります。これまでのように、自分の一生を偏差値や得意分野の有無くらいで決められてはたまらないからです。実際に新2年生に話を聞くと、「自分で専攻を決めるのは本当に苦しい。でもそれを楽しんでいる」と言う人が多いですね。社会人入学の学生は、「自分が自分の責任で自分の方向を決めるのは初めての経験だ。CANとMUSTがミックスしている状況に直面できるのは幸せだ」と語ってくれました。

杉山 OBからは、「一橋大学も商経法社のワクを外した入試を行ったらどうだ」といった意見を言われることがあります。現状では、学部ごとにアドミッション・ポリシーを掲げるなど学部の独自性の発揮も重要とされていますから、その折り合いが難しいところです。

鈴木 ICUの場合は、もう一步世界基準に近づかなければいけないという危機感がありました。またこれまでの入試では2次志望まで行っていましたから、第2志望の学科に入学して学生は入学早々から転科を考えるといったケースがままありました。リベラルアーツ教育がこうあってはなりません。

杉山 学科をなくして31の専修分野に分けたと聞いていますが、学生はどのように選べるのですか。

鈴木 31の専修分野(メジャー)は、24のディシプリン・ベースド・メジャーと7つのインターディシプリン・メジャーがあります。インターディシプリン・メジャーには、環境研究などユニークなものもあります。学生は専修分野をどう選んでも構いません。シングルメジャー、ダブルメジャー、メジャー＝マイナーといったウエート付けの組み合わせができます。選択科目は40以上あり、自由度が高くなっています。専門科目30単位、語学、体育以外は自由になっています。

学生に「なぜICUに入ったのか」を聞いたところ、自分の志向性や人生目標などを考えて、「選択が自由にできるから」と答えた学生がかなりいました。実際に、学生の選択は国際関係論や哲学・宗教、社会学、コミュニケーション、平和研究、経済学、語学、音楽、生物などかなりばらけています。ちなみに、毎学年度の終りには、自分がど

れだけ成長したかを記録させます。これをアカデミックポートフォリオとして、卒業まで記録します。ICUで自分がこういう人間になったということがわかりますから、就職など将来の進路を考える際には役立ちます。

国際学生寮で 24時間リベラルアーツ漬け

杉山 これまで学士力をつけるための教育のあり方として対話の重要性を伺ってきました。対話をしながら、ICUではどんな人材を世の中に出していこうと考えているのでしょうか。

鈴木 バイリンガルによる対話の徹底です。英語教育ばかりでなく日本語教育も大切にしています。すべての授業を英語で行うといった極端なやり方では、英語も日本語も中途半端になってしまいます。日英両語で議論ができるようにスイッチできるレベルまで育成するような教育を行っています。二つの言語の持つロジカルな面と歴史的な背景の違いを身につけることができれば、国内海外を問わず飛び立っていけるポテンシャルはあるはずです。私は国際人という言葉は嫌いです。国内外を問わず地に足をつけて世の中に貢献しているような日本人の育成こそが、ICUの目標です。この点で、一橋大学の学生は必ず高いポテンシャルを持っています。

杉山 一橋大学でいうと、伝統的には、海外雄飛を目指す卒業者が多数を占めていました。しかし、最近では特段こうしたことは当然のこととしてとくに強調されない傾向もあります。ツール、リテラシーとしての言語は身につけなければならないという発想はむしろありますが……。

いずれにせよ、英語ができるだけでは、国際的に活躍できる人材たり得ませんね。

鈴木 リベラルアーツは全人的教育だと言いました。それは授業中だけの指導で身につくものではありません。24時間をどう過すかということが重要なのです。全人教育の時間はそこに組み込まれているのです。そこで、現在キャンパス内に学生寮を建てています。ICUが開学したころは

約50%の学生が入寮していましたが、現在では十数%に過ぎません。24時間リベラルアーツに浸るには、寮生活の機会を与える必要があるのです。この教育寮は国際学生寮として、留学生を含めて2~3人が一部屋で生活します。リベラルアーツ・ドミトリーというわけです。

日本人と留学生の共同生活ですから当然、さまざまなコンフリクトが起こります。国際問題のミニチュア版をどう解決していくか、これがミソなのです。ちなみに、建物は3階建てで2人1部屋、各階が6部屋12人で一つのクラスターを構成して、四つのクラスターがあり、3階建てですから120名収容します。これを五つつくって現存の寮もあわせると最大で700~750名の収容が可能になります。クラスター運営の学生リーダーは回り持ちで、寮全体の運営も学生が行います。自分たちで企画しながらさまざまなアクティビティを行っていくのです。また、留学生制度については、ICUとカリフォルニア大学が共同で開発したカリキュラムなどを実施しています。

杉山 国際化は一橋大学にとっても大きな課題です。研究、教育、業務運営それぞれについて、いろいろなアクティビティを導入しながら進めているところです。

鈴木 一橋大学ならやれることがたくさんあるでしょうし、実際に取り組んでいるのはよくわかります。社会科学分野でこうした国際的な取組を行っているのは、大きなアドバンテージになると思います。



文部科学省は大学間連携を支援していますが、一橋大学とは、互いの参考にし合える部分が多いと思っています。

杉山 最後に、一橋大学について、ひとこと苦言を呈していただきたいのですが。

鈴木 私が一橋大学で影響を受けた先生は、板垣興一先生、小島清先生、宮川公男先生などです。板垣先生は、「学問は山と見れば海、空と見れば雲」といったおらかさでしたし、小島先生は「学問は相手の胸ぐらをつかんで主張しなければならない」といった厳しさでした。宮川先生は、「こうやるといいよ。面白そうだ」と論じはげましてくださいました。アメリカでは、インディアナ大学のリチャード・ファーナー先生の影響を受けました。ICUの「行動するリベラルアーツ」は私の造語ですが、こうした先生方の影響もあると思っています。

一橋大学には、昔から優秀な人材が豊富ですが、それを生かし切れていない、あるいはアピールし切れていないのではないかという感じがします。国際レベルに達している先生がどれだけいるか、その実力が見えづらいですし、内向きな感じがしますね。一橋大学の研究者には、学者として「世界オンリーワン」を目指してほしいと思います。偉大なオンリーワンばかりでなく、この分野のオンリーワンという小さなオンリーワンでも価値があります。日本という狭い土俵で勝負をしてほしくないということです。

杉山 貴重なご意見をありがとうございました。

世界オンリーワンの研究者を輩出してほしい

杉山 ICUは国内外の大学と連携して成果を挙げておられますね。

鈴木 交換留学生など、海外の大学と積極的に交流を行っています。例えばカリフォルニア大学から1年間の留学生が30名、1学期の留学生を50名受け入れています。ICUでは留学生用にショートプログラムを開発して特定大学から一括して数十名を受け入れる方向に変わりつつあります。このため寮のほかにショートプログラム用の50人規模の施設を用意して3学期プラス夏休み中にプログラムを回していきます。



新任副学長 *Seigo Mori*

新任副学長 *Eiji Tajika*

新任学外理事 *Masayoshi Matsumoto*



学生としっかり向き合える 体制づくりを行っていききたい

一橋大学副学長（教育・学生担当）

盛 誠吾

● Seigo Mori

学生の目線に立った体制づくり

教育・学生担当の副学長となって、まず学生と向き合う体制づくりが重要だと考えています。

昨年4月に学生による飲酒死亡事故がありました。前副学長の坂内先生を中心にさまざまな対応がなされましたが、引き続き再発防止に努めなければなりません。学生のみならず全学を挙げて認識を改める必要があります。そのための研修や教育を実施し、メンタル面でのケアなどを図っていかねばなりません。各種相談窓口やコンサルティング業務担当者が個別に対処するのではなく、それらが連携し、総合的に対応することが重要です。このことも含めて、まずは大学が学生としっかり向き合うための体制づくりをすることが必要と考え、副学長就任早々取り組んでいるところです。

一方、昨今の景気状況や企業の採用動向を考えますと、今後学生への就職支援が重要になると考えられますが、その対応策として、学生への就職相談のためのキャリア支援室の体制を強化する必要があります。現在、如水会から専任職員を派遣していただいで就職相談などをお願いしているのですが、近日中に非常勤相談員2名、専門職員1名を増強する予定です。

また、ビジネス現場を体験するインターンシップとしては、国内ばかりでなく、スペインのBERGE社と提携して大学が支援する海外インターンシップが昨年からはスタートしています。インターンシップの報告会などで学生の話を知ると、かなり有意義な経験だったことがよく分かります。イメージで捉えていた仕事像と実際に業務を体験して感じた実態とはかなり違うようでした。また、英語による業務体験は、自分の語学力を試すという意味で、かなり有効だったようです。

カリキュラム改革と英語教育改革

教育面では、学内にワーキング・グループを設置して、3、4年がかりでカリキュラムの見直しを検討してきましたが、残

念ながら、現在のところ成案を得るには至っていません。とりわけ全学教育のあり方との関連で英語教育の見直しについて議論が対立しています。たとえば英語のスキル能力の向上が必要であることなど、基本的なところでの認識は共通しているのですが、そのための具体的な方法や、学部専門教育との関係などをめぐって見解が分かれているようです。しかし、カリキュラムの枠組み自体は当分変わらないとしても、その中身は時代のニーズに合わせて柔軟に変えていく必要があります。そのための具体的な提言をすることも、私の役目だと思っています。

もともと一橋大学では、如水会などの支援を受けて、20年以上前に他大学に先駆けて海外留学制度が整備されましたが、これまでの派遣学生数は優に700人を超えています。現在では、そのほかにも短期留学生や語学研修生などの制度の充実によって、毎年150名近くの学生が海外で学べるようになっています。これらの留学制度が、一橋大学出身者が世界中で活躍する基礎になっていることは確かです。今後の大学教育のグローバル化という観点からも、大学としてさらに制度の拡充に努力していきたいと思っています。

多種多様な人材が育つ大学として

入試に関しても、多様な能力を備えた人材の獲得を目指した新しい試みが行われています。これまで学部の入試は、受験機会の複数化や多様な人材の確保を目的として前期と後期に分かれてきましたが、後期日程入試がそのような目的に役立っているのかという問題がありました。そこで本学では、平成21年度の後期日程入試から、学部のアドミッション・ポリシーに従って試験方法を変えることができることにして、商学部は推薦入試、経済学部は従来型の一般入試、法学部と社会学部は面接と小論文中心の入試を実施することにしました。世界に伍する大学づくりをするためには多種多様な能力を備えた人材が不可欠ですが、入試の多様化もまたそのための一つの手段として、さらに検討を重ねていく必要があると思っています。（談）



研究力、国際力の強化、 さらに研究成果の「見える化」を進めていく

一橋大学副学長（研究、国際交流、評価担当）

田近栄治

Eiji Tajika ●

学生の「やる気」をさらに高める

研究、国際交流、評価担当の副学長として、次の3点を考えています。

まず、研究面。一橋大学は、社会科学の研究拠点校の一つとして広く認知されており、これまで確かな成果を挙げています。個々の教員は、すぐれた研究を行っていますし、現在2つのグローバルCOEも認められています。こうしたすぐれたパフォーマンスを持続し、強化していくことが副学長としての役割です。そのために重要なことは、一橋大学を内外の優秀な学生にとって魅力ある大学とすることであり、入学後は、そうした学生の勉学へのモチベーションをさらに高めていくことで、次のステップにつなげていくことです。その力こそが、一橋大学の研究力持続のために最も重要になるのではないのでしょうか。

具体的には、各学部がそれぞれ工夫しておりますが、私の立場で言えば、大学院を見据えた一貫した教育が必要だということです。そのポイントとなるのが、学生の「やる気」なのです。

これからの社会で求められているのは、グローバル化の中で活躍できる強い意志と高い能力をもった人材です。そのような人材が持続的に供給されることが社会にとって重要になります。だからこそ、グローバルCOEでも、次世代の研究者の育成が重点課題になっています。

「英語で勉強」し「英語で発信」する

次に国際化への対応です。学生に国際力をつけさせるためには、まず、語学力が重要になります。それも語学としての英語の勉強だけではいけません。英語の読み書きができ、コミュニケーションができることはもちろん重要ですが、英語を「どう使うか」という能力こそが国際力です。すでに、大学院ではすべて英語で行うプログラムがありますし、学部で

も英語のプログラム受講だけでも卒業できるようにすべく努力をしているところです。

こうした環境を整えることで、「英語の勉強」ではなく、「英語で勉強」し、「英語で発信」できる学生が育っていくような仕組みを作り上げようと考えています。そのための努力は怠りません。

一方で、海外の交流提携校との連携を強化して、学生が海外での経験を深める環境づくりにも力をいれるつもりです。一方、海外から優秀な学生を受け入れ、国立キャンパスで内外の学生が、一緒に勉強し刺激し合えるような環境を整えていきたいと思っています。ほかにも、スペインBERGGE社での短期海外研修プログラムや大学院の国際インターンシップのように、海外でのさまざまな仕事の体験を通じて、学生に現地の人と生活をいっしょにするようなプログラムも積極的に用意していきたいと考えています。

研究成果が外から見えるようにする

情報発信という面も重要になります。一橋大学は国立大学法人化して以来、アジア研究やビジネス・イノベーションをはじめ各分野ですぐれた研究成果を挙げています。それをどう発信していくか、成果を外から見えるようにするにはどうしたらいいか。これが、課題になります。すでに取り組んできていますが、英語のホームページの充実などにより、国内外から研究成果をこれまで以上に見えるようにしていきたい。こうした努力を通じて、成果をさまざまな人と共有していきたいと考えています。（談）



住友電気工業株式会社社長

松本正義氏

グローバリズムとキャプテンズ・オブ・インダストリーを 大学経営の基本に置く

国立大学法人化により、大学もビジネス感覚を活かした経営が必要な時代になってきました。それだけに、経済界での40年にわたる経験と蓄えてきた知識を活かして、大学人とは違った角度から大学経営に貢献できるのではないかと考えています。たとえば、学生が社会に出ていくときにどんな学生であるべきかを発言していきたいと思っています。

1985年のプラザ合意以後、わが国は名実共に国際社会に組み込まれています。大学も大学生もこのグローバル化の広がりの中で成長を図っていく必要があります。住友電工は海外に約270社、15万人の社員が勤務しており、グローバル化の真っ只中でビジネスを行っています。その経験から提言できることがあるのではないかと考えています。

もう一つは、「キャプテンズ・オブ・インダストリー」というキーワードです。それを唱えたカーライルの精神はどこにあるのかということに非常に興味があります。彼は、営利至上主義を排した人間愛をベースにした「経営騎士道」がキャプテンズ・オブ・インダストリーの本質だと言っています。アメリカ資本主義が猛威を振っている現在にあって、カーライルの言葉はリーダーシップのエッセンスを示しているように感じられます。節度と理念を持って経営にあたり、リードしていかなければならないということです。これを一橋大学の学生には理解させて社会に巣立っていかせることが重要です。

つまり、一橋大学はグローバリズムとキャプテンズ・オブ・インダストリーの2つの理念を中心に据えて大学運営の判断をしていく必要があるということです。

グローバル化ではコミュニケーションが重要になります。その点では一橋大学は進んでいま

す。私の時代には5、6人しかいなかった留学生ですが、現在では約600名も受け入れています。留学生派遣も含めて、これをさらに加速させていくことが重要です。

迷乱の年を治めるのは「気骨ある異端児」です。気骨というのは困難をブレイクする迫力と勇気のことです。異端児とは人と違った角度から物事を発想できる人のことです。リーダーにはこうした気概が重要です。

普段、私が重視しているのは、「自然体」「平常心」「正々堂々」「誠心誠意」を大切にすることです。なお、住友400年の事業精神「萬事入精（ばんじにつせい）」「信用確実」「不趨浮利」はまさに、そのことを表しています。これが王道であり、ちょっと「異端児」であってほしいと思います。それを鍛えるのが学生時代なのです。

大学時代に陸上部長だった都留先生は、正々堂々、誠心誠意、自然体を立ち居振る舞いで示してくれた偉丈夫でした。その延長線上にキャプテンズ・オブ・インダストリーがあるとしみじみと感じたものです。

私は如水会の副理事長ですから、大学、学生と如水会をブリッジする役割も課せられていると考えています。大学ではビジネス界、如水会の視点で提言し、如水会理事会では大学の動きを紹介するつもりです。さらに言えば、大学のアピールをサポートするのは如水会の役割だと思っています。たとえば、私が住んでいる関西での一橋大学の知名度、存在感アップのためには、関西アカデミアなどを積極的に盛り上げていかなければならないと考えています。また、優秀な高校生が一橋大学の存在を意識してもらうためには、卒業生が折に触れて母校のよさをアピールするといった草の根的なPRも必要ですね。（談）

進化する大学

慶應義塾大学と教育・研究上の連携・協力協定を締結

リニューアルする「一橋大学の歴史」の授業

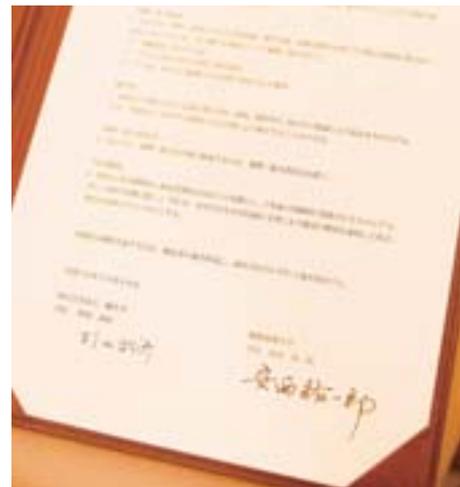
語学留学

スペイン企業派遣《Practical Training in Spain》

HEC Paris学長からのメッセージ

●
研究室訪問





慶應義塾大学と教育・研究上の連携・協力協定を締結

EU研究の世界的拠点として 共同学位を授与する共同大学院開設目指す

副学長 山内 進 Susumu Yamauchi



協定提携の三つの目的

一橋大学と慶應義塾大学は、国立大学法人、私立大学という設置形態の違いを乗り越えて、教育・研究上の連携・協力に関する協定を締結しました。これまでも個々の教員やプロジェクトレベルでは連携を行ってきましたが、グローバルな大学間競争が激化しているなかで、世界最高水準の教育研究を行うことを目指して、より連携を深めるための枠組みづくりを図っているのです。

その目的を整理すると、次のとおりです。

〔1〕 両大学は、教育・研究上の連携により、それぞれの知的、人的資産を相乗的に生かすことによって、世界最高水準の教育研究を行い、その成果を世界に発信すると同時に、研究や実務の世界で活躍するグローバルリーダーの育成を目指します。

〔2〕 それぞれの大学が有する独自の豊かなネットワークを互いに結合することによって、世界水準の知的、人的

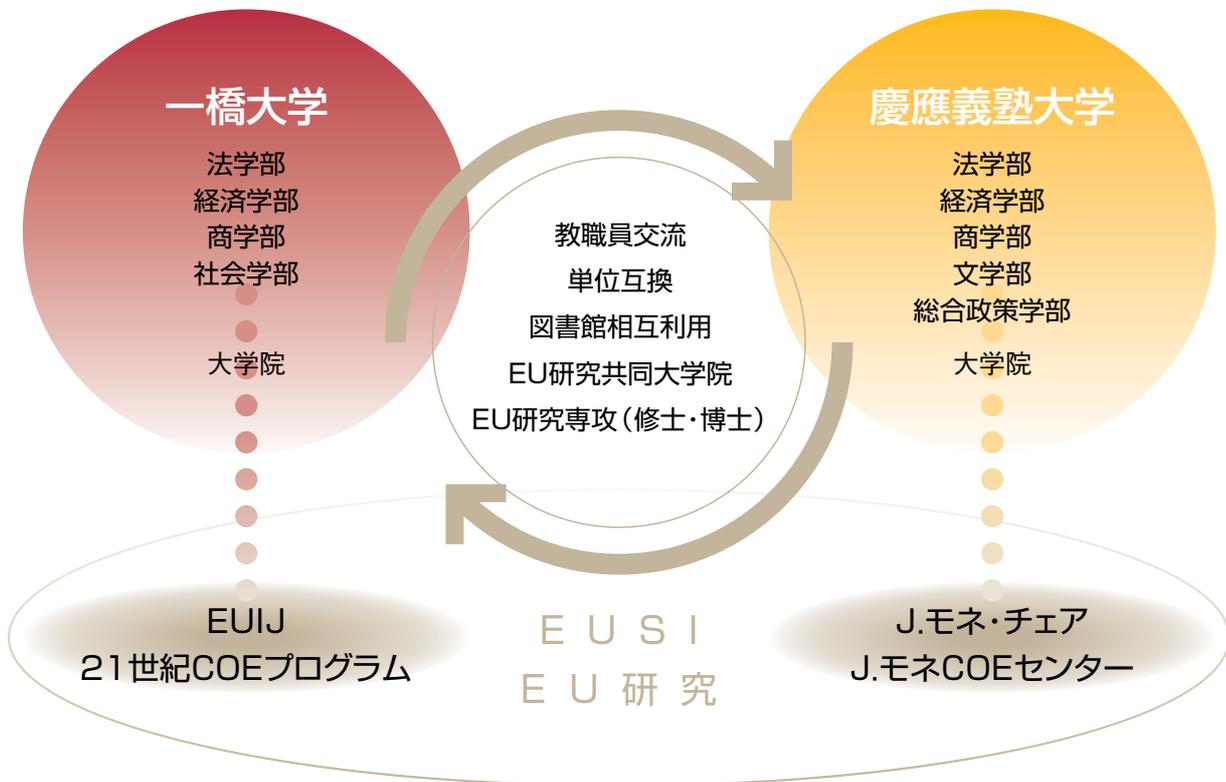
ネットワークを構築し、国際的にリーダーシップをとる世界的教育研究拠点として活動することを目指します。

〔3〕 特に、アジア・太平洋におけるEU高度教育研究ネットワークの創造と育成に努め、その中核的拠点として、ヨーロッパにおけるEU教育研究機関に伍する教育・研究上の成果を挙げることを目指します。

なぜ慶應義塾大学との提携か？

これまで一橋大学は国立大学として、自己完結型の大学経営を行ってきました。しかし、現在ではこうした狭い発想ではなく、より幅広い視点で大学運営を考えていかなければならない時代になってきました。一橋大学の戦略としては、国際的に高く評価されるような大学へと実力を向上させていかななくてはなりません。そこで、海外の大学ばかりでなく国内の大学とも連携して刺激し合い双方にとってメリットのある関係づくりを模索してきたのです。すでに、2001年に東京医科歯科大学、東京外国





語大学、東京工業大学と四大学連合を結成して教育研究の両面で連携を行っています。これも、その戦略の延長線上にあるのです。

このたび慶應義塾大学との連携を行うことになったキッカケの一つは、「戦略的大学連携支援事業」への応募があります。そして、EU研究という共通項がありました。一橋大学はEU Institute in Japan (EUIJ) の幹事校としてEU研究のアジアの拠点になっていました。さらにEUIJの中核事業を慶應義塾大学、津田塾大学とともにEUスタディーズ・インスティテュート・イン・ジャパン (EUSI) として発展させていこうとしています。一方の慶應義塾大学もEU教育研究活動には定評があります。欧州委員会が優れたEU研究者に助成を行うジャン・モネ・チェアに任命されている日本の研究者4名のうち2名が慶應義塾大学の教授であり、日本唯一のジャン・モネ・センターオブエクセレンスが慶應義塾大学に置かれていることから、その存在感の大きさがよく分かるでしょう。

なお、両校の校風や体質が似ていることも後押ししてくれました。両大学の創立者は共に明六社を結成した盟友で、日本における市民社会の知的形成や国際競争力のある経済界の発展に資する人材の育成に大きく寄与してきたという共通点があります。また、共に人文社会科学分野で多大な成果を上げてきました。

平成23年に共同大学院の開設を

こうしてEUに関する先進的教育研究を行っている両大学が連携して、世界最高水準の高度教育研究を行うことになりました。それぞれのネットワークを有機的に結合することにより、アジアにおける世界的なEU教育研究拠点の構築を目指します。

両大学は、まず教職員の交流と単位互換を連携のインフラとして構築します。可能な学部、研究科から非常勤講師の派遣を開始し、拡大していく構想です。また、事務系職員の短期交流、長期交流や職員の人事交流も検討します。

さらに、それぞれの知的、人的資産を教育研究の共同化により相乗的に生かして世界水準の教育研究を行い、理論成果を世界に発信すると同時に、EUに関する豊かで深い知識を有する人材を育成します。

世界で活躍している人材のスタッフ登用や、外国籍教員、留学生、職業人の受け入れにより、真に国際的で実務性に富んだ教育研究の実践を目指していきます。

図書館も相互利用を活発化するばかりではなく、双方が保有している貴重な学術資料のデータベース化事業でも協力することで、一般への公開も行っていく計画です。

こうした成果を受けて、平成23年度以降には、両大学の共同学位を授与するEU研究共同大学院（修士・博士）の設置を計画しています。（談）

進化する大学★慶應義塾大学と教育・研究上の連携・協力協定を締結





進化する大学

リニューアルする「一橋大学の歴史」の授業

ただ大学の歴史を学ぶだけではつまらない 視点を変えて全体像を見直してみよう

社会学研究科教授 田崎宣義 Nobuyoshi Tasaki



「一橋大学の歴史」授業の役割

かつての一橋大学では、取り立てて大学の歴史を学ぶ機会はありませんでした。それは、教員が講義の合間にさまざまな話をしてくれたからです。それだけ教員の側にも大学に対する愛着がありましたし、学生たちもこうした「語り」を喜んで聞く態度がありました。私自身は、それだけでもいいのではないかと思っています。しかし、昨今では、授業やゼミの場で大学の特色や歴史が語られる機会が少なくなったのかも知れません。それに本学の生い立ちは、他の国立大学と比べても、実にユニークです。

それにしても「一橋大学の歴史」という授業の目的や狙いが、私には今もってよく判りません。授業科目として展開する以上は、教育のなかでの位置付けや目的を考えるべきだと思うからです。平成20年度は、授業の目的・到達目標の「一橋大学の歴史を他の人に説明できるようになること」も含め、具体化はほとんど、この講義の提唱者の酒井雅子さんにお任せしました。次年度は、今年度の経験をふまえて相談し、構成を見直しました。

歴史というと、とかく「暗記物」つまり「変わらない」というイメージを抱きがちです。講義のなかで、このイメージが壊れ、物事を多面的に考察する姿勢を養う場ができれば、と個人的には思っています。

『校史』と授業とで全体像に迫る

平成21年度は、夏学期に14コマの授業を行います。その特徴は、『一橋大学百二十年史』を読んでいることを前提に授業を行うことです。講義では、『一橋大学百二十年史』にない事項もできるだけ取り上げて、校史についてのさらに幅広い知識と深い理解が得られるようにします。一方で、取り上げられている事項については最新の知見を紹介する、あるいは、先輩の体験談や時代背景、当時の学生生活や学生の意識、勉学の様子などを扱うことで、受講生の理解が具体的に豊かなものになるように配慮したいと考えています。

さらに、キャンパス配置とその沿革、一橋（いっきょう）と一橋（ひとつばし）の区別、一橋新聞、一橋祭・小平祭（申西事件記念日・予科祭）、国立キャンパスの建物、銅像・胸像・レリーフ・肖像画の人物のエピソードなど、日常の学生生活で触れる機会のある事柄についてはなるべく触れるようにします。

つまり、『一橋大学百二十年史』と授業を合わせることで、現時点で一橋大学の全体像が見えてくるようにしたいと考えています。

幕臣のネットワークでできた大学

この発想で授業を組み立てると、また別の視点から校史を見直すことができます。



たとえば創生期。一橋大学の前身・商法講習所の創立メンバーに加え、七分積金を管理していた府知事の久保一翁、のちに所長になる矢野二郎らも、森有礼を除いて、みんな幕臣でした。一橋大学は、幕臣のネットワークのなかで誕生したのです。しかも、久保一翁を除いて、彼らは全て明治維新前に渡航して欧米を経験しています。自分なりに新生日本をイメージして帰国すると明治維新です。幕臣たちは政治の中枢から外れました。そこで、新生日本の実現を在野で担います。旧幕臣たちは実業界、教育界、政界などの各分野に散らばりましたが、結束が固く、事があれば協力していました。旺盛な在野精神、リベラリズム、高い結束力という一橋大学のカラーは、旧幕臣たちのエートスそのものです。余談になりますが、本学のお隣さんの共立女子大学の創立者も幕臣の子で、発起人には矢野二郎や富田鉄之助も名を連ねています。

こうしたことは、ほとんど気づかれていなかったのではないのでしょうか。幕臣のネットワークは創生期だけでなく、本学が存亡の危機に直面した時や大学昇格の際にも表面化します。一橋大学は、幕臣のネットワークのなかで創られ、守られ、育てられてきた大学なのです。

武士道の倫理と資本主義の精神

渋沢栄一は「士魂商才」と言っています。文字どおり士の魂を持って商の才覚を発揮するということです。マックス・ヴェーバーの著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をもじって、私はこれを冗談に「武士倫」と言っています。日本の近代化が成功した背景には、幕臣たちが士の精神を持って商を背負ったことが大きいように思います。士というのは君子です。君子とは天下国家を治める力のある人物です。士

農工商でいえば、士の中の人材であって、商の人材ではありません。当時の武士の思想では、商は君子が手を染めてはならない生業だと考えられていました。その商に士魂をつけたところに、私は渋沢栄一の新生日本建設への決意、そして一橋大学に対する期待が込められていると感じています。もちろん、「君子之交淡如水」の「君子」にも同じことがいえます。

大学の歴史を、こうした「幕臣のネットワーク」という視点で見ると、薩長中心の歴史観とはまた違った近代日本のイメージが浮かび上がってきます。

「商法」に込められた幕臣たちの思い

ところで一橋大学のはじまりは1875年にひらかれた商法講習所ですが、この「商法」とはどういう意味を持っているのでしょうか。この講義の提唱者で授業の一部を担当する酒井雅子講師は、神戸にも商法講習所があったことなどから「貿易ではないか」と言っています。確かに、当時は外国商人に日本商人はいいようにやられていました。時代は、大福帳ではなく近代式簿記で経営状況を把握し、貿易、ビジネスを対等にできる人材を必要としていたのです。そこで日本の近代化を商の部分で担う人材の養成機関として商法講習所を幕臣たちが創ったのでしょうか。商法とは単なる商売とか商業という意味ではなく、経済的に国を自立させるための武器、その武器を使いこなせる人材を育成するのが商法講習所、ということなのでしょう。

講義ではほかにも、一橋大学と戦後改革、国立の町づくりに果たした一橋大学の役割など、『一橋大学百二十年史』ではあまり触れられていない部分も取りあげる予定です。(談)



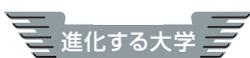
進化する大学★リニューアルする「一橋大学の歴史」の授業

◆「一橋大学の歴史」授業・講義内容

	テーマ	担当講師
第1回	オリエンテーション	
第2～4回	創学から大学昇格まで	酒井雅子氏（本学卒業生）・神田蘭講師による講談（第4回）
第5回	簿記・会計学の展開と本学	安藤英義名誉教授
第6回	予科・専門部・教員養成所について	大澤俊夫氏（本学卒業生）
第7回	大学の国立・小平への移転と国立の町づくり	田嶋宣義社会学研究科教授
第8回	戦時下の東京商科大学	栗原福也氏（東京女子大学名誉教授・本学卒業生）
第9回	新制一橋大学の発足	大澤俊夫氏（本学卒業生） ゲスト 石原一子氏（本学卒業生）
第10回	戦後を担う一橋大学	伊東光晴氏（日本学士院会員・京都大学名誉教授・本学卒業生）
第11回	文教地区指定と大学	田嶋宣義社会学研究科教授
第12回	学園紛争から現在まで	濱谷正晴社会学研究科教授
第13回	英語の一橋	井上義夫言語社会研究科教授
第14回	一橋大学 一きのう今日、そして明日	杉山武彦学長

(2009年2月現在)





進化する大学 語学留学

UC Davis、スタンフォード大学で体験する 24時間英語漬けの語学研修

2008年夏にスタートした、アメリカへの短期海外語学研修が2年目を迎えます。この海外語学研修の最大の特徴は、正規の単位取得科目であることです。研修費の一部が大学から補助されるというのもプログラムの魅力です。夏休み中のわずか1か月という短い期間ですが、その密度は高く24時間英語漬けの毎日を送ります。留学先は、カリフォルニア大学デーヴィス校 (UC Davis) とスタンフォード大学の2校。英語で授業を受け、ホームステイまたは大学の寮で過ごす24時間英語漬けの毎日が待っています。自分の語学力を試す絶好のチャンスです。

◆海外語学研修@UC Davis

研修先	アメリカ合衆国 カリフォルニア大学デーヴィス校附属語学学校
研修内容	語学研修、英語による授業およびディスカッション、現地企業訪問、現地学生との交流、ヨセミテ訪問等
費用	研修費予定額約50万円、旅費・保険別途 (10万円の奨学金補助を予定)
実施期間	2009年8月10日～9月6日
参加要件	この授業は、単位として認定されるため水曜5限の「英語Ⅱ」もしくは「英語Ⅲ」(海外語学研修@UC Davis) の1回目の授業に出席すること。1か月に1回程度の説明会あり
参加資格	希望者は全員参加可能

◆海外語学研修@Stanford

研修先	アメリカ合衆国 スタンフォード大学 (VIA主催のアジア人向け語学研修プログラム)
研修内容	語学研修、アメリカ文化に関する講義、シリコンバレーの有名企業の訪問、ボランティア活動等
費用	研修費予定額約80万円、旅費・保険別途 (20万円の奨学金補助を予定)
実施期間	2009年8月2日から約1か月
参加要件	この授業は、単位として認定されるため水曜4限「英語Ⅱ」もしくは「英語Ⅲ」(海外語学研修@Stanford) の1回目の授業に出席すること。1か月に1回程度の説明会あり
参加資格	5月中旬に実施する受け入れ機関であるVIA担当者による選抜面接に合格すること

※TOEFL未受験の参加希望者は、4月3日、大学主催のTOEFLを受験すること。(TOEFLを受験していない者には、奨学金が与えられない)
※授業料免除申請者には、さらに奨学金が与えられる予定



◆海外語学研修@UC Davis



商学部 4年
森嶋俊博
Toshihiro Morishima

就職に備えて英語を使う環境に慣れる

2009年の4月から外資系金融機関での社会人生活が始まります。社会人になる前に英語圏での生活に慣れておきたかったというのが、参加した理由です。就職先では外国人も多いため同僚との社内での会話はもちろん、社内文書は全て英語です。海外とのやりとりも多いです。また就職してすぐにNY研修にも行かねばなりません。それにもかかわらず、私は

今まで一度も海外に行ったことがなかったのです。研修期間が夏休み中の1か月であること、誰でも参加できること、またホームステイであるということでしたので、まさに「渡りに船」のプログラムだったのです。短い期間でしたが、アメリカでの生活は想像以上に快適でした。アメリカの環境が、自分に合っていると思えたのがなよりの収穫でした。



社会学部 2年
劉媚媚
Liu Meimei

知らない世界に触れて、刺激を受けたい

私たち中国人にとって米国への留学は簡単なことではありません。たとえば本国からですと申請には煩雑な手続きが必要になりますし、時間もかかります。しかし、このプログラムですと滞在期間も決まっておらず、大学が私たちの身元を保証してくれていることから、驚くほど簡単に渡米する

ことができたのです。知らない世界を肌で感じ、刺激を受けたい。それがプログラムへの参加を決めた理由です。求めれば未知の世界をのぞくチャンスがいくらでもある。それが大学生の特権なのだと思います。

◆海外語学研修@Stanford



法学部 2年
佐渡島太志
Futoshi Sadoshima

1か月を有意義に過ごすためには目的の順位付けが不可欠です

世界屈指の名門校スタンフォードで自分は何が吸収できるか？ レベルの高い英語で研究を体験することを参加する第一の目的に決めました。調査をし、研究レポートを英語で仕上げることを目標にしました。

論文のテーマは、日米のワーク・ライフ・バランスの相違を考察すること。日本にいるうちから

文献を読み、現地では近隣のGoogle本社でインタビューに協力してもらいました。先生方の助言を得ながら研究レポートにまとめ、プレゼンテーションをしました。勉強漬けでしたが、目標を絞った甲斐があり、1か月で論文とプレゼンテーションのノウハウがよく身につきました。それが自信につながっています。

スタンフォードで学ぶ意味を学生に問いかけます



Senior Stanford Programs Director
石田一統氏
Kazutoh Ishida

私が所属するVIA (Volunteers in Asia) は、1963年、スタンフォードの学生ボランティアをアジアに派遣するために誕生した非営利団体です。以来スタンフォードの学生とアジアの学生を結ぶ機関として活動しています。このプログラムには、例年アジア各国から優秀な学生が集い、日本からは一橋大学、慶應義塾大学、早稲田大学、同志社

大学の学生が参加しています。参加に際しては、私たちのインタビューを受けてもらうことにはなりますが、決して難しいことを尋ねるわけではありません。なぜスタンフォードでなくてはならないのか？ そこで何をしたいのか？ についてヒアリングをさせていただきます。英語を学ぶだけであれば、スタンフォードである必要はありませんし、目的が明確でなければここで学ぶメリットを活かせないと思うからです。プログラムの詳細については、Webでも公開されていますので、興味のある方はぜひ参考にしてください。
(<http://www.viaprograms.org>)





スペイン企業派遣 《Practical Training in Spain》

スペインBERGÉ社とキャリア支援提携 実習を通じて国際体験をする機会を提供

2008年11月10日（月）、一橋大学キャンパス内において
スペインのBERGÉ（ベルヘ）社Jaime Gorbeñ a会長と杉山武彦学長とが、
キャリア支援提携に関する覚え書きの調印を行った。
ベルヘ社はマドリッドに拠点を置く、
スペインの非上場会社では第二の規模を誇る総合商社。
この調印により、短期海外研修プログラムの一環として、
同社への企業派遣を長期的に共同運営することになった。
参加学生は、スペインに5週間滞在してベルヘ社で企業実習を行う。
いやでも異文化に揉まれ、それを乗り越えて協同で物事を行うことになる。
こうした経験を通じて国内海外を問わず、
どんな環境にあっても実力が発揮できる資質が磨かれる。
スペイン政府からは、このプログラムのビジョンが
日西両国の友好および交流促進に貢献するものとして評価されている。



BERGÉ社Jaime Gorbeñ a会長と杉山武彦学長





語学研修から海外企業派遣まで、 段階的な異文化体験の体系が完成

学務部留学生課長

渡辺道夫

Michio Watanabe

大学教育にもグローバルな視点が不可欠な時代になっています。こうした時代の要請に応じて、一橋大学では留学生の受け入れはもちろん、派遣にも力を入れています。ベルヘ社への企業派遣が海外留学システムに正式に組み込まれたことにより、大学1年次から4年次まで段階的な異文化を体験し理解を深めることができる留学プログラムがさらに充実しました。

まず、「海外留学と国際教育交流」という全学年を対象の講義（2単位）があります。1～4年次には海外語学

研修（英語：アメリカ4週間、2単位）、短期海外研修（国際理解、異文化体験理解：オーストラリア、中国4週間、2単位）。そして、2～4年次には交換留学生（1年間）への道が開かれています。さらに、ベルヘ社への短期海外研修（企業派遣：5週間、2単位）で、インターナショナル・ビジネスを通じて異文化体験を行えるというわけです。国内企業のインターンシップも併せて経験すれば、そのビジネス文化の差異がわかってより有効になるでしょう。

なお、国際ボランティアに、年次を問わず参加できる仕組みもつくっていきます。（談）



アウェーに飛び出し、 どこでも実力発揮できる自信を身につけてほしい

留学生相談室長（留学生センター准教授）

阿部 仁

Jin Abe

短期海外研修（企業派遣）の派遣先がスペインの会社だったのは、文化や風習の違いを体得するうえで非常によかったといえます。スペインの企業文化はダイナミックかつフレキシブルで、カオスの中から物事が生まれてきます。この点一つとっても、従来の日本の企業文化とは大違いです。

2007年の試行的企画を受けて、2008年には4名がベルヘ社でインターンシップを経験、今春には6名が挑戦します。人と人との交流から創造されるエネルギーを柔軟に、とき

にはカオス的に取り入れて物事を進めていくスペイン文化に果敢に飛び込み、「アウェーで実力が発揮できる自信」を身につけてもらいたいと思っています。

選考は3名の教員で行う、英語によるグループ面談とグループアクティビティ。英語力の確認ばかりでなく、状況に応じて自分の立ち位置を決めるバランス感覚を確認したり、雰囲気にならなれず周りに気配りできる「大人」かどうかを見極めるのです。つまり、面接やオリエンテーションの時点で留学が始まっているようなもの。こういったセッションを渡航前に4～5回も行っているのですから、力のある学生には積極的にチャレンジしてほしいですね。（談）

◆BERGE社海外派遣プログラム参加要綱

研修先	マドリッド、スペイン
個人負担費用	25万円前後
期間	平成22年は、2月頃の実施を予定しています。 詳細は、ホームページをご覧ください (http://cse.hit-u.ac.jp/ryugaku/)。
条件	<ul style="list-style-type: none"> ・英語によるコミュニケーションができること（参考値－TOEFL 550 (PBT), 79 (iBT), TOEIC 730, IELTS 6.5程度）。 ・短期海外研修、海外語学研修などの海外経験があり、アウェーで実力を発揮できること。 ・スペイン語能力（DELE中級以上）保持者優遇。
募集人員	5～6名（研修受入先により最終決定）





HEC Paris 学長からのメッセージ

一橋大学の皆さん、こんにちは。



HECは欧州でも有数のマネジメント専門の高等教育機関として知られています。これからの政治、経済、社会的な大きな要因をボーダレスな環境の中で的確に捉えることのできるハイポテンシャルなマネージャーやハイレベルな教授、研究者を育てることを使命としています。2006年より3年連続して

ファイナンシャルタイムズ紙で欧州No.1スクールにランキングされました。

HECは30年以上も前から世界中の著名校と協定を締結しておりますが、一橋大学はHECにとって初めての日本のパートナー校であり、1983年に交換留学制度が始められました。

HECでは、MSc (Master of Science in Management) 以外にもMBA、Executive MBA、Ph.Dなどのプログラムも含めて国際化を進めていますが、日本は力を入れている国の一つです。

現在200名近くの卒業生が日本に滞在し、同窓会も活発な活動をしております。

HECはマネジメント教育機関としての役割を果たすため、世界的に活躍する105名の常任教授、42,000名の卒業生からなる国際ネットワーク、多くの国際企業との強いパートナーシップをもつHEC Foundationと密接に連携しながら学校運営をしています。また2008年末、HECは各エンジニア分野のトップ10校とともに、欧州随一の総合高等教育研究機関となるParisTechにも加盟しました。

“学ぶほどに勇敢になれる”という歴史あるスローガンを誇りとし、HECは学生が知的好奇心をもち、リスク管理能力を身につけ、この今の挑戦の時代に不可欠な変革の立役者となるべく、勇気と倫理観を持ち活躍してくれることを切望しています。

今後も大勢の皆さんがHECに学びに来てくださることを願っています。

ベルナール・ラマナンス
HEC Paris 学長

HECからの留学生



Thomas Pelofi

授業は、教員と学生がともに作るものだと思います

Q1 一橋大学の印象についてお聞かせください。

自然に溢れた素晴らしいキャンパスだと思いました。国立の街に溶け込んでいるところ、郊外でありながら都心へのアクセスが良いことが魅力です。また、大学と職員の方々の留学生に対するサポート体制が素晴らしい。戸惑ったこと、困ったことに対しては親切に丁寧に対応してくださいました。





Message du Directeur Général d'HEC Paris

Bonjour à toutes et à tous.

Reconnu comme un des établissements leaders en Europe, HEC Paris est spécialisé dans le domaine de l'enseignement et de la recherche en management.

HEC a pour vocation de former des managers à haut potentiel, des professeurs et chercheurs de haut niveau, capables d'appréhender dans un cadre multinational les grands enjeux sociaux, politiques et économiques de demain.

HEC a été classée 1ère Business School en Europe par le Financial Times en 2006, 2007 et 2008.

Depuis plus de trente ans, HEC a signé des accords de partenariat avec des universités prestigieuses de renommée internationale. Hitotsubashi University est un partenaire privilégié au Japon.

Nos deux institutions coopèrent depuis 1983 par des programmes d'échanges d'étudiants.

Le Japon est l'un des pays clés du développement international d'HEC pour le recrutement des programmes: MSc (Programme Grande Ecole), MBA, EMBA, Doctorat. Près de 200 diplômés sont actuellement basés au Japon et l'association des Alumni y est très active.

Pour accomplir sa mission, HEC dispose d'atouts importants : un corps professoral, composé de 105 professeurs permanents, reconnu mondialement, plus de 42,000 diplômés répartis dans le monde et des partenariats étroits avec de nombreuses entreprises internationales à travers la Fondation HEC.

Fin 2008, HEC Paris a rejoint 10 écoles d'ingénieurs toutes leaders dans leurs domaines et a intégré ParisTech, institut des sciences et technologies, qui constitue un véritable pôle de référence en Europe dans l'enseignement supérieur et la recherche.

Fière de sa devise historique « Apprendre à oser », HEC Paris ambitionne que ses étudiants montrent leur curiosité intellectuelle, qu'ils acquièrent le goût du risque, qu'ils fassent preuve de courage intellectuel et moral pour être des acteurs des transformations nécessaires de l'époque pleine de défis que nous vivons.

Vous y êtes les bienvenus !

Bernard Ramanantsoa

Directeur Général d'HEC Paris

Q2 一橋大学の学生の印象についてお聞かせください。

先生も学生も優秀な方が多い大学だと思います。ただし残念なのは、講義中に自主的に発言する学生がほとんどいないということです。HECでは、授業の中心はディベートであり、学生が先生の講義を一方向的に聞いているということは、ほとんどありません。議論をすることで、授業はより楽しく有意義なものになります。一橋は、優秀な学生が多いだけに、とてももったいないと思います。



社会を読み解く文法であり方程式である経済学。 そのおもしろさを伝えたい。

分からなかった経験が、 分かりやすい教え方へとつながる

経済学をなぜ学ぶのでしょうか？私の答えは簡単です。まず、おもしろいから。そして、社会の動きをちゃんと理解するのに不可欠な知識だからです。そのおもしろさを伝えていくのが私の役割だと考えています。

「大学の授業ってつまらないよ。そもそも何言っているのかよく分からないし。」一足先に大学に入った友人の言葉でした。自分も入学して授業に出てみて、「全くそのとおりだ」と思いましたね。講義ノートをただ棒読みするだけの先生、質問に行くと「こんなくだらないことを質問するな」というような態度をとる先生、学生が理解できようができまいが自分勝手なペースで講義を進める先生などいて、多くの授業に失望しました。教科書を読んでみても、文章が「あまりにも高尚」すぎて10分も読むと居眠りです。自然と教室からは足が遠のき、部活（体育会バレーボール部）中心の生活になっていきました。「城太に会いたければ、体育館か雀荘に行け」と友人連中は言っていたようです。一時期、経済学がさっぱり分からず、完全に興味を失っていました。だけど、「このままではいかん」と奮起して、根気強く勉強してみると、奥が深く、結構おもしろいということに気が付いたのです。

経済学がさっぱり分からないという時期を経験していますから、分からない人の気持ちが分かります。どこが分からなくて、どうすれば理解できるかがイメージできるのです。また、私が失望した講義が、反面教師となって今ごろ役に立っています。経済学について白紙の状態の学生に、経済の面白さを知り興味を深めてもらうには、私こそ適任といえるでしょう（笑）。

なお、社会の動きをちゃんと理解するのに不可欠な知識だというのは、経済学がいわば社会の文法の一つといえるからです。言語で考えてみれば、文法を知らなくともしゃべることはできますが、キチンとした文章を書いたり、筋の通った話をしたりするには文法の素養が欠かせません。

たとえば、消費税が5%から10%に上がるとします。モノが売れにくくなるということぐらいいは経済学を知らなくとも分かります。しかし、どういう仕組みで、それがどう作用して、社会にどんな影

響を与えるかをきちっと理解するには、経済学が必要になります。つまり、社会における経済の動きを知るためには、その文法（経済学）を身につけて、それを分析する方程式を知る必要があるのです。

身近な出来事から 経済の見方・考え方を伝える

学部の授業では、経済学のおもしろさを知り関心を深めてもらうために、さまざまな具体例を交えて話をします。

たとえば、経済学での重要な考え方の一つに、「機会費用」というものがあります。何かをするには、何かを諦めなければならない、それを費用としてカウントするということです。この概念を説明するときに私が用いるのが、メジャーリーガー松坂大輔投手の西武ライ



オンズ入団時のエピソードです。彼はもともと横浜ベイスターズ入団を希望していました。横浜に指名されなければ、ノンプロに行くと言っていました。しかし、ドラフトでクジを引き当てたのは西武ライオンズです。西武ライオンズは入団交渉で、プロでなくノンプロで2年間過ごすことによる大幅な収入面のロスや技術面でのブラッシュアップ機会の喪失、すなわち多額の「機会費用」が生じることを

恐らく強調したと思います。これによって、松坂に入団を決意させることができたのではないのでしょうか。

私の専門は国際経済学ですが、貿易の利益を説明する際に、『一橋論叢』（1993年4月号、<http://www.econ.hit-u.ac.jp/~jota/syukuzu.html>）でも紹介した次のような自分の小学生時代の経験を語ったりもします。

小学校では土曜日には給食がなく弁当でした。私の弁当は梅干しのおにぎり二つとおかずでしたが、このおにぎりが人気で毎回級友のおいしそうなおかずと交換したものです。おにぎり一つをおかずと交換してしまうとおなかがすいてしまいます。そこで母に、おかずを減らしていいからおにぎりを三つにしてほしいと頼みました。すると、おにぎりの一つをこれまでどおりおかずと交換し、もう一つを違う具の入ったおにぎりとの交換ができるようになったのです。

こんな誰にでもありそうな何気ない経験に、貿易による利益の本質が見えるのです。貿易による利益には、まず「交換による利益」と「特化による利益」があります。交換による利益とは、それぞれ

にとって希少価値の低い物を希少価値の高い物に交換することによって生ずる利益です。私にとって自分のおにぎりは希少価値が低かったですが、級友のおかずは希少価値が高かったのです。級友にとっては、逆になります。一方の特化による利益は、輸出品の生産を増やして輸入品を減らす結果によって所得水準が高まることによって得られます。私がおにぎりを増やしておかずを減らしたことがこれに当たります。また、貿易によって商品のバラエティが増えることでも消費者の利益が高まります。梅干しのおにぎりや鮭のおにぎりの交換によって、2種類のおにぎりを食べられるようになり、私の満足感は高まったのです。

こうした例を使って経済学の見方や考え方を示すことで、学生たちが自分の頭で経済現象を整理し、分析できるようになってもらいたいと考えているのです。

サービスの自由化は 国際貿易の必然的な流れ

国際経済学では、ヒト、モノ、カネ、サービスの国境を超えた動きを扱っています。それらをどのように自由化していったらよいのかというのがポイントになります。国際経済学の視点は、変わりつつあります。今まではモノ、特に工業製品の貿易自由化が進められてきました。しかし、次第に、サービスやヒトの移動へと次元が広がってきたのです。

モノの貿易の自由化というのは分かりやすいですが、サービス貿易の自由化というのは見えなだけに分かりづらいものです。そこで、ここでも具体例を挙げます。皆さんがハワイにユナイテッド航空で行ってヒルトンホテルに泊まったとしたら、日本はアメリカから「輸送」と「宿泊」というサービスを輸入したことになるんだよ。

サービス貿易自由化の本格的な協議が始まったのはウルグアイ・ラウンドです。まだ十数年の歴史しかありませんから、課題も多く残っています。それは、サービスやヒトの移動については、各国の国内政治や制度と密接に関連してくるだけに経済だけでは割り切れず、なかなか自由化が難しい面があるからです。日本でも、フィリピンやインドネシアから看護師が入ってきたら現場でさまざまな摩擦が生じるというような点が政治問題化しています。経済学だけの方程式ではなく、政治の方程式や人間行動学までからんでくるのです。

アイルランドに住んでいる知り合いの大学教授は、ハンガリーへ歯の治療に行くツアーに参加しようかと考えています。これなどは、観光付きで医療サービスを輸入していることになります。こうしたケースは、今後ますます増えてくるでしょう。グローバル化する社会にあって、サービスやヒトの国際化は避けて通ることができない課題なのです。

自分の考え方を表現する ツールとしての英語力が足りない

グローバル化が進む社会にあっては、大学教育も否応なしにそれを意識することが求められます。具体的には、グローバルな視点を身につけ、グローバルに活躍できる実践力を発揮できる学生を育成することです。

学部の1年次は高校から大学への転換期にあたりますから、経済学のおもしろさに目覚め関心を深めてもらうとともに、経済学的な考え方を早く身につけてもらおうと思っています。だからこそ、分かりやすい事例や現実に即したテーマをふんだんに盛り込んだ授業を行っているのです。

大学3年生以上を対象とした授業は英語で行っています。日本の大学教育のレベルが国際的に評価されていない原因の一つが英語の問題にあります。英語を聞き、英語で考え、英語で主張することは、グローバル社会では重要なことです。しかし、学生の多くは、英語を読むことはできても、英語を武器にしてディスカッションすることはできません。自分自身も留学するまではそうでした。そこで、賛同してくれる先生とともに英語で授業を行うようにしたのです。

ゼミでも英語でのディスカッションを多少取り入れていますが、実は、その目的は自分がいかに英語ができないかを自覚してもらうことにあります。たとえば、時事問題を英語で報告するようと言えば、ある程度の報告をするのですが、質問を浴びせると、多くの学生は、とたんにしどろもどろになって満足に答えられません。そのような状況を知って発奮してもらいたいのです。

いまや中国や韓国でもトップクラスの学生は当たり前のように英語で議論をしています。このままでは、日本の学生は世界の中で埋没してしまいます。是非グローバルな感覚を身につけて、井の中からグローバルな世界に飛び出して活躍して欲しいですね。(談)



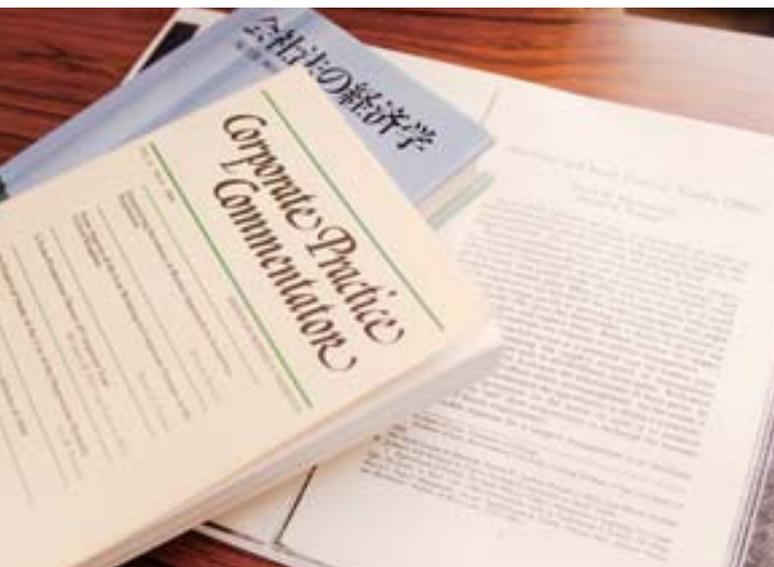
経済学研究科教授

石川城太

Jota Ishikawa

1983年一橋大学経済学部卒業、1985年一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了後、同研究科博士後期課程入学、1986年ウェスタン・オンタリオ大学大学院経済学研究科博士課程入学、1990年同修了〔経済学博士 (Ph. D.)〕。ウェスタン・オンタリオ大学経済学部ポスト・ドクトラル・フェロー、1991年一橋大学経済学部専任講師、1994年同学部助教授。1994年4月～6月コロラド大学ボルダー校経済学部客員研究員。1994年7月～1996年3月ブリティッシュ・コロンビア大学商学部客員研究員。1998年一橋大学大学院経済学研究科助教授、2001年同研究科教授。2006年4月～6月ハワイ大学マノア校経済学部客員教授。2006年10月～2007年3月ニュー・サウス・ウェールズ大学経済学部客員教授。

社会科学を学ぶことは見えない鎖から自分を解き放つこと。 「会社法」や「法と経済学」はそのための素材に過ぎない。



ルールとコスト・ベネフィットの関係

私のゼミでは、「会社法」に「法と経済学」の観点からアプローチしています。主にコーポレート・ガバナンスを検討対象としています。

「法と経済学」は、極めてシンプルに言うと、人がある行動をとるには、動機づけが必要だということから分析します。人はどうして動くのか？利益を得るためということもありますし、逆に不利益を被らないためということもあるでしょう。こうした人を動かす誘因をインセンティブといいます。

法は社会的なルールですが、それには、サンクション（制裁）を与えることにより、人間の行動を制御するという側面もあります。例えば、クルマの運転。人間がコスト・ベネフィット計算をして、自分の得になるように行動するとすれば、どの程度の注意をしていれば損害賠償責任を負わずにすむかを考えて注意をつくすと考えられます。したがって、交通事故についてのルールが、過失があれば損害賠償責任を負うとされるか、重過失があれば負うとされるか、それとも無過失責任を負うかによって、運転者の注意のレベルは変わってくるでしょう。

また、コスト・ベネフィット計算の点から言えば、運転者が保険に入っているかどうかでも注意のレベルは変わります。保険に入っていれば、注意のレベルは下がるかもしれません。これは、モラル・ハザードといわれることですが、別にモラルの問題ではなく、保険がコストをシェアする制度であり、損失のすべてを自分が負うことなく、誰かが一部をかぶってくれる仕組みだからこうなってしまうのです。要するに、人間の合理的な選択行動の結果なのです。少なくとも損得勘定の点からは。

それがすべてではありませんが、法という制度は、インセンティブを付与する道具だと考えられます。つまり、コストとベネフィッ

トの帰属主体を変える道具がルールだという捉え方ができます。「法と経済学」はこういうアプローチをします。

要するに、ルールのあり方と人間行動の関わり方を考える。ルール設定により人間の行動がどう変化するか、それによってもたらされる結果は社会的に望ましいか、そして、その評価の基準をどう考えるか、私のゼミでは、こうした観点からコーポレート・ガバナンスを考えているわけです。

功利主義的な人間像と 株式会社という仕組み

ラフで一面的な言い方になりますが、コーポレート・ガバナンスは、経営者を監視するための仕組みだと言えます。つまり、経営者を株主のためにきちんと仕事をさせるにはどうしたらいいか、ということです。

株式会社という仕組みは、シンプルに言えば、株主が出したお金を経営者が事業で運営して利益をあげ、それを株主に返すという仕組みです。そうすると、株主と経営者の関係は、2人の人間関係に置き換えて考えることができます。

2人の人間関係に置き換えて、Aがレストランを作るためのお金を出して、Bにその切り盛りを任せたとする話で考えてみましょう。私たちの世界では、「プリンシパル＝エージェント・モデル」と呼んでいますが、仕事を任せられたAがプリンシパル、任されたBがエージェント、つまり、Aが株主で、Bが経営者という見立てです。なぜAはBに仕事を任せられたのかというと、Bにシェフとしての専門能力があるからです。

しかし、AはBがちゃんと仕事をしてくれるか心配です。単純には、Bがさぼることが心配です。どうしてBがさぼるかということ、これもある意味、合理的な選択行動の結果と見ることができます。どうということかということ、今度は、さっきのモラル・ハザードが起こると反対の話になります。つまり、Bはやった仕事の成果（もうけ）のすべてを自分の手にできるわけではなく、成果の一部はAと分け合うことになるので、ベネフィットをシェアする状況になってしまいます。そのため、どうしても努力が過少になってしまうわけです。

これ以外にも、Aにしてみれば、Bが仲間のCから材料を高値で仕入れることにして、その分を山分けするようなことも心配でしょう。

これらを制御するには、どういう仕組みが考えられるでしょうか。

会社法には、株主総会や株主代表訴訟の規定がありますが、これは、Aが直接Bを見張るという仕組みとして見るすることができます。

また、会社法では、社外取締役や社外監査役の重要性が意識されていますが、こちらはAの代わりに見張ってくれる人をつけるという発想です。シェフの経験のないAはBの材料の仕入れが妥当かとか、Bの仕事の適切な評価をうまくできないかもしれないので、そういう仕事がきちんとできる目利きに見張らせようということです。

しかし、直接見張ってあれこれ口を出すというやり方は、専門能力のある人に仕事を任せたい意味を台無しにしてしまう面がありますし、誰かに見張ってもらうという方法には、見張り役を見張らなくてはならないという問題がありますから、オリジナルな問題の解決になりません。それに、こうしたやり方は、Bの努力を引き出すという面ではあまりうまくいきそうにはありません。

さっきも言ったとおり、Bがさぼる根本的な理由は、自分の努力の成果をすべて手にできないことにあります。そこで、Bの適切な努力を引き出すために、Bが努力すればするだけBが得する（と同時にAも得する）要素を大きくしてやる工夫が考えられることになります。会社法は新株予約権という道具を用意していて、これはストック・オプションとして利用することができますが、ストック・オプションなどはまさにそういう仕組みです。

この解決にもいろいろ問題はあるのですが、それはさておき、このような分析のやり方は、極めて功利主義的な人間を念頭に置くものです。つまり、新古典派経済学が前提とするホモ・エコノミカス、ないしは、ホームズ裁判官がかつて言ったバッド・マンを前提にしている分析なわけです。

分析の限界を意識する

しかし、人間って、そんなものか？という疑問が生ずると思います。先ほどの例のレストランのシェフは、いい料理を作りたいというプライドで仕事をしているかもしれません。監視されていようがいまいが、信念に基づいてベストを尽くす人もいます。つまり、人間を動かすインセンティブとして、コストとベネフィットしか考えていないところに、こうした分析の限界があります。ホモ・エコノミカスやバッド・マンをベースに考えると、法は制裁を与える基準、コスト＝ベネフィット計算を明確にするための基準として、極めて道具主義的に捉えられることになってしまいます。しかし、これとは違う人間観に立って、法にアプローチすれば、もっと違う役割を見いだすことができるのではないのでしょうか。

「法と経済学」は物事をシンプルに捉え、分析を行いやすくしてくれる面がありますが、こうした限界があります。もっとも、最近の「法と経済学」ではビヘイビオラル・エコノミクス（行動経済学）の成果を取り入れて、こうした限界にチャレンジするものも出てきています。

人は体に悪いのを承知でタバコを吸うといった、合理的ではない選択をすることは珍しくないわけですし、現状を維持したいという認知的なバイアスを持っていたりします。こうしたことは、スタンダードな経済分析では、うまく解明できない面があるわけですが、こういうことも含めて、もう少し人間らしい要素を取り入れた分析が模索されているわけです。

ただ、こうした新しい分析は、未だ発展途上で、これまでの体系

に取って代わる原則を打ち立てるには至っていないわけですが、私たちは、こうした新しいアプローチが教えてくれる、これまでの分析の限界をしっかりと意識しておく必要があるでしょう。

無意識に置いている前提を意識化する

ゼミでは、主としてLaw Reviewなどのアメリカの法律雑誌に掲載されている論文をとりあげています。言葉の壁があることによって、嫌でも丁寧に読む習慣がつくというメリットがあるからです。

さらに、アメリカの会社法の論文は、「法と経済学」のアプローチが主流であることも手伝って、日本の法律学の論文とは毛色が違い、人間行動やモデル的な思考の前提を明確にした議論がされますから、学生にとって前提を明らかにしてものを考えるよいトレーニングにもなります。人間は、無意識のうちに何がしかの仮定を置いてものを考えているにもかかわらず、それに気がつかないことがよくありますが、論文が置いている前提・仮定を意識しながら読む作業を繰り返すことによって、そうした問題を克服することに役立つことを期待しています。

そして、ゼミで学んだ学生たちの中から、やがて政策提言を行う立場に身を置く人も出てくるのでしょうか、社会がこうある「べき」だという提言をするときには、自分はどのような現状認識をしていて、どのような仮設のもとに「べき」を主張しているのかを常に意識してほしいと思っています。さらに、自分が行っている「べき」という主張は、限られた根拠に基づくものでしかない、はなはだ心許ない「べき」なのだということを忘れないでほしいと思っています。だからこそ、学生に対して、常に前提を意識するトレーニングを課しているわけです。

社会科学を学ぶことの意義の一つは、自分の思考を自由にすることにあると思います。人間は、自分自身の思考の前提を意識することができて初めて、自分の思考を自由にすることができるのではないのでしょうか。自分自身の思考の前提を意識することは、自分がある考え方や認識に囚われていることを自覚することにつながるからです。ゼミの学生たちが、「会社法」や「法と経済学」は、見えない鎖に縛られている自分を解放するための素材に過ぎないんだということに気がついていてくれたら、大変嬉しく思います。（談）



法学研究科教授

仮屋 広郷

Hirosato Kariya

2006年より法学研究科教授。会社法専攻。

最近の著作：『企業の社会的責任』（共著〔第1章担当〕・勁草書房・2007年）、

『企業金融手法の多様化と法』（共著〔Section5担当〕・日本評論社・2008年）、

『会社法大系1』（共著〔第1章3担当〕・青林書院・2008年）、

『株主層の変動と株主総会』法律時報993号46頁以下（2008年）、

『コーポレート・ガバナンスへの視座』

法学セミナー648号11頁以下（2008年）など

各界でユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちはいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

第21回は、北京大学を卒業後、留学生として一橋大学で博士号を取得し、現在成城大学にて教鞭をとる、金春姫さんです。

聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

新しいアジアの絆

出世に男女は関係ない。
躊躇なく子女を送り出す中国の親たち

山下 金さんには、中国での調査プロジェクトのとき、とても助けていただきました。対日感情と日本製品に対する態度形成をテーマにした博士論文も素晴らしい出来でしたね。母国語ではない言語であれだけのものを書くのは大変だったと思います。改めて、一橋大学に留学されるに至った経緯を教えてくださいませんか。

金 ありがとうございます。私は、北朝鮮との国境に近い延吉市郊外の村で生まれました。延吉市は吉林省延辺朝鮮族自治州の州都で、わが家も祖父の代（1910年ごろ）に北朝鮮から逃れてきたんです。ですから、子どもの頃は家でも普通の生活でも朝鮮語を話していました。中国語は日本の英語のように学校で学びました。将来はどこかへ留学したいと思ったのは、大学時代ですね。地元にいるのも飽きたし、北京もあまり好きになれず、どこかほかの国に行ってみたいなと（笑）。

山下 日本語はどこで学ばれたのですか。

金 中学校です。中学では語学は日本語か英語を選択するのですが、私のときは日本語を学ぶ人が多く、英語クラスが1クラス、日本語クラスが6クラスありました。いまは親以外とは中国語か日本語で話す場合が多いですが、とっさに出てくる言葉は朝鮮語だったりして自分でもビックリすることがあります。

山下 中国では成績による選抜が厳しいそうですね。まして農村部からですと、よほど成績がよくないと最重点大学である北京大学への進学は難しいと思います。日本では女の子を地元で進学させたがる親も多いのですが、中国ではどうですか。

金 私の通った高校は重点高校でしたが、それでも成績のふるわない人は地元の大学への進学となります。中国では親が一番望むのは子どもの出世ですし、親も子どもレベルの高い大学への進学をめざします。男女は関係ありませんね。

山下 金さんの人生にとって最初の転機が北京大学への進学だったわけですね。

金 そうですね。私にとって大きな一歩でした。中国国内で、北京大学の学生は伝統的に反骨精神を持っていますし、お互いの意見を尊重しあう風土があります。私も、比較的自由な発想をする意思が芽生えるきっかけを与えてもらったと思います。



金春姫 (Chunji Jin)

1978年中国延吉市生まれ。2000年北京大学を卒業後、一橋大学に留学「中国における日系製品に対する消費者購買意図の形成—対日感情が消費者行動に与える影響を中心に—」をテーマに博士論文を書き、2007年商学研究科より博士号を取得。
現在は、成城大学経済学部経営学科にて講師を務める。

山下 北京大学の学生はとにかくよく勉強しますね。私が訪ねたときも、夜中の3時、4時まで灯がついていました。

金 自習室はいつも満員。一橋大学の学生より勉強します (笑)。

山下 北京大学からだアメリカへ留学する人が多いでしょう。なぜ日本を選んだのですか。

金 みんなアメリカへ行きたがるので、私は違うところへ行こうと思ったんです (笑)。日本語の方が英語より身につけていたということももちろんありました。私の学生時代は、欧米や日本の豊かさ、生活水準の高さは大きな魅力でした。でも、いまは上海や北京は、欧米や日本とさほどかわりません。やりたいことが特に見つからない場合に海外へ行くというケースも多く、海外で学んだから必ず有利ということはなくなったと聞いています。逆に中国のことをあまり知らないし、海外留学のための投資を回収するのに時間がかかります。

山下 留学先としてはいまでもアメリカが一番ですか。



金 そうだと思います。一橋大学は、日本語を学んでいる人は知っていますし、北京に大学の事務所ができてから知名度は上昇しています。でも、概して男子の方が日本への抵抗感は強いですし、アメリカへ向いている学生を日本に呼ぶのは工夫がいると思います。中国からは理系の留学生が多いですが、理系に限定せず、日本文化のわかる人や潜在的にわかりそうな人、日本文化に興味をもつ人に来てもらった方がいいと思います。

反日感情が噴出する中、 日本最良は敵対される

山下 金さんが一橋大学を選んだのはどうしてですか。

金 日本へ留学する選択肢としては、東大と一橋大学の二つがありました。私は事前に二校を実際に訪ね、一橋大学に決めました。こちんまりとした大学で学生も気さくな感じ、キャンパスの雰囲気がとても良かったことが決め手でした。

山下 2000年来日し、去年まで6年間一橋大学で学ばれましたね。いま振り返ってどうですか。

金 前半の修士時代は学部時代の延長で、勉強して単位を取ったという感じ。ちょっとムダにしまったかなという思いがあります。でも、その過程を踏んできたからこそ興味をもってしっかり勉強しようという意思が生まれたのだと思います。

山下 端で見ていると、アルバイトとの両立が大変そうだったけど、実際はどう？



金 大変だったのはやはり博士論文ですね。書けるだろうと甘くみていたのです (笑)。途中でテーマを変えてからは、意欲も沸きましたし、気持ちの上でもラクになりました。

山下 対日感情と日本製品に対する態度形成という卒論は、どのくらいで書き上げたのですか。

金 1年弱です。前のネットワーク理論をテーマとしていたとき、中国の学生百数十人にインタビューをしていましたから、そのデータが使えたというメリットもありました。小泉政権のときは反日感情がピークで、日本にいる中国人は肩身の狭い思いをしましたが、一時帰国の際の食事会などでたまたま誰かが日本にいるよといった話になると、場の雰囲気がまずくなるということもありましたね。私のように中国と日本の真ん中にいる人間にとっては、反日感情は意識せざるを得ないテーマでもあるんです。

山下 中国での調査や金さんの論文を読み、反日にも複雑な思いがあるということがわかりました。世間や世間体ということがあるでしょう。日本製品を使っていることがどう思われるのかは、消費構造にもかなりの影響がありますね。

金 メイド・イン・ジャパンは品質が高く評価が高い反面、日本製品を使っている人は日本最良と思われるからと周囲の目を気にして避けるといったこともありました。反日色が濃厚なときは、



特にそうでしたね。いま中国経済も発展してきましたので、欧米だからどうということも薄れてきていると思いますし、若い人

山下裕子 (やました・ゆうこ)
商学研究科准教授



のなかには日本文化が好きという人も増えています。

山下 金さん自身は、日本文化についてはどう思っていたのですか。

金 留学前は、日本語以外はほとんど知りませんでした。いまでも大河ドラマを見ようとは思いませんけど（笑）。博士論文のためのインタビューで会った人民大学の女子学生は日本のドラマが好きだと言っていました。

大学卒が保証にならない、 厳しい中国の就職事情

山下 金さんはいま成城大学で専任講師をしています。中国の大学に戻るといことは考えなかったのですか。

金 考えなかったわけではありませんが、日本の大学の方が教育や研究に専念できる環境があります。中国では指導教授の力が強く、教授と良好な関係を築くことに注力しなければいけないのです。率直に言えば、人間関係の力はまだ強いですね。

山下 それだけ競争が厳しいということでもあるのでしょうか。

金 経済の発展につれて競争も激化していると思



います。いまは大学卒だからといって就職がラクとは限りません。特に女性は出産等のハンディがありますから、キャリア形成はだんだん厳しくなっていると思います。

山下 日本企業に就職することを中国の人はどう考えていますか。

金 日本に限らず外資系企業への就職は、給与などの面で以前ほど魅力ではなくなっています。知名度という意味では、その企業がどこまで中国進出に本腰を入れているかとリンクしています。

山下 これから研究者として歩んでいかれるわけですけど、金さんは自分が書いた論文をどういうところで評価されたいと思っていますか。

金 私の関心領域で言えば、興味をもち、理解してくれるのはやはりアジアです。とはいえ、国際社会で論文を発表するためには英語で書かなければならないのです。学術分野では、日本も中国も韓国も視線は欧米に向いており、お互いをあまり見ていないと思います。客観的に言って言葉の壁はありますが、乗り越え、お互いに連携することができたら面白い研究ができると思います。

山下 アジア人同士なのに、研究は英語というお互いにとっての異言語を介さなければならぬわけですね。金さんの指摘は、とても貴重な示唆だと思います。最後に、金さんのこれからのキャリアプランを教えてください。

金 私は日本で学び、いま日本の大学で教えていますが、現時点ではとてもハッピーです。成城大学の学生を見ると、とてものんびりしている（笑）。気持ちにゆとりを持てるというのは、いいことだと思います。長期的なプランは未定ですが、いまはこのゆとりのある環境のなかでいい仕事をしていきたいですね。やれるだけのことをやろうと思っています。

対談を終えて 「60年代生まれは忘れられた人たちです」

COEプロジェクトの成果をまとめた著作、『ブランディング・イン・チャイナ』の中、金さんが執筆された化粧品の記事の冒頭の一節である。上海あたりの若い女性は高感度なメイクをして街を闊歩しているけれど60年代生まれの女性たちは化粧を知らないで育った世代なのである。同じ世代に属する私としては、幾重にも複雑な気持ちになったものだ。

怒涛のように活気付く中国の現場は圧倒的に若い。新聞雑誌の社長は30歳、編集長は25歳。日本の戦後もこんな感じだったのだろうか…。金さんの淀みのない通訳のおかげで、彼らの威勢のいい

野望、どこか醒めた冷静な目、意外にあどけない心が垣間見える。「何事も停滞している日本より、中国にいた方が面白いんじゃない?」、金さんに聞いてしまったりもした。

中国とは好対照に、何事も穏やかにしか変わらないのが日本である。その中でも大学の改革は遅い。女性の採用、ましてや外国人の採用はなかなか進まない。そんな訳で、金さんの採用が決まった際には、本当に嬉しかった。大先輩である木綿良行先生が決断してくださったという。「実力のある人を採用していかなかったら、大学はどんどん衰退していってしまう。」長年勤めた大学を去

るにあたっての、自分の後任人事に際し、何と深く清々しい態度だったのだろうか。

実力ある人材を活かせるのは、実力ある社会である。木綿先生がなさったような一つ一つの決断が積み重なることで、静かな国日本の改革は進むのだと信じていた。そのような静かな決断が、アジアの若い世代に新しい絆を結んでいくのだと思う。天安門事件のとき、一橋大学でも多くの60年代生まれの若者が中国の留学生とともに怒り涙した。あれから20年、アジアが積み重ねた年月の重みを忘れず、新しい若者たちに絆を結ぶ「忘れられない世代」となりたいものだ。

個性は主張する

One and Only One

第 22 話

弁護士

松本三加氏



M i k a
Matsumoto



今や、ビッグローファームの 渉外系の事務所も

かつてはパイオニアと呼ばれていた。

公設系、地域系弁護士の
パイオニアでありたい。

「こんにちは。松本です」

ドアをあけると明るい笑顔が飛び込んできた。

在学中に司法試験合格、「ひまわり弁護士」第一号という

経歴から想像していた堅苦しい雰囲気はどこにもない。

失礼を承知でいえば、ごく普通の子育て中の主婦である。

よく動く表情で語り、よく笑う。

だが、核心にふれたとき、眼差しはキッと強くしまる。

知性と強い意志、毅然とした生き方を貫く人特有の何かが伝わってくる。

松本三加さん・35歳。

「公設系」弁護士のパイオニアの一人である。

多摩っ子だから一橋

子どもの頃から自立心旺盛でちょっとヘソ曲がり。「自分の食い扶持は自分で稼ごう」と考えていた松本さんが将来は弁護士と決めたのは、高校2年の秋だった。高校に講演にきたOGの話に惹かれたことがキッカケだったという。

といっても話の内容は覚えていないんです（笑）。先輩のさっそうとした姿にいいな、すてきだなと思ったこと、社会のために働いていると実感できる仕事に思えたからだったと思います。理系はダメでしたが、成績



は良かったので塾では東大受験を薦められました。みんなが一番だと認めるような大学には進学したくなかった。一橋大学を選んだのは、多摩っ子で散歩コースだったから（笑）。

少人数制でこぢんまりしているし、国立大学なのに在野精神がある。私に向いていると思いました。

迷ったあげく、 法律家の道へ

弁護士をめざして法学部に入学した松本さんが、勉強一筋とはいかなかった。楽しい学生生活に目移りし、法曹になることへの距離感がちょっと遠のいた。どこにでもいる学生としてのスタートだった。

最初から司法試験一筋なんてかっこ悪いという気持ちもありました。「オマエのノートなんて使えないよ」とクラスメートに言われるくらい、楽しい学生モード全開でした。Humanite（合唱部）で歌ったり、サイクリング・サークルで北海道を走ったり。北海道は2度行ってほぼ全道を走りつくしました。

法律家が私に向いているのかと、迷いがあったことも事実です。だから、2年間遊びほうけて、3年のときなんとなく試験勉強を始めました。4年生の初めには、一

応就職活動もしてみました。マスコミや金融機関など普通に資料集めをしたりして。でも、心のなかで弁護士になりたいという気持ちが強かった。そうすると面接などでボロがでちゃう。バブル崩壊後の就職氷河期でしたから、企業の方も「そんな半端な学生は要りません」となってしまう。

やはり弁護士しかない。心を決めた松本さんは、本気で司法試験の勉強に取り組み始めた。当時の一橋大学では、司法試験組はマイノリティ。松本さんは学生が主体となって始めた勉強会に参加した。

勉強している人がそう多くないので、同学年だけでなく、学内の司法試験組はたいい顔見知りになります。それで、学生同士勉強しあうんです。夫（渡辺淑彦弁護士）と知り合ったのも、この輪の中でした。幸運だと、合格した先輩が指導してくれます。ここに入ったことが、私にとっては節目になりました。

で、4年生で初めて司法試験を受けましたが、択一試験で不合格。受かる人と受からない人がどう違うのか現実が見えましたね。まわりのクラスメートは次々と就職を決めていくし、気持ちが動揺した。最終的には「司法試験で行くんだ」と開き直りました（笑）。だから私、在学中に司法試験合格ですが、2年留年での在学中。学生の特権を活かして休学し、自転車で図書館に通って勉強しました。



過疎地赴任。 それは自然な選択だった

1998年3月、一橋大学を卒業した松本さんは司法修習生となる。期間は2年。前期の4か月は座学で法律実務の基礎を学び、後期に再び研修所にもどるまでは12か月の実務修習である。弁護士志望の修習生は、たいい実務修習中に「就職活動」をすることになる。

早い人は、前期のうちに大手事務所への就職を決めてしまいます。一口に弁護士事務所といってもそれぞれ特徴があるんですね。私は、大きな渉外事務所から小さな事務所、

いわゆる人権派の事務所と、すごたくさん回りましたが、全然決められなかった。何かしっくりこなかったんです。櫻井光政先生の桜丘法律事務所の求人に出会ったのは、そんなとき。「弁護士過疎地域へ赴任のこと」という応募条件を見て、これだと思いました。



この2000年当時、全国には60か所以上の無弁護士地域があった。櫻井弁護士は個人の活動として無弁護士地域の解消に奔走していたのである。日本弁護士連合会が、1億円の基金（ひまわり基金）をもとに無弁護士地域への弁護士派遣に動き出したのは1999年。2000年4月に桜丘法律事務所に入所した松本さんは、期せずして「ひまわり弁護士」第一号になったのである。赴任先は北海道紋別市。オホーツク海に面した人口約3万人の町で、住民が法律相談を受けるためには片道クルマで3時間かけて旭川まで行かざるを得なかった地域である。

同時期に石見と石垣島にも派遣されましたから、正確には3号かも（笑）。ひまわり弁護士は、無弁護士地域に数年間という期限付きで赴任する制度ですから、これまでの弁護士の働き方のモデルとは自ずから別のものになります。みんながやっていることをやるのはイヤ、既存のものにあてはまりたくない私にはごく自然な選択でした。これなら弁護士の資格を活かせると思いましたし、「公設系」のパイオニアになれることも魅力でした。でも、弁護士の王道はイソベンで力をつけ、クライアントをもって独立するというコースです。大切な時期に力がつくのかどうか分からない、知らない土地へ余所者が期限付きで開業して見返りがあるのかと、泥船に乗るようなものじゃないかと、周囲の目は冷たかった。研修所の同期生で興味を示す人はだれもいませんでした。

何でもやるから 筋力がつく

2001年3月、結婚したばかりの夫を残し、松本さんは紋別市へ単身赴任した。「紋別ひまわり基金法律事務所」の開設は4月1日だったが、住民の反応は熱烈歓迎。開設の二

ュースを知り、東京へ電話をかけてくる人もいたという。

予想を超えた忙しさでした。40代の女性事務員さんと2人だけの事務所でしたが、門前払いは一切なし。離婚や相続、敷地の境界をめぐるトラブル、交通事故、刑事事件…。訪ねてきた人の相談はすべて受けました。裁判所は紋別支部が市内にありますが、大きい事件になると、本庁の旭川まで一日がかりで行かなければなりません。弁護士のできることは、すべてやったと思います。初めてでしたから弁護士とはこういうものだと思ってやりましたが、フルマラソンを全力で走っているような日々。1000本ノックをずうっとやっている感じでした。

当時私は27歳、「27歳の小娘が」という目で見られるかなと思ってましたが、そういうことはさほどなかったですね。人間が生き、生活している間にはさまざまなトラブルが発生します。病気のとき医者にかかるように、みんな切実に法律家を求めているのだと思います。反面、依頼人はトラブルを抱えていると周囲に悟られたくないんでしょうね、町で会うと目をそらすんです。小さな町ですから、みんなが私のことを知っている。「昨日飲み会だっただろう」「魚買ってたよね」という感じ（笑）。プライバシーもない日々でした。

でも、弁護士としての筋力がついたという実感はありま



す。ケースをたくさんこなすことで、効率化や省力化もできるようになりました。「先生の言うことよくわかんないよ」と言われ、どうしたらキッチンと伝わるか基本的な訓練にもなりました。周囲に相談できる先輩や仲間がいないわけですから、孤独を感じる時もありましたし、経験不足から依頼主と一緒に遠回りしたこともある。自己流になるのじゃないか、要領の良さが身について依頼主の気持ちへの配慮が疎かになっているんじゃないか、と自分で黄信号を感じたこともありました。もうダメかもと思ったことも…。そんなとき支えてくれたのが、櫻井先生と夫でした。

アメリカへ留学。 夫は専業主夫に

2003年3月、任期を終えた松本さんは桜丘法律事務所
に帰任した。弁護士としての仕事を黙々とこなしながら、
心のなかは揺れ動いていた。紋別市のひまわり弁護士として
得たものを、次にどう活かしていけばいいのか、道筋が
見えなかったのである。



ただ漫然と仕事をしていくのは好きではないんです。何のためとハッキリ目的が見え、自分で納得しないと進めない性格なんですね。次が見えないなら、いまは勉強する時期なんだと勝手に考えて、アメリカへの留学を決めました。ちょうど法務大臣の諮問機関で法テラス構想がクローズアップされていた時期。法律の制度設計について学ぼうと思いました。夫との別居が解消され、長男が生まれていましたから、もう別居はなし、家族は一緒にいてナンボと強く思っていた。夫を説得し、勤めていた法律事務所を辞めてもらい「専業主夫」として一緒に渡米して

もらいました。彼は1年間の育児休業で、主夫の辛さと楽しさをたっぷり味わったみたいです（笑）。

一度使ったら手放せない。 温水式便座のような弁護士

2006年～2007年アメリカ留学。2007年長女誕生と、
渡辺・松本家の家族の歴史も一段と深まってきた。そして
いま、松本さんは福島県相馬市でひまわり弁護士として活
躍する夫とともに、相馬市で暮らしている。

育児休業中で、仕事は不本意ながら夫の下請けです（笑）。
ひまわり弁護士ができるまで、弁護士は移動することなく、
地元の縁・人の縁で地盤を築いてきました。でも、いまビ
ッグローファームになっている渉外系の法律事務所も、最
初はパイオニアだったはずですよ。弁護士は、健康でアタマ
が動けばどこでも腕一本で開業できます。ボスにNOと言
って飛び出してもやっていける。権力と一人で戦うことも
できる。だれにも媚びずに仕事として立ち向かい、食べて
いけるんです。私は、ひまわり弁護士は医療でいえば地域
医療に専念する人、ゼネラリストの専門家だと考えていま
す。例えは悪いけど、温水式便座のように一度使うと手放
せない存在になるのがベストだと思うんです。

こう確信できるようになったのも、自分自身で経験し、
乗り切ってきたからでしょうね。紋別時代に専門家として
知識を磨き、「媚びない・妥協しない・毅然としている」
を実践してきたから、どこでも食べていけると自信がつい
た。何のためにやっているのかをつねに考えてきたおかげ
だと思います。相馬の次は新天地で開業する予定ですが、
そこを終の住み処とは考えてはいません。かっよく言え
ば、ひまわり弁護士はこの日本全部が住み処なんです（笑）。

One and Only One

◆松本三加《まつもと・みか》

1974年、東京都小金井市生まれ。女子学院高校時代はオーケストラ部に所属、オーボエを吹く。1992年、一橋大学法学部入学。1997年司法試験に合格、1998年司法修習生を経て、2000年桜丘法律事務所に入所。2001年～2003年、ひまわり弁護士として北海道紋別市で活躍。2006～2007年米国留学。2007年、夫の渡辺淑彦弁護士とともに福島県相馬市の「ひまわり基金法律事務所」に赴任。1男1女がいる。

「一年間の専業主夫で、
辛さと楽しさを
たっぷり味わいました」

「今は育児休業中で、
仕事は不本意ながら
夫の下請けです」



世界を解く

第十四回テーマ

「笑う」

学ぶ、働く、遊ぶ…。人間は日々、さまざまな行為を営んでいます。どれも一見、ごく当たり前のこと。

国境も地域も、民族も歴史も、時間も空間も超えて、

普遍的に存在しているこれらの行為は、その普遍性ゆえに見過ごされてしまいがちです。

しかし、例えば「学ぶ」という行為の本質を深く掘り下げ、

さまざまな角度から「学ぶこと」の意味を問うたとき、そこには驚くほど豊かな世界が現れてきます。

学ぶことの社会的意味とは、その歴史的経緯が伝える価値観の変遷とは、

学びの経済効果と社会システムとの関係とは、等々。

ごく当たり前の行為は、その相貌を一変し、生きるという営為の本質に迫る、

あるいは社会と人間のあり方の原点を理解する、貴重な手がかりとなるのです。

本特集企画は、こうしたキーワードにスポットをあて、そこから浮かびでる多様で豊かな世界を、

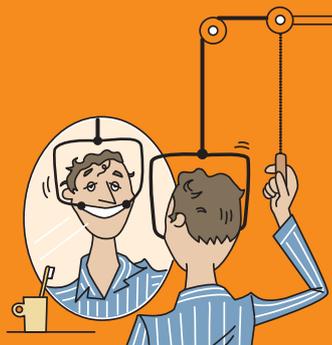
それが示唆する多くの問題点をありのままに考えていきます。

第14回のテーマは、「笑う」。

異なる専門領域、視点をもつ研究者たちに、

それぞれの立場から「笑う」という言葉が連想させる今日的諸問題を語っていただきました。

笑いは世界を祝福する



言語社会研究科教授

糟谷啓介

「笑い」は、関係から生まれる

干からびた知識を無理やり頭につめこんでも、退屈になり眠気を催すだけである。それに対して、笑いは精神に活力をあたえ、決まりきった約束事から精神を解き放ち、これまで思いもしなかったものの見方を授けてくれる。笑いこそ新たな認識の生みの親なのだ。だからわたしは、「十の知識よりも一つの笑い」を授業のモットーとしているほどである。だから、学生たちが一度でも笑ってくれたら、わたしの授業の目的は達成されたことになる。

その日も教室のそこかしこから笑い声がもれたので、首尾よく目的達成とばかりに研究室にもどろうとしたとき、ある親しい学生に呼び止められた。その学生曰く。「いやあ、先生の駄洒落は最高っすね。先生が一発ギャグをかますと、教室全体がサムークなところなんか、何ともいえないっすね。あの凍りついた雰囲気は、ほんとたまんないっす。それじゃあ来週も笑わせてくださいね。さいなら。」

わたしは一瞬呆然とし、足元の地面が崩れ落ちるような幻覚に襲われた。しかし、この程度の打撃でくじけては、教師家業はとでも務まるものではない。すぐさま気を取りなおしてこう考えた。あの学生は勘違いをしている。行為において重視すべきは、目的やプロセスではなく、その結果なのである。わたしのことが刺激となって、学生の笑いという反応を引き起こした。その外的事実だけに目を向ければよいのである。(こういうときだけ、わたしは行動主義心理学を信奉することにしている。)

しかし、冷静に考えてみると、あの学生の言い分にも一理ある。あるものが笑えるのは、そのものの自体の性質によるのではなく、それをどのように見るかにかかっているのである。それ自体はまったく面白くないものでも、ある文脈におかれれば、たちまち笑いの種となるのだ。面白くないところが面白いギャグだってある。笑いは実体からではなく関係から生まれる。パスカルもこう言っていた。「よく似た二つの顔は、どちらも別々では人を笑わせないが、いっしょに並ぶと、それらが似ていることによって人を笑わせる」と。なるほど、それで何の変哲もない「おそ松くん」でも、六つ子になるとおかしいというわけか。

それだけではない。ひとつのものであっても、見せ方を工夫すれば笑いを引き起こすことができる。ハムレットを普通の二倍のスピードで演出すればりっぱに喜劇になると言ったのは、イヨネス

コだったかピーター・ブルックだったか、それとも誰でもなかったか。それはともかく、なにかが「可笑しい」のは、それがどう「見える」かにかかっている。すべては視点と関係の問題なのである。この世でわたしたちが毎日辛抱強く生きている姿でも、ヨリ高キトコロから見るならば、すべて笑いの対象となるはずだ。いわんやわたしの洒落をおいておや。

「笑い」の錬金術

そういえば、わたしはどこかでこんな話を読んだことがある。

ある映画館でロベール・ブレッソンか誰かが監督の戦争映画を上映していた。ある映画ファンがその映画館に入って、わくわくしながらスクリーンを見ていると、周囲の観客は笑わなくてもいいところで笑いこぼして、どうにも手に負えない。「芸術に対するなんたる冒涇！」と憤慨してわけを聞いてみると、どうやらその映画の前に『モンティ・パイソン』を上映したらしいのである！ どんなに真面目くさった芸術映画でも、『パイソン』を見た目で見るなら、笑いの種になってしまうのだ。

『モンティ・パイソン』を御存知ない方には、何のことやらわからないだろうが、一言でいえばそれは、1969年から74年にかけてイギリスのBBCで放映された、この世でもっともアナーキーで物騒ででたらめなコメディ番組である。いまではDVDになって出回っているから、見たことのある人も多いだろう。少し遅れて日本でも放映されたことがあり、実は学生のころわたしはその一部を見た覚えがある。

とはいうものの、たしかに上のエピソードをどこかで読んだはずなのだが、どの本だか思い出せない。この文章を書くので、それらしき本や雑誌をひっくりかえしてみたが、どうも見つからない。もしかしたら、わたしが自分ででっちあげた話なのだろうか。まあ、細かいことを気にするのは止めておこう。『パイソン』の効き目が絶大であることは、わたしの経験からも実証済みなのである。

あまり大声では言えないが、面白くない会議がある日の前日には、わたしは決まって『モンティ・パイソン』を見ることにしている。こうして、「死んだオウム」やら「スパム・サンドイッチ」やら「スペイン異端審問官」を頭につめこんで会議に臨むと、なんたる不思議、どんなに気の抜けた退屈な会議であっても、一瞬のうちに爆笑のコメディ、いや『ピエール・パトラン先生』もかくやと思わせるファルスと化して、まったく飽きることがない。これこそ笑いの錬金術である。みなさまもどうぞお試しあれ。

危険視される「笑い」

こんな話は、世の真面目な方々のひんしゅくを買うにちがいない。「けしからん！ 不真面目だ！」と言われるのは目に見えている。しかし、なぜ謹厳実直なお偉方の面々は、笑いをこども敵視するのだろうか。ちょうど、小説『薔薇の名前』の舞台になった修道院のホールへ長老のように。

『薔薇の名前』はイタリアの記号学者ウンベルト・エーコが書いた小説だというので評判になり、映画化もされた。この作品を支える筋立ては、アリストテレスの『詩学』第二部喜劇論のこの世に残る唯一の写本がこの修道院に所蔵されているというものである。ホールへ長老は命をかけて、この秘密が世に知られないようにしている。その理由はこうだ。もしアリストテレスが笑いを正当化しているのが知れ渡ったら、ひとびとはそれまでの従順さをかなぐり捨て、権威ある者を笑いの種にして反抗しはじめるだろう。そんなことはあってはならない。だからこの書物は読まれてはならな

いものなのだ、というわけだ。もちろん、『詩学』第二部うんぬんというのはエーコの創作であるが、うまいところに目をつけたものだ。

いったいホルヘは笑いのどこに危険を感じ取っていたのだろうか。笑いが社会風刺の武器になることなのだろうか。たしかチャップリンだったと思うが、ひとはなぜ笑うのかという問いにこんな風に答えていた。「労働者がバナナの皮ですべてもひとは笑わない。ところが、警官がすべてころべば大笑いする。それは警官が権力の象徴だからだ」と。たしかにそういうところはある。しかし、笑いに社会的効用を求めるこの種の議論は、どうも笑いの本質を微妙なところではずしているようだ。かつて哲学者のホッブズは「ひとは他人に対して優越感を覚えたときに笑う」といった。社会の標準からはずれたものを笑いものにするすることで秩序を保持するという、ある意味では実も蓋もない定義である。しかし、方向はまったく正反対であるにせよ、チャップリン説はこのホッブズ説をひっくりかえしたにすぎないかもしれない。どちらも笑いの社会的効用に着目していることには変わらない。

ホルヘも風刺の武器となる笑いを恐れていたのだろうか。いやこの人物はことの本質をつかんでいたようだ。なぜなら、こう言っているからである。「笑いはつかの間、民衆に恐れを忘れさせる。ところが掟は恐れを介して律するのである」と。マキャヴェッリが喝破したように、君主の支配する社会秩序を根本で支えるのは「恐れ」である。笑いはその「恐れ」を雲散霧消させるのだ。ホルヘが真に恐れていたのは、このことである。

「おまえたちフランチェスコ派は笑いに寛容らしいな」

「はい、聖フランチェスコ様はよくお笑いになりました」

「笑いは人の顔をゆがめて、サルのようにしてしまう」

「サルは笑いません。笑うのは人間だけです」

「罪としてな」

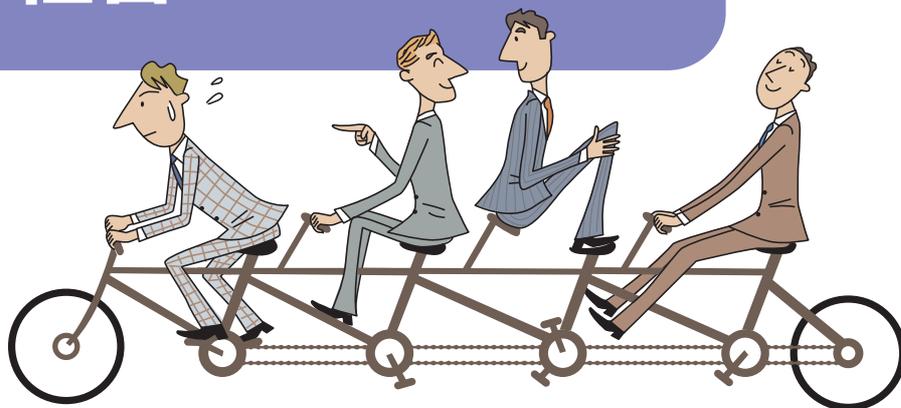
祝福としての「笑い」

シヨーン・コネリー扮するバスカヴィルのウィリアムがホルヘ長老に初めて会ったときの会話である。ちなみに、ウィリアムはフランチェスコ派の修道士である。有名な小説を映画化すると失敗することが多いが、この会話があるだけで、映画版も捨てたものではないと思う。とくに「聖フランチェスコは笑うのが好きだった」という台詞には思わず快哉を叫んでしまった。聖フランチェスコは、おそらくヨーロッパでもっとも愛されている聖人ではないだろうか。チェスタトンやジュリアン・グリーンなどの名だたる作家が伝記を書き、ロッセリーニやゼフィレリが映画化したほどである。フランチェスコは鳥に説教をし、獰猛な狼を改心させ、「兄弟たる太陽、姉妹たる月」を俗語で歌った。そして、粗末な服を身にまとい、弟子たちといっしょに高らかに賛歌を歌いながら村々を回って歩いた。ホルヘにとって笑いは罪のしるしであるが、フランチェスコにとって笑いは世界への祝福であった。世界が存在することは喜ばしいことなのであり、だからこそひとは笑うのである。そこには秘密もなにもない。

こどもたちはそのことをよく知っているようだ。こどもは空の雲を見て笑い、木が風に揺れるのを見て笑う。いったいなにを笑っているのだろうか。なにかが「可笑的」わけではないし、なにかの「ため」に笑うのでもない。雲や木や風のリズムに感応したから笑うのである。わたしはそのような境地には到底達しないけれども、少なくとも笑っている間だけは、世の中にはいろいろなことがあるが、それでも世界はよくできているという喜ばしい気分に入れることができるのである。

「笑える」職場を創造する、 アメーバ経営

● 会計学



「笑う」ことの大切さ

2008年3月5日にSan Diego（在外研究中の所属はSan Diego State University : SDSU）で暮らし始めてから、慣れない家事や運転を毎日し続けなければならなくなった結果、日本にいたときよりも腰痛がひどくなってしまいました。レントゲンやMRIを撮影してその原因はわかったのですが、根治治療は無理だそうで、日頃から腹筋を鍛えて使う習慣をつけること、とくに痛みがひどいときには飲み薬に加えて注射をするしかない、と言われました。

それでは、腰痛がすでにひどい状況で、どのように腹筋を鍛えて使う習慣をつければよいのでしょうか。UCSD（University of California San Diego）で筋肉の研究をしていた研究者によると、腹筋を使う習慣をつけるには、ズバリ「笑う」こと、しかも、お腹の底から思いっきり「笑う」のがよいそうです。

そう言われても、たとえば日本でお笑いを見たとき、皆が笑っているにもかかわらず、何がおかしいのかわからなくて笑えないタイプです。日本でも無理なわけですから、テレビやショーのお笑いを見て笑うのは、増して米国では無理そうです。

どうしたらお腹の底から思いっきり笑えるのでしょうか。そう、幸い私は好きなことを研究して博士（商学）の学位を一橋大学からいただきました。好きな研究を進めるプロセスの中で笑うことができたら、それが一番よいのです。われわれ研究者はその多くの時間を研究活動に充てているからです。しかも、在外研究中はさらに研究に専念できる時間が増えます！

「笑う」の意味

多くの人がある人生の多くの時間を過ごす仕事の中で、人は笑うことができるでしょうか。もちろん、ここで言う「笑う」

はlaughであって、derideあるいはridiculeを意味するのでは決してありません。

仕事の場で人が「笑う」とき、その笑いを誘う要因として、何が考えられるでしょう。米国でも不景気が続き、企業においては人員削減があとを絶ちません。こちらに来てから知り合った友人が大手監査法人のErnst & Youngに勤務していますが、同監査法人でもある日突然解雇のアナウンスがあるため、そこで働くCPAたちは戦々恐々としているそうです。このような中ではderideあるいはridiculeはあっても、laughは難しいかもしれません。

やはり、少なくとも自分の意思や能力に必ずしも関係ないところで職が奪われる危険はないということが仮定されていないと、仕事場でのlaughはあり得ないのではないのでしょうか。それでは、その仮定が成立しさえすれば、それだけで人は「笑う」ことができるのでしょうか。そうは思いません。

さて、企業からの依頼を受けて、一橋大学、神戸大学および京都大学の主としてわれわれ管理会計研究者は、この数年間『アメーバ経営学術研究会』に参加しています。人はどのような時に仕事に楽しみを見出し、「笑う」ことができるのでしょうか。アメーバ経営を導入した企業の事例をもとに、この問題について考えてみたいと思います。

管理会計における インテグレーション・導入研究

経営環境が激変したことや、会計ビッグバンの影響などを受けて、21世紀に向けて、多くの日本企業がその組織構造、戦略および管理会計システムの見直しを余儀なくされました。たとえば執行役員制の導入、M&Aの活発化、カンパニー制、ABC/A BM（activity-based costing/activity-based man-



agement) あるいはB S C (balanced scorecard) の導入をその例としてあげることができます。

管理会計研究においては、そのような実務の潮流を受け、M & Aに伴うインテグレーション問題や管理会計システムの導入研究が注目されるようになってきました。その結果、統合後のインテグレーションや新たな管理会計システムの導入を成功させる要因、その阻害要因、およびインテグレーションや導入のプロセスが明らかにされつつあります。そして、それを成功させるのがいかに難しいかも。

われわれは、アメーバ経営のメカニズムとその進化のプロセス、アメーバ経営と経営哲学との関係、その導入の成功要因と阻害要因などについて、組織的に学術的な研究を行っています。もちろん、この研究会に参加している研究者は、依頼企業や研究会とは無関係に、個人的にも当該研究を行っています。私の現在の関心は、米国子会社およびM & Aをした米国子会社へのアメーバ経営の導入と進化にあります。San Diegoにおいても、アメーバ経営導入企業がresearch siteの1つになっています。

ところで、皆さんは三田工業という企業をご存知でしょうか。1998年に会社更生法を申請し倒産したので、若い方はあるいは知らないかもしれません。倒産したこの企業を同年京セラ株式会社が生産することになりました。2000年には京セラミタ株式会社が生産、2002年には当初10年間の予定だった更生計画を前倒して終結させました。

インテグレーションのプロセスにおいて、三田工業が会社更生法を申請した翌1999年に組織構造を変更し、アメーバ経営の要である時間当り採算制度を導入しました。これに携わったリーダー・関浩二氏によれば、真っ先に手をつけたかったのは採算意識の向上だったからです。

というのも、同社の従業員には採算意識が希薄だったからです。三田工業時代、開発部門や製造部門がどれだけ利益をあげているのか、適切な情報を伝達する仕組みがありませんでした。彼らに利益責任が付与されていなかったからです。さらに悪いことに、会社更生法を申請する前の十年間、粉飾決算が行われていました。粉飾決算されていたのでは、自社がどれだけ利益をあげていたのかさえ、従業員が理解することはできません。

仕事の場で「笑う」ことを促進させるシステム

アメーバ経営では、実際に製品を外部市場に販売した時のみならず、管理会計システムによって、社内売買などした時点で設計部門や製造部門がどれだけ利益をあげたかが明確にされ

ます。企業の利益を生むのは誰か、誰に利益責任を負わせるかは、企業経営にとって大事なことです。管理会計では、企業において利益を生むことに責任を負う単位のことをプロフィットセンターと呼びますが、アメーバ経営の特徴は、プロフィットセンターの設定、時間当り採算と呼ばれる独特の利益計算の仕組み、P D C A (plan-do-check-action) サイクル、およびプロフィットセンター長（入社後わずか数年の従業員がプロフィットセンター長になる場合もあります。）を企業の利益に向けて徹底的に動機づけようとする点などに求められます。

アメーバ経営を導入すれば、たとえば設計担当者であれば、いくらでパーツを購入できるかを考えなければならなくなります。経費についても同様です。これに対して、当初は現場から反発の声があがったそうです。今まで考えなくてもよかったことまで、設計担当者などの現場の人々が考えなければならなくなったからです。今まで以上に仕事のために頭を使って行動しなければならなくなることを嫌いました。

しかしながら再建のリーダー自身が現場を回り、現場との直接の対話を重ね、その必要性を再三にわたって繰り返したことで、徐々に彼らの意識が変化していきました。倒産したのはすべてトップマネジメントの責任であり、自分とは関係ないと思っていた設計担当者が、自分たちの仕事のやり方にも問題があったと、認識するようになったのです。

プロフィットセンターの利益と企業全体の利益とはもちろん無関係ではありません。否、むしろ管理会計の世界では、米国であれ、日本であれ、一部企業内取引の修正はあるものの、プロフィットセンターの利益合計が企業全体の利益になるよう、システム設計されてきました。プロフィットセンターの業績測定および業績評価において、プロフィットセンター長が全社的な利益の最大化につながるような意思決定や行動をとることを動機づけるように、努力してきたのです。

仕事を楽しみながら一生懸命行なった結果が、プロフィットセンターの、ひいては企業の業績につながる事が明確にわかる仕組みが整えられたとしましょう。仕事をする中で、ときに上司が思いもかけなかったような意味のある提案をし、それを実行することで利益があがったとします。このとき、提案をした当事者である部下はもちろんですが、上司を含むその部門に所属する従業員も「笑う」に違いありません。そしてプロフィットセンターでの笑いが増えれば増えるほど、プロフィットセンターのみならず企業の業績が向上していく。アメーバ経営のみならず、このようなことを実現させる管理会計システムの構築と運用についての研究がますます重要になっていると言えます。

ネオリベラリズムの パラドクス

● 経済学



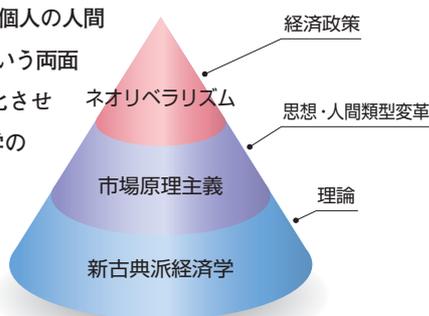
革命も、恐慌も、封じ込めろ！

資本主義は、産業革命を経て成立したその日から、常に2つの天敵と闘わなくてはならない運命におかれていた。それは、革命と恐慌である。

戦後の黄金時代を風靡した資本主義のレジームは、20世紀はじめに自動車王のフォードが考案したので、「フォードイズム」とも呼ばれる。そこでは、製造業の資本が流れ作業で大量生産し、生産性を向上させて労働者に高賃金を支払う。労働者に高賃金は、住宅や自動車をはじめとする消費財の購入を促し、市場を広げるので、恐慌を回避できる。また、好況の企業が多額の税金を払って豊かになった政府の財政が、潤沢な公共サービスを提供する。大量の消費財に囲まれ、政府の豊かな公共サービスを受ける労働者は、意識が保守化し、革命をもはや求めない。フォードイズムは、革命と恐慌を封じ込め、資本主義を持続可能にする一石二鳥の妙策だった。

しかし、1973年の石油ショックを契機として財政危機に直面した政府、そして利潤圧縮に悩まされた企業は、このレジームを維持するために必要な、高労賃と多額の財政支出にますます耐えられなくなった。そのとき、英国のサッチャー首相は「市場にオルタナティブは無い」と喝破し、フリードマンは『選択の自由』を著して市場原理主義を熱く訴えた。

やがて、世界のかなりの部分は、こうして登場した「ネオリベラリズム」に席卷されていった。その根底には、新古典派経済学がある。その理論的前提を個人の人間類型と社会システムという両面において地上で現実化させれば、新古典派経済学のエレガントな均衡世界が現世にもたらされると説くのが、イデオロギーとして



の市場原理主義である。そのうえに構築された政策体系こそ、ネオリベラリズムにほかならない。

図の三位一体から成り、「ネオリベ」や「新自由主義」とも称される新しい資本主義のレジームは、ケインズ主義・フォードイズムとは別のやり方で、革命と恐慌をともに封じ込め、資本主義を持続的にすることをめざした。それは、規制緩和などによってより自由な金融活動に経済を開放し、製造業から役目を引き継いだ金融経済の牽引で資本蓄積をすすめて、恐慌を無限のかなたに追いやらずだった。金融経済はすべての人々に富裕への平等な機会をもたらし、各自は自己責任で競争に参加するはずだった。敗者となっても、それは自身の才覚や努力の不足に起因する自己責任だと民衆に教え込んでおいたから、不満が社会運動に転化し、さらに革命につながることはないはずであった。さらに、1990年初めには社会主義が崩壊し、ネオリベの資本主義は盤石の未来を保証されたかに思われた。

ネオリベラリズムは、 持続的レジームではなかった

米国の裏庭と呼ばれた中南米では、早くからネオリベ政策が導入された。日本でも、小泉首相の時代になって、ネオリベ化が急速に進行した。国内にはホリエモンやその追随者の高笑い響き、『朝日新聞』が、小学生がネット株取引の真似ごとをしている写真の記事に「将来はホリエモンに」などと、得々と見出しをつけるほどになった。

だが、ネオリベが思ったほど持続可能な資本主義のレジームでないことは、まず政治の分野で明らかになっていった。「米国の裏庭」で拡大した格差のもと、一人一票の民主主義的選挙を行った中南米の国々では、ネオリベ政権が次々と否定され、貧困者は勝利の笑いに沸いた。政権交代までいかになくとも、派遣労働などでこき使われた人々は、プロレタリア作家が書いた『蟹工船』を読み、チェ・ゲバラが主人公の革命映画をみてカタルシスを感じるようになった。

そして、今次の金融危機は、野放図な投機の利益で高笑いを続け、万全の金融工学で、返済能力が乏しい人々に貸し込んででもリスクか



ら免れられると信じていた「勝ち組」の多くを奈落の底にたたきこんだ。金融経済はマヒ状態に陥って、実体経済も急速に冷え込んだ。

ネオリベは、持続的どころか、それを続ければ、自らのいる身体を否定して増殖するガン細胞のような、革命と恐慌そらい踏みの対立物が生まれる、恐ろしいレジームだったのである。

地政学的にみれば、ブッシュ前大統領が掲げた新保守主義で、石油・そして中東世界をわが手にして高笑いするはずだった米国は、いまやイラクで、ムスリムの果敢なレジスタンスに直面し、ベトナムに次ぐ惨めな敗北を蒙っている。ムスリムの人々は貧しくとも、イスラム教に裏付けられた共同体の相互扶助という原理で結び付けられていることを、米国は忘れていたのである。この手痛い誤算の結果、高笑いできたのは、イラクの政権との強い結びつきを手に入れた、米国の忌み嫌うイランのシーア派政権になってしまった。さらに、アフガニスタンでは、タリバンが復調し、米国の操り人形だったはずのカルザイ政権を、米国から次第に引き離している。グローバルな一極支配を強化するはずだった米国は、皮肉にも、嫌米・反米勢力を活気付かせ、世界を多極化させて、フランスのサルコジ、ロシアのプーチンなど、それぞれの極のリーダーの唇に笑みをもたらすことに貢献したのである。

いぜん「日米同盟」の御旗のもと、米国に付き従っている日本でも、米国発の市場原理主義思想を信仰し振りかざしていた過去について「懺悔の書」を出し、サッチャー元首相が「無い」と宣言したはずのオルタナティブを伝統的な日本やブータン社会の共同体に求める経済学者が現れ始めた。下げるとわかった思想を株と同じくすばやく手放してしまうとは、さすが合理的期待を身につけた経済学者、と感嘆せざるを得ないが、その判断は正しい。

市場メカニズムは、期待された規制者としての役割を、きわめて限定的にし果せない。それにしても、このような「笑う者の転換」というパラドクスの発生を合理的に期待できた経済学者は、少し前の世界にどれだけいたのだろうか？

高価で窮屈な政府、貧弱な公共サービス

しかし残念なことに、もう一つの皮肉が待っている。いま笑っている人々は、いつまで笑い続けられるかわからないのだ。ベルリンの壁が崩壊したいま、ネオリベに代るレジームが何かについて、明確な展望はない。共産主義作家がむかし書いた小説を読んだ人々が、資本家にしてやったり、とほくそ笑んだとしても、かつてあったスターリン型社会主義は、もはや資本主義の代替となり得ない。

ネオリベの側は、市場原理主義よりマイルドな「モラルある市場主義」を政策化し、事態の切り抜けを図ろうとするかもしれない。それは例えば、野獸的な資本主義を許す規制緩和から、政府の規制と監督をつうじた秩序ある市場活動に転換する、というものである。しかし、市場主義が自己利益中心の性悪的な人間像を前提とする以上、人々はスキあらば偽装に手を染める。それゆえ、政府による監

視には際限がない。今次の金融危機の反省から、格付会社の政府による監視が提案されているが、格付のノウハウを政府が独自に取得し、人員を訓練し、関連情報をすべて得て、偽装を見破り、どの状況にもあてはまる的確かつ完璧な「格付会社の公的格付」を行うなど、本当にできるのだろうか。政府の失敗を非難して市場にその解決を求めた人々が、今度は市場の失敗におののいて政府に擦り寄る。こうして始まる、政府による強力な監視の試みから、必然的に「大きな政府」が蘇る。実効ある監視活動だけでも財政規模が拡大するにもかかわらず、強大化したこの政府は、フォーディズム・ケインズ主義の時代のような手厚い福祉を人々にもたらさない。逆に、監視活動の普遍化は、社会を、スターリン主義に支配された諸国のように息苦しく窮屈なものにさせ、人々の顔から笑いは消え失せるであろう。

すでに、世界各地で、増税の声が聞こえ始めた。日本でも、3年後に消費税が増税される可能性が強まっている。「高価な政府十貧しい公共サービス」への不満は高まり、社会統合が破綻し、資本主義社会はますます不安定になってゆくであろう。

最後に世界で笑うのは、誰か？

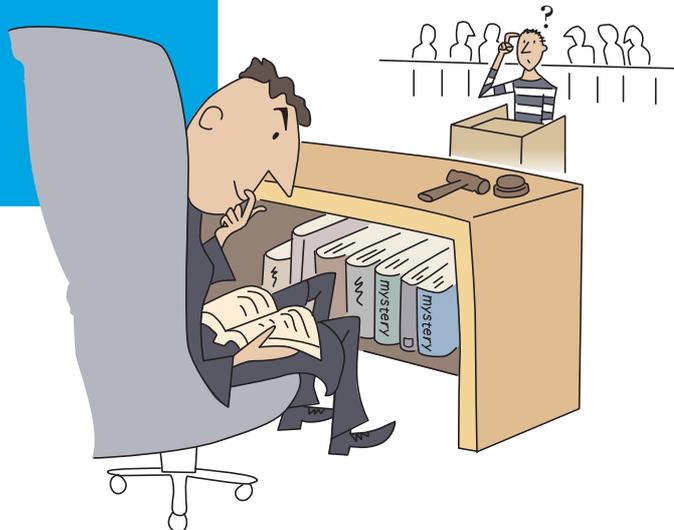
増税に限界があるならば、国債・公債の増発しかないが、これは、フォーディズム/ケインズ主義を自壊させた財政危機を再び蘇らせる。日本国の財政は、すでに、わずかの利子率上昇でたちまち破綻する状態になっている。米国では、国債が増発されすぎ買い手がつかなくなれば、米国の国際収支赤字が米ドルの減価によって解決されざるを得なくなる。それは、米ドルへの信認を低下させ、基軸通貨としての米ドルの凋落につながる。米国は、自らが高笑いでできるよう自分がデザインした制度によって、自らが覇権を失う状況におかれてしまっているのだ。

そのとき、最後に笑える国は、世界のいったいどこにあるのだろうか。それは、ネオリベに洗脳されて金融経済に依存しすぎ、マクロ経済全体が崩壊した、北欧の島国ではない。世界最大の人口を安価な労働力に仕立てあげ、消費者信用が凍り付けば市場が急収縮するリスクをはらんだ米国を主要な輸出先として儲けてきた国でもない。株主資本主義という市場原理主義のイデオロギーに動かされて、短期の株価上昇を経営目標とし、長期的視野での技術開発や長期雇用維持という経営方針を放棄した経営者が動かす企業がはびこる国ともちがう。さらに、激しい投機に狙われて価格が乱高下する石油や天然ガスを戦略商品にし、その供給停止をちらつかせ周辺諸国を恫喝して支配下に置こうとする国は、ほとんどない。

では、最後に笑えるのは、どのような社会か。そこで必要なのは、利己的・性悪的な人々か、それとも利他的・性善的な人々なのか。これらの人々を結びつけるのは、人格がない冷たい貨幣の原理か、それとも人間の顔をした暖かい共生の原理でなければならないのか。これは、読者への課題としておくことにしよう。

法と笑い

● 法哲学



法にユーモアはそぐわない？

日本では法制度や裁判や法学が笑いと相性がよいとはとても言えない。日本の法律家や法学者の中には、ふだんの会話中に冗談を交えるのが好きな人もいるが、彼らも判決その他の法律文書や法学論文の中で人を笑わせようとはめったにしない。しかしそれは万国共通の事情ではない。たとえば『権利のための闘争』で有名な19世紀後半ドイツの法学者ルドルフ・フォン・イエーリングは「法律家の概念天国にて——白昼夢」（1884年、『東海法学』15—17号に邦訳あり）という戯曲仕立ての論文によって、彼が「概念法学」と呼ぶ、当時有力だった法解釈の方法を散々に嘲笑した。概念天国に入国を許された法学者は、誰一人として法的概念や法的制度の目的や現実的機能などの考慮によって汚染されることなく、抽象的に概念の本質だけを考察する。彼らにとって、このようにして連帯債務や占有の性質といった問題を考えるほど楽しいことはない。この論文で概念法学の代表者とされたG. F. プフタは、おかげで現実生活から遊離した空理空論家というありがたない評判をいつまでも負わされている。

もっとも管見の限りヨーロッパ大陸でもこのようなユーモラスな法学文献はやはり例外で、法における笑いの要素は日本と同様に乏しいようだ。しかし英米に目を移すと事情は異なる。そこでは裁判や法学文献の中で笑いが避けられてはいない。Michael Gilbert 編『The Oxford Book of Legal Anecdotes』（OUP, 1984）という本は英米の法律家たちの逸話や名文句を収集しているが、その中には笑いを誘うものが多い。このことは、英米の裁判が日本やヨーロッパ大陸の裁判よりもはるかに口頭弁論を重視するという事情によるところが大きい。英米の法律家は、当事者や証人をリラックスさせたり逆に動揺させたり貶めたりするために、法廷でジョークを飛ばすことがよくあるようだ。また Ronald L. Brown 編『Juris-Jocular: An Anthology

of Modern American Legal Humor』（Rothman, 1988）という本は、もっぱらアメリカの法学・法律雑誌に掲載されたユーモラスな論文のアンソロジーである。日本で同様の書物を編集しようとする者は材料の欠乏に苦しまなければならないだろう。たとえば『Juris-Jocular』に収録された論文の中には、法学論文によく見られる夥しい脚注（さらには脚注への脚注）をパロディ化したものが複数あるが、それ以上に大量の注を大真面目に論文の中に投入する法学者は日本ではいくらでもいる。私が以前読んだことのある高名な民法学者の論文など、注の方が本文の10倍もあったが、そこにはユーモアのかけらもなかった。

判事が描く法と笑い

だが上記の2冊の本以上に純粋な笑いを法の世界にもたらしたのは、法の世界を描いたいくつかのミステリである。

ミステリが裁判や法的問題を取り扱うのはごく自然なことで、周知の作家だけをあげても、1930年代からE. S. ガードナーの弁護士ペリー・メイスン・シリーズが広範な読者を獲得し、最近では『推定無罪』（邦訳・文春文庫）のスコット・トゥローや『法律事務所』（邦訳・小学館文庫）のジョン・グリシャムがリーガル・スリラーと呼ばれる分野でベストセラーを連発している。しかしこれらのアメリカの小説には笑いの要素が決して多くない。それに対してイギリスにはファースに近い小説を書く法律家があった。

その中でも最初にあげるべきはヘンリー・セシルである。彼は裁判官としての本業の傍ら、多年にわたって十数編にわたる小説を発表した。そのうち私が読んだことのある5冊をあげると、第1作『メルトン先生の犯罪学演習』（1948年。邦訳・創元推理文庫）は、法理学（法哲学とほぼ同義）とローマ法の世界的権威であるケンブリッジ大学のメルトン教授が法制度の欠陥や抜け穴を例証する物語を語り続ける連作短編であり、『判事とベテン師』（1951年。邦訳・論創海外ミステリ）は謹直な判事とその不肖の息子



の詐欺師の一代記であり、『判事に保釈なし』（1952年。邦訳・ハヤカワミステリ）は殺人罪で起訴された判事の無罪を、判事の娘に雇われた泥棒紳士が立証しようとする物語であり、劇化もされた『サーズビー君奮闘す』（1955年。邦訳・論創海外ミステリ）は、駆け出しの法廷弁護士が次々と面倒な裁判を担当していく成長物語であり、『法廷外裁判』（1959年。邦訳・ハヤカワミステリ文庫）は、偽証によって殺人罪の有罪判決を受けた実業家が脱獄して、証人たちと法律家を誘拐して集めて「再審」をさせるという異色の「法廷」小説である。

この簡単な紹介からもわかるように、セシルのどの小説も裁判と法の世界を舞台にしているが、少し読むだけで強い印象を受けるのは、法制度と法律家に対する遠慮のない取り扱いである。セシルはこれらの小説でイギリス法の不合理性（たとえば両方とも離婚したがっている夫婦の離婚をなかなか認めない）と非効率性、そして弁護士や判事や法律事務所事務員の怠惰や無能や専横を生き生きと描いている。その描写がどの程度現実を反映していたのか、私はよく知らない。だが自分が知らない事件の法廷に事務所のボスの弁護士から呼ばれて行ったところ、多忙を極めるボスが途中で別の法廷に行ってしまったため判事から意見を求められても言うことがなくて冷汗を流す「サーズビー君」の窮地は作者の体験に基づくそうだから、全体的にかなりの現実性があるのだろう。よくも判事がこんな小説を書き続けながら問題にならなかったものだと驚かざるをえないが、ここにイギリス社会の懐の深さがあるのだろうか。

ただしセシルの小説の登場人物は、少数の例外はあるが、どんな欠点のある者も憎めない好人物として描かれている。法制度や法実務の欠陥も決して告発調で指弾するのではなく、時代錯誤の変わった風習として面白がっているようなところがある。セシルの筆は常に上機嫌さを失わない。そして彼のストーリーの滑稽さは折り紙つきで、ユーモア文学の第一人者P. G. ウッドハウスも称賛を惜しまなかった。

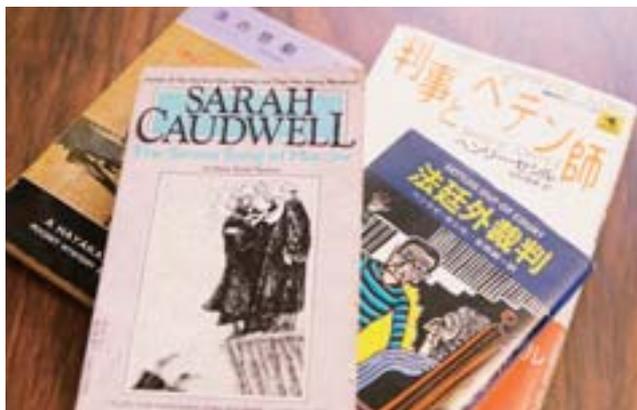
法律家自らが法と笑いを結びつける イギリス発ミステリ

20世紀末になると、サラ・コードウェルの名を逸することはできない。弁護士の経歴を持つ彼女は、オックスフォード大学の法制史家ティマー教授とリンカーンズ・イン所属の数人の若手弁護士たちが活躍する4編のミステリを残した。セシルの小説に比べるとこちらは一層謎解きの興味の強い本格的なミステリだが、法廷場面がないかわり、相続法や税法や信託法などの法制度が重要な役割をはたしている。古典への言及やアンダーステイメント

トに満ちた悠揚迫らぬティマー教授のユーモラスな語り口はセシル以上に洗練されている一方、所々にさしはさまれるスラップスティックの場面は、簡潔な描写ながら映画を見るように鮮やかだ。コードウェルが難病のためにわずか4編の長編しか残さなかったことは惜まれる。それらはすべてハヤカワミステリから邦訳が出ており、どれも楽しく読めるが、中でも英仏海峡に浮かぶタックス・ヘイヴンの島を舞台にした『セイレーンは死の歌をうたう』（1989年）が一番の傑作だろう。

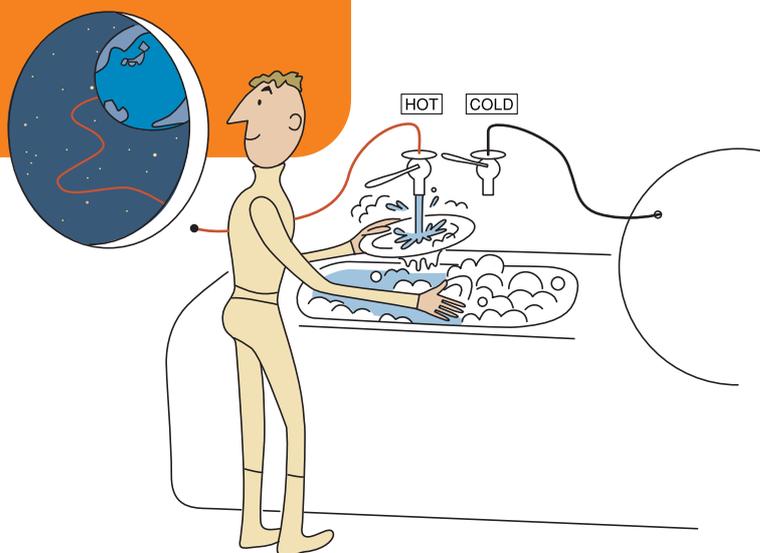
セシルとコードウェルよりもさかのぼるが、イギリスには他にも、戦間期に法と裁判を取り扱った『Misleading Cases』という一連のエッセイ（その代表作は、牛の背中に要件を記載してそれを小切手として振り出し税金の支払いにあてようとした男の事件）によって人気を博したA. P. ハーバート（開業はしなかったが弁護士資格を持っていたし、下院議員でもあった）や、セシル同様判事の仕事の副業として、『法の悲劇』（1942年。邦訳・ハヤカワミステリ）など法律家の世界を舞台にしたり法制度を犯罪の意外な動機にしたりする、渋いユーモアをたたえたミステリを書いたシリル・ヘアなど、法と笑いとを結びつけた法律家が少なくない。そう言えばギルバート・アンド・サリヴァンの喜歌劇のうち最初期に属する『陪審裁判』（1875年。日本未上演）は裁判と恋愛と婚姻制度の神聖さを笑い飛ばしていたが、作詞のW. S. ギルバートにも弁護士経験があったのだった。

彼らに比べるとアメリカの法律家や法学者さえ、いくらユーモアのセンスがあっても、法そのものを笑い物にすることには強いためらいがあるようだ。まして日本では、法廷小説は少なからず書かれているが、そのほとんどが生真面目一辺倒である。法に対する上記のイギリスの法律家作家たちのような不謹慎な態度が社会にとって望ましいことかどうかは意見が分かれるかもしれないが、それは少なくとも滑稽文学の隆盛にとって有利な条件に違いない。笑いの文学の愛読者はもちろん、イギリスの国民性に関心を持つ人一般にも、本稿で紹介したミステリを一読されることを推奨する。



笑気の沙汰

● 環境科学



笑わせるわけではない、笑気ガスの正体

世の中に歯科医院に行くのが好きな人はめったにいないと思うが、その原因は恐らく歯を治療してもらうときの痛みであろう。現在は麻酔技術も進歩し、あまり痛い思いをしなくても済むようになってはきたが、それでも恐怖のために嘔吐反射が酷くて治療にならない患者もいるという。そのような患者には、痛みへの恐怖心を和らげ、不安を取り去るために、笑気（Laughing Gas）と酸素の混合気体を使用する笑気麻酔が施されている。

笑気の正式名は一酸化二窒素（慣用名：亜酸化窒素、 N_2O ）で、1772年にプリーストリーが発見した。この気体を吸入すると軽く酔ったような感じになることから、眉唾な話ではあるが、パーティなどを盛り上げるために使用されていたそうで、映画「リーサルウェポン4」には笑気パーティのシーンがあるという。1795年にはデービーがこの物質に麻酔効果があることを発見した。今ではどの歯科医院にも笑気入りの黒色のガスシリンダーが、あまり患者の目につかない所に置いてある。ちなみに、 N_2O が笑気と呼ばれるのは、吸入したときに笑いたくなるような愉快的気分になるからではなく、麻酔効果によってひきつった顔が笑っているように見えるからだそうである。

人為起源の危険物質 N_2O

一酸化二窒素は大気汚染の元凶である窒素酸化物の仲間であるが、化学の世界ではあまり目立たない存在で、以前は高校化学の教科書の「倍数比例の法則」の説明で一度出てくる

だけであった。しかし、この物質は環境的には大変重要な物質なのである。

筆者がカナダのカルガリ大学で博士研究員をしていたときのボスが、超音速旅客機のオゾン層への影響の研究で有名なジョンストンの弟子にあたる人で、その研究室でフロン代替物をテーマにした研究を始めることになった。そして、いずれ書くことになる論文に使えそうな、オゾン層についての文献を物色していたときに N_2O と再会した。不勉強でそれまで全く知らなかったのであるが、この物質は対流圏ではきわめて安定で、成層圏に到着すると酸素原子と反応してNOに変わる。このNOが O_3 の分解反応を触媒するので、 N_2O はオゾン層破壊物質なのである。大気中の N_2O の濃度は19世紀後半から急速に増加しているのが、本来は規制の対象になるはずであるが、当時は人工化学物質であるクロロフルオロカーボン類がオゾンホールを犯人扱いされていたために大して注目もされずにいた。

この窒素酸化物が環境問題の主役として登場してきたのが地球の温暖化についての議論の場である。今の日本では温暖化といえば、 CO_2 がやり玉に挙げられるが、京都議定書では規制の対象となる3種の非人工化学物質の一つとして、 N_2O が CO_2 と並んで挙げられている。一酸化二窒素の温暖化指数は310とかなり大きく、少量でも温暖化を加速させる非常に危険な物質なのである。

「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」の最新の報告書（2007）には、〔1〕2005年の N_2O の大気中濃度は319ppbで、産業革命前と比べると18%ほど高く、〔2〕過去数10年間の増加率は0.8ppb/年でほぼ一定で、〔3〕現在の N_2O 排出量の約40%が人為起源で、農業と牧畜、廃棄物処理が主要な放出源であると記されている。



窒素は植物の生育には欠かせない元素である。植物に必要な窒素分は、マメ科植物に寄生して空気中の窒素を固定するバクテリアなどによって供給される。またいったん動植物に取り込まれた窒素分は、動植物が死んだときに好気性の硝化細菌によって亜硝酸塩や硝酸塩に変化し、これらの塩は嫌気性の脱窒菌によって N_2O や N_2 に変化する。すなわち、窒素はバクテリアを媒介にして大気と生物の間を循環しているのである。このような窒素サイクルによって植物の摂取できる窒素分には一定の制限があるために、窒素の固定量が事実上、人口の制限要因の一つであった時代が長く続いていた。この制約を取り外し、人口増加への道を切り開いたのが、1840年のリービッヒの植物の成長理論と1914年のハーバーとボッシュによるアンモニア合成法の開発である。この方法の開発によって植物の生育に必要な窒素肥料が必要なだけ入手できることになり、20世紀後半の人口爆発が可能になったのである。現在の人口を支えるのに必要な食糧を生産するには、窒素肥料の使用は避けられないために、土壌からの温室効果ガスの排出削減にはどうしても限界がある¹⁾。

一方、動物性たんぱく質の供給源である畜産では、家畜の排せつ物の硝化・脱窒によって、かなりの量の N_2O が大気中に放出される²⁾。ただし、畜産では、消化管内発酵で CH_4 を多量に放出するウシやヒツジといった反芻動物が厄介な存在となっている。

ウシのゲップが温暖化を加速

ウシやヒツジの家畜化は先土器新石器時代に中東地方で始まったとされているが、家畜化が可能になった最大の理由は反芻動物とヒトは食糧が競合しないことである。ヒトのもつ消化酵素では、 β -グルコシド結合を切断できないために、我々は草や木の主要な成分の一つであるセルロースを栄養とすることはできない。一方、反芻動物はセルロースの消化酵素はもたないが、反芻によって細かく砕かれた繊維分（セルロース）が、胃の中の共生細菌などによってブドウ糖へと分解される。最近では、穀類や骨粉を食べたり、ビールを飲んだりするウシもいることはいるが、食糧という面では反芻動物は人類にとってまことに都合の良い存在なのである。ところが繊維分が分解される過程で多量の CH_4 が発生するために³⁾、文字通り、ウシの「げっぷ」によって温暖化が加速されることになる。

日本では、農業部門⁴⁾からの温室効果ガスの排出量（2006）

は全体の約2.2%と大変小さく、しかも年々減少している。食糧の大半を海外に依存している日本では、農業に関連する温室効果ガスの問題を気にしなくても済むのである。しかし、OECD加盟の先進国で農業が主要な産業である国では全く状況が異なる。たとえば、オーストラリア（2006）とニュージーランド（2005）の最新の温室効果ガス放出インベントリーでは、農業部門からの温室効果ガスの排出量はそれぞれ全体の16%および48.5%を占め、基準年（1990）と比べるとほぼ横ばいか、10%以上も増加していると報告されている。このままでは温室効果ガスの排出量を減らすには飼育するウシやヒツジの頭数を減らす以外に方法がないということになる。事実、食糧農業機関の統計によれば、牛肉・羊肉の生産量は温室効果ガスの削減義務のある先進国ですでに減少し始めているという。

漁業は畜産と比べると温室効果ガスの排出量が小さく、動物性たんぱく質の供給源として、畜産の理想的なオルタナティブであり、漁獲高も年々増加する傾向にある。ただし、海面漁業は長年の乱獲が祟って年々漁獲高が減少しており、養殖漁業による漁獲高の増加分が、海面漁業の減少分を補っている形になっている。しかも、養殖漁業は、漁獲高の90%近くを中国が占めており、今後の拡大の余地はきわめて大きい。現在の養殖漁業が環境的に健全な形で行われているとは言いが、発展途上国における動物性たんぱく質の需要に応えるためには、畜産を拡大するのではなく、持続可能で生態学的に健全な方法に基づく、漁業資源を活用する仕組みを作りだしていく必要がある。

アースポリシー研究所のレスター・ブラウンは近著『プランB3.0』で、養殖漁業の問題点を指摘した後に、インドと中国で行われている粗飼料を用いたウシの飼育を優れた方法として紹介している。その意図は判然とはしないが、彼のような著名な環境問題の専門家が温暖化への影響が大きい畜産を奨励するなどとは、とても「正気の沙汰」とは思えない。

- 1) 日本の温室効果ガス放出インベントリー（2006）では、水稲とお茶を除く一般の作物では肥料中の窒素分1kgから6.2gの N_2O が発生するとされている。
- 2) 家畜一頭から平均で約120g/年の N_2O が排出される。
- 3) IPCCのガイドラインによれば、羊および水牛一頭からの CH_4 排出量はそれぞれ4.1および55kg/年である。
- 4) IPCCのガイドラインでは畜産は農業分野に含まれている。

新春初笑い—— 3の倍数で月夜にアホになる

●文学



形で笑う

中央線に乗ると乗車口の上に電子広告ディスプレイがあり、一週間ごとに更新される。新年最初に乗って見た「番組」は、健康ひとくちコラムのようなそれで、偶然とも思えないが「笑い」に関する話であった。笑うと、脳内になんとかペプチドという物質が分泌されて全身の免疫効果を高めるそうで、「みなさん健康のためなるべくよく笑いましょう」、しかも「作り笑いでもよい」のだそうである。思わず失笑しつつ、今回の『H Q』の「笑う」特集原稿が一斉にこのネタをとりあげていたらどうしようなどと考えるともなく考えた。画面にうつっている解説者の顔には「作り笑い」が浮かんでいたが、車内広告で音声がないせいかあまり有効に免疫物質が分泌されているには見えなく、初笑いのためにめでたい健全さが放出されているとも見えなかった。「作り笑いでもいい」とはいつでも、声のない微笑を口の回りにいくら作ってもダメらしいことは明らかであった。

これはかなり前のテレビ番組でやっていたのだが、狂言師の野村萬齋によれば、芸における笑いは、べつに心とか気持ちで笑うのではなく、ひとえに「形」で笑うのだそうである。笑いらしい笑いを笑うのに、役者が心から楽しい気持ちになる必要などない。笑いの型というものがあって、それを踏んで笑えば、最も笑いらしい笑いになる——両手を下腹のあたりにあてて佇立し、声を発するという、言ってみればそれだ

けの型なのだが、「う、ふ。あ、は。ふー、ふ。はー、は、はーはーはーはー、はーっはーはーはーはっはっはっ」とか文字で書けばそんな感じのその声には遮るものなく放射される天晴れな貫通性のようなものがあって、その声の放射のために「作られる」顔全体のかたちと、揺すられる全身から、いわば天動的波動が放出される。野村が見せてくれたそれは確かに極めて闊達・快活な笑いであった。笑うとき、特に大笑いするときには全身が不随意運動に支配されるが、統御しがたいその不随意運動のすみずみまで統御された再現という意味で究極的な「作り笑い」であるそれは、日常お目にかかるどんな楽しい大笑いよりもはるかに純粋な笑いであると思われた、なぜならその笑いは「心」や「気持ち」と関係のない、つまりは何の意味もない、絶対無根拠な哄笑だからだ。人里離れた山に突然響きわたるといふ「天狗笑い」とはこのようなものであろうと思われた。

昔からよく耳にするいわゆる「あるある疑問」のひとつに、「悪的首領はなぜ笑うのか」というのがある。ここでいう悪的首領とは、世界征服をたくらむショッカー首領とか、越後屋と組んで取締にふける悪代官とかそういうものことだ。「おぬしもワルよのう」「お代官さまこそ」「ぐふ」「げへ」「うへへへへへ」「ふはははははははははは」一方、それら悪人ばらをやっつける正義のヒーローも、昔は悪的首領以上に意味もなく大笑いに笑いながら登場したものだ、「それれよっく見よ額の三日月隠れもなき、我こそは旗本退屈男ぐへ、うは、ぐふふふふふ、ふはははははははははは」どっちが悪人だかわからないそれこそ新



年初笑いにふさわしい作り笑いの最たるもので、あたかもアメノウズメノミコトのごとくまずはその笑いの波動で悪を圧倒しようとするヒーローに対して見せ場を張る好敵手たらんには悪のほうの頭領もまた、めでたくも闊達な笑いを同等の強度で放射するだけの技量が必要とされたのである。そして元旦ともなればメジロ押しのお笑い番組の中で噺家やモノマネ芸人が競ってこれらヒーローの特徴的な笑いを真似て遊んだ。それはとてもめでたい芸だったのである。ヒーローや悪役の笑いをいじって遊ぶ遊びは今でもYouTubeによく上がっているが、「めでたい」という意識はそこには別にないようだ。

天空麻雀

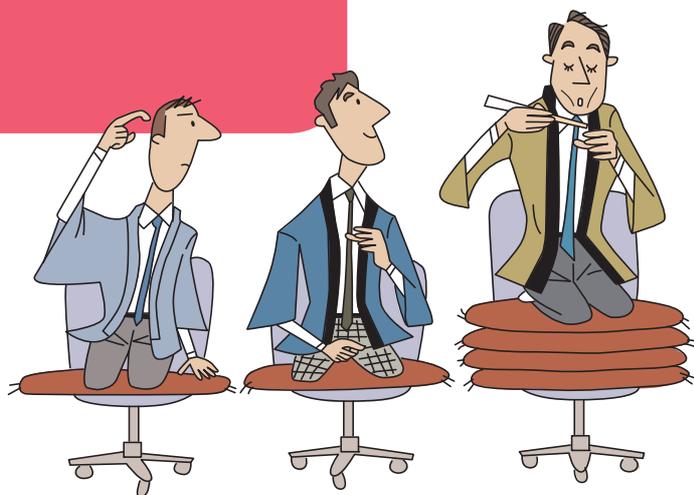
ところで、上記のような笑い声の表記——「ふふふ」だの「ははは」といった擬音表記はいつごろ生まれたのかという疑問を近頃抱きながらまだ調査を始めていないのであるが、こうした表記を用いるにあたって常々意を用いていることがある。山下洋輔のジャズ・エッセイのどこかにあったことだが、山下の分析によれば、筒井康隆の小説の登場人物が笑うときの法則というのがあり、安定した快活な笑いは常に「3の倍数」だというのだ。つまり「ははは」あるいは「ほほほほほほ」のように、「は」や「ほ」が3とか6とか9とか、3の倍数の数だけ書かれるとき、その笑いは至って晴れやかなもので、笑っている人物が心からの満足や喜びを感じていることを示す。これに対し、「ふ、は、はは」とか「うへへへ、へへ」とか、3の倍数でない、かつ不規則な数の並びは、笑い手の精神不安定を示す。「は」が「ひ」や「ひゃ」等であってもこの点かわりはなく、仮にマッド・サイエンティストが謎の実験器具を前に「うけけ、うひひ、うひゃひゃひゃひゃひゃ」と不気味なひとり笑いを笑っていたとしても、3の倍数である限り、彼は彼なりに安定した精神状態にある。上記のような、「ぐへ、うは」から始まって次第に「ふはははははは」と3の倍数に至る例は、最初つい笑い出してしまった、あるいはタイミングを測りながら笑い出したのがやがてすみやかに安定した闊達さに至るパターンなわけである。世界のナベアツが「3の倍数のときにアホになる」のも、この原則と何か関係があるのかもしれない（もっとも、狂言をはじめ日本伝統芸能においては、やはり2が基数だと考えるべきだろうが）。この「分析」に納得するかどうかは人によるだろうが、私はあるとき——もう20年くらい前

になるが——それを読んで非常に納得してしまい、それ以来現在まで、笑い声の擬音表記をするときには深甚なる敬意とともに必ずこの原則に従うことにしている。文章というものを書くにあたって、文体上、具体的な特定の作家から具体的な特定の影響を受けたと言えるのは、唯一、筒井→山下によるこの笑いの擬音表記のみである。もちろん、ものごころついてから今までに読んだありとあらゆるテキストから有形無形の影響を受けているに決まっているのだが。コトバとは、人が使うから自分も使うのであって、人がそれを使う使いかたの照り返しとして自分の使いかたが形成されてくるのは当然であり、笑うのも、人が笑うから自分も笑い、自分が笑うから人も笑うというのが、社会的には最も幸福な形であるだろう。それは波動の交換だ。世界各地に分布する「笑ったことのないお姫様を笑わせる話」は、赤ん坊が初めて笑うときにその場に開かれる幸福と安堵がいかほどのものであるかを暗黙のうちに語っている。笑うこと、笑うことができることによって、人は「この世」にまず足を踏み入れるのだ。

用があって静岡の御前崎へ行った。安部公房+勅使河原宏監督『砂の女』の撮影が行われた大砂丘の名残のある遠州灘の海岸で、名高い日没を見る。雲ひとつない快晴で、まんまるな夕日が、ぼちゃり、という感じで文字通り西の海に「沈ん」だ。左方に目をやると由緒ある典雅な灯台の灯（無人化している）が見える。はっと右方を振り向くと原発（壊れている）がある。何か最果ての場所のようだ。目路の限りつづく灘の潮騒は果てもなく、気がつくとも正面の西空は一面の残照で、一番星がきらきらとまたたいている。日没後およそ10秒ほどである。背後の東を振り向くと、山のない平らな地平線から、巨大な満月（折しも十五夜だった）が、いま沈んだばかりの夕日とそっくりな橙色の頭頂をあらわしつつあった。人っ子ひとりいない砂丘のてっぺんで突風に吹かれながら呆然と見ているうちに、兎のいるその驚くべき円形のはほとんど猛スピードで、轟々と音をたてて昇り、最後に、すぼ、と空に浮いた。「ロン！」あなめでたやな。私は笑い出した、つい笑ってしまったのだ。何が可笑しいのか我ながら不明のまま、「うふ。くへ、むふふふ。うふふふふ、ふふふ、あはっはっは、はははははははははは！」とかそんな感じだったと思うが、それは月との、あるいは、そのような場所で月をそのように昇らしめ、人をしてそのような場景を孤独に鑑賞せしめる何らかの測りしれない摂理との、やはり波動の交換であっただろう。

笑いから考える 職業スキル

●労働経済学



笑わせるのは高度なスキル

『笑わせる！技術』という本がある（中島孝志著）。お笑い芸人のノウハウではなく、通常のビジネスにおいても相手に面白いと思わせることが成功への糸口ということらしい。人を笑わせることはとても難しい。人によって何を面白いと感じるかは、社会的・文化的背景、年齢、人生経験などによって様々だからである。筆者は、年末のM1グランプリ（若手漫才の選手権）を見てもあまり笑えないのだが、中高年のアイドル綾小路きみまろにはいつも爆笑してしまう。いくら気が若いつもりでも、感性は立派な中高年である証拠である。さらに、相手が面白いと感じる何かをつかんだとしても、実際に相手の心に響く形で言葉や間合いを選んで笑わせることは、これまた難しい。人を笑わせるのには、優れた分析・洞察力とアピール力（働きかけ力）が求められる。このようなスキルは職業スキルという点から見てとても重要である。

高スキル業務と低スキル業務に見られる 二極化の動き

情報化やグローバル化が進展するなかで、高度の専門性を要する高収入の職業に就く人が増加する一方で、低収入で不安定な単純労働につかざるをえない人々の存在が大きくなり上げられている。アメリカ、イギリス、ドイツなどでは長期的な傾向として、高スキル（専門知識や技能）を要する業務と同時に必ずしもスキルが高いとは言えないものの機械化されにくい手仕事（対人サービス等）の業務も増え、中間的な業務が減少しているなど、労働市場における「業務の二極化」が観察されている。

アメリカでは1980年代以降賃金格差が拡大すると同時に賃金水準の高い層と低い層（主としてサービス業従事者）の雇用が増加し、中間層の比率が減少するという「労働の二極化」現象も見られるようになってきた。1990年代には、特にコンピュータ化に代表される技術革新が高スキル労働者に対する相対需要を増大したことが所得格差をもたらしたというスキル偏向型技術進歩（Skill-Biased Technical Change：SBTC）仮説が盛んに唱えられていた。アメリカのAutor, Levy and Murnane（以下、ALM）は、業務が非定型的か定型的か、知的作業か身体的作業かなどの観点から、非定型分析業務（Nonroutine analytic tasks）、非定型相互業務（Nonroutine interactive tasks）、定型認識業務（Routine cognitive tasks）、定型手仕事業務（Routine manual tasks）、非定型手仕事業務（Nonroutine manual tasks）の5タイプに分類した。非定型分析業務とは研究・調査・設計など高度な専門知識を持ち、抽象的思考の下に課題を解決するものであり、非定型相互業務とは、法務、経営・管理、コンサルティング、教育、アート、パフォーマンス、営業など、高度な内容の対人コミュニケーション（交渉・管理・助言等含む）を通じて価値を創造・提供するものであり、定型認識業務とは、一般事務、会計事務、データ処理、検査・監視など、あらかじめ定められた基準の正確な達成が求められる事務的作業であり、定型手作業業務とは、農林水産業、製造業など、あらかじめ定められた基準の正確な達成が求められる身体的作業（手作業あるいは機械を操縦しての規則的・反復的な生産作業）であり、非定型手仕事業務とはサービス、もてなし、美容、警備、輸送機械の運転、修理・修復など、それほど高度な専門知識を要しないが、状況に応じて個別に柔軟な対応が求められる身体的作業とされている。ALMによれば、これらの業務のシェアを1960年代から長期的に見ると、



抽象的思考と専門技能を要する業務（非定型分析と非定型相互）が顕著に拡大し、定型的な業務（定型認識と定型手仕事）がそれぞれ70年代と80年代以降に縮小したことが示された。非定型手仕事は60年代に縮小が顕著であったが、その後縮小は大幅に鈍化した（サービス職業は増加）。そして、コンピュータ化が定型業務（手仕事及び認識）に代替して労働投入を減少させる一方、知識集約型の非定型業務（分析及び相互）を補完して労働投入を増加させることが示された。これを応用する形で、イギリスやドイツなどについても研究が進められ、同様な傾向が確認されたり、国による特有な現象の指摘がなされている。

日本でも増加している高スキル業務

日本でも、かねてより産業構造の変化、高学歴化、技術革新などにより高スキル・高賃金労働の需要と供給が高まる一方で、低学歴層において相対的に低賃金で肉体的負担の大きい職種での就業が増加していることが指摘されてきた。また、製造業について、技術進歩やグローバル化によって高学歴労働者への需要シフトが生じていることの実証分析もなされている。

筆者は、ALMの理論的枠組みに基づき、国勢調査の職業小分類を、特性によって「非定型分析」「非定型相互」「定型認識」「定型手仕事」「非定型手仕事」の5業務に分類して1980年～2005年の就業者数の傾向を見たところ、研究・調査・設計等の非定型分析の大幅増加と、主として製造作業に代表される定型手仕事の減少が顕著であった。また、対人サービスに代表される非定型手仕事は増加している。

高度の対人コミュニケーション力を要する非定型相互業務はアメリカと異なり近年むしろ減少がみられたが、これは社会福祉専門職等増加が見られた分野も多かった一方、管理的職業従事者や小売・卸売店主等が著しく減少して相殺されたことによる。なお、笑いに関する職業（落語家、漫才師、コメディアン等）は高度の対人コミュニケーションに該当するが、日本標準職業分類で専門的・技術的職業の中の「演芸家」に分類されている。国勢調査で時系列比較が可能な形で「俳優・舞蹈家、演芸家」でまとめた就業者数をみると、2005年には1980年のほぼ倍に増加している。

IT導入は高スキル業務と補完的な関係

さらに日本で業務変化とIT導入との関係を見ると、非定型分析業務はIT資本と補完、すなわちITを使うことにより知識

集約型の研究・調査・設計等の業務の生産性が高まり需要が高まったのに対して、定型的な業務は代替、すなわち製造業等でIT資本の導入により、必要とされる労働者の数が減少した可能性が示唆された。高度な対人コミュニケーション力を要する非定型相互業務のうち、就業者の減少の著しかった管理的職業従事者については、むしろIT資本と代替した可能性が示唆された。アメリカでは1980年後半以降を見ると経営・管理的職業従事者が概ね増加してきたが、これはアメリカの管理職が、一つの専門の職能（人事、営業、経理等）の中で経験を積む傾向が強く、より戦略的な役割の担い手として需要が高いことに対して、日本の管理職は、企業内における幅広い仕事の経験を通じた内部情報伝達型・調整型であるため組織のフラット化に対して人員削減されたことが推察される。

専門知識・技能、対人コミュニケーション力への根強い需要

スキルの需要を別の統計でも見てみよう。厚生労働省「労働経済動向調査」の職種別過不足感（1999年～）をみると、専門・技術、販売、サービスは常に不足感が大きく（特に専門・技術）、雇用情勢の厳しかった2000年代初期でも常に不足感が示されていた。これらは、全体の雇用情勢が悪い状況にあっても専門知識や技能、対人コミュニケーション力への需要が根強かったことを示唆している。反対に過剰感の大きいのは管理と事務であったが、2002年以降徐々に過剰感が低下し、近年不足気味に転じている。技能工と単純工は景気動向とかなり連動する動きを見せていることから、直近の景気の急速な悪化によって最も強く影響を受けることが予想される。

最後に笑うのは

高度な専門知識・技能や対人コミュニケーション力などの高スキルがあれば、情報化やグローバル化が進展しても、景気が悪化したとしても職を失う可能性は少なくなるだろう。しかしながら、厄介なのは、求められる専門知識・技能は状況とともに変化し内容も陳腐化する可能性があることだ。ちなみに「笑い」の世界でも一世を風靡したお笑い芸人がいつの間にか姿を消し、忘れ去られてしまうことはよくある。結局、最後に笑うのは地道な努力を重ねてスキルを常に磨いた人ということなのだろう。笑えない厳しい現実である。

書評について考える

【書評の3条件】

日本語の文章表現を専門に、研究・教育に携わっている石黒と申します。今回は、自らの専門性に照らし、書評を書くのではなく、書評について書いてみようと思います。

私は、最近、学部生を対象とした文章表現の授業で、自分の好きな本の書評を書きなさいという課題を出しました。書評は、自分の好きな本の魅力を、読んだことのない人に紹介するという活動なので、エントリーシートを書くときなどに役に立つ、格好の文章トレーニングの素材になるのです。そして、提出された書評を、学生たち自身に評価してもらったところ、好感度の高い書評が満たす条件は、以下の三つであることがわかりました。

- (1) 本の内容紹介はポイントを絞って
 - (2) 自身の主観は控えめに
 - (3) できるかぎりポジティブな評価で
- まず、(1)ですが、内容の見当もつかない書評は意味をなしません。しかし、要旨を載せるなどの書きこみ過ぎはNGです。書きこみ過ぎは、いわゆる「ネタバレ」につながり、書評を読んだ読者の、実際に本を手にする意欲を削いでしまいます。

つぎに、(2)ですが、書評の魅力の源泉は、評者の分析力にあります。ですから、評者ならではの見方のない書評に価値はありません。しかし、評者の主観が前面に出てくる書評もまた、本の魅力を半減させます。書評は、評者自身の自己主張の場ではないからです。

【掟破りの書評】

ところが、最近、上記(1)～(3)の書評の原則を守らない、掟破りの書評が増えていきます。それは、書評をするメディアが増えたことに起因すると思われる。とくに最近増えているのがインターネット上の書評で、ウェブサイトやブログ、インターネット書店には、書評があふれかえっています。

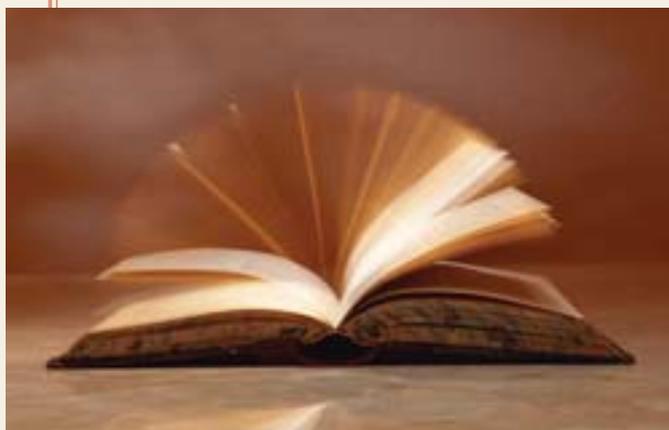
インターネットの発達により、以前は書評を書く機会がなかった一読者がボランティアで書評を発信することで、多くの書籍に簡単に内容や個別の評価が付されていることは意

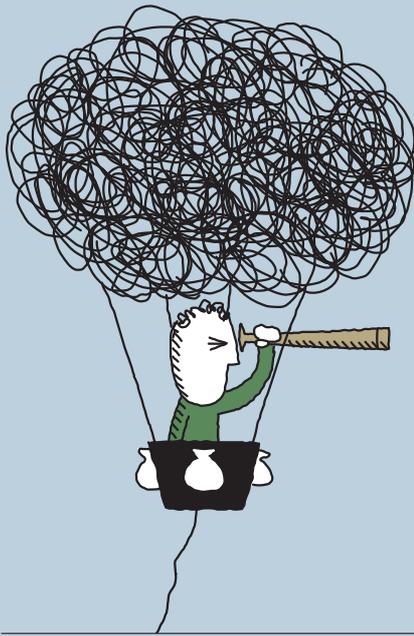
味のあることです。すでにその本を読んだ評者がその読後感を率直に表明することで、未知の読者にその本との新たな出会いの場を提供したり、その本の購入希望者に一定の判断材料を提供することにつながるからです。とはいえ、素人がスクリーニングを経ないで書く書評には問題が多いのも事実です。インターネット系の書評では、ネタバレ書評や自己を語る書評、悪意のある書評が横行し、その質を下げています。

【書評の教育的価値】

しかし、裏を返せば、そうした書評は、メディア・リテラシーのよい教育の場を提供してくれているとも言えます。どの書評が当該の本の価値を正當に反映したもので、どの書評が身内の書いた太鼓持ちのもので、どの書評が貶めることを目的に書かれた一面的なものかを区別する目が養われるようになるからです。

書評を書くことは、文章技術を高める優れたトレーニングになり、書評を読むことは、メディア・リテラシーを身に着ける格好の教材にもなるのです。書評の教育的な価値は侮れないと、この「書評」を書くにあたり、強く感じた次第です。





『悩む力』

姜尚中

学生から見ても、教師はどのように映っているだろうか。厳しい先生、優しい先生。話の面白い先生、つまらない先生。自分たちの様子をしっかりと見ている先生、見ていない先生。励ましてくれる先生、委縮させる先生。すぐ答えを教えてくれる先生、答えを教えずに考えさせる先生。教師のさまざまなタイプを学生は案外冷徹に見ているものだ。ただ、いずれにせよ、教師は一般に「答えを持つ存在」である。それは職業柄当然のこと。教師には「答えを教える」という役割があるだけでなく、明確な答えのないものは最初から取り上げないのが普通だからだ。しかし実は、教師でも答えを間違えたり、見つけられなかったりする。そんな当たり前のことを認めながらいない教師が少なくない。

悩むことを前向きにとらえる

そんな中であって、ここで紹介する『悩む力』の著者姜尚中(カンサンジュン)氏は、答えが見つけれず悩んだ経験を惜しみなく披露する。静かな語り口で本質に迫る鋭い論評を展開して聞く者を魅了する政治学の教授。そのクールな姿からは想像しにくい「弱さ」や「人間臭さ」の吐露には驚かされるが、それだけに留まらない。悩むことをとことん前向きにとらえ、そこから生きる力を引き出すことを提案している。

「悩む力にこそ、生きる意味への意思が宿っている」(p11)。ここに、本書のエッセンスが凝縮されている。

自我・お金・知識・青春・宗教・仕事・愛・死・老いと、多岐にわたるテーマにおいて、悩みの様相と原因を分析し、悩むことの積極的な意義を明らかにしていく。100年前に生きた、文豪夏目漱石と社会学者マックス・ウェーバーの文章や生き様、「悩む姿」を現代とのかかわりの中で引用している。

「なんだ。偉そうな人たちも悩んでいる。自分だけじゃないのか」と多くの読者が安心する。問題を放置すればしこりが残る。しっかり悩めば身軽になって前に進める。悩みは成長の力。悩みは楽しむことさえできる。悩まないで済ますのはかえって不健全。悩むことは運の悪いことでもカッコ悪いことでもない。そう納得した読者は悩むプロセスに充実感さえ味わう。

悩みに対する処方箋

悩みはこのようにきわめて個人的な営みである。だがそれは、否応なく社会の影響を受ける。「悩みや苦悩を集的に見るならば、

そこには時代や社会の環境が大きな影を落としている」(p12)という認識から著者は悩む個人と時代の潮流との関係を読み解く。「ボーダーレスに広がる情報ネットワークと自由でグローバルな市場経済」(p13)からは誰もが豊かさや利便性を受け取り、夢が約束されているかと思えば、実際には貧困と格差、孤立感が広がり、個人は猛烈な変化の勢いに押しつぶされそうになる。そのようすを見れば、多くの個人が苦悩を味わうのは当然のことだと指摘する。

では、どんな処方箋があるのか。

明確な答えはないとしながら、行き過ぎた効率主義、個人主義を諷刺し、他者とのかかわりを大切に、身の丈に合った自分や社会を目指すことを推奨している。左派的な一匹狼の印象を漂わせる著者から「共同体」の人間関係、相互承認を重視する保守的なことばが出てくることには驚かされるが、それは本書の文脈にうまく馴染み、それなりの説得力を持って読者に迫ってくる。

ただそれも、深い苦悩の中で救いを求める読者には酷な提案だ。いくら身の丈に合った自分を目指しても、「悩む力」は湧いてこない。「まじめに悩み抜けば、何らかの解答が見つかる」(p160)ということばも空虚に響くだろう。悩めば悩むほど力がなくなり起き上がれない状態が長期間続く。そんなひどいウツからの脱却には役立たない。

しかし、それでも、本書は多くの読者に躊躇なく推奨できる。苦悩することを人間的な営みとして前向きに捉え直し、ひどいウツにならないためのヒントが満載だからだ。

『悩む力』(集英社新書) 姜尚中/著 集英社刊
定価：714円(税込) 2008年5月16日発行





ワイン・テイスティング入門

シルクのような美しい泡が立ち上るシャンパーニュ、
優雅なブルゴーニュ、荘厳で熟成したボルドー、野性味あふれるローヌ。
青山のワイン・スクールに通いはじめて、かれこれ2年。
毎週、6種類のワインを試飲し続けている。
いわゆる、「ブラインド・テイスティング」というものだ。

ワインは 飲み込んではいけない

ワインの先生曰く、「飲んではいけません！プロを目指す人は！」そう、ソムリエ（ソムリエール）を目指す人は、テイスティングの際に、ワインを飲み込んではいけない。アルコールにより、舌の感覚が微妙に麻痺し、徐々にテイスティングの物差しが狂い始めるからだ。口の中に含むだけで、少しずつではあるが、アルコールは体内に吸収される。そういえば昔、プロ野球の優勝祝勝会で、ビールを飲まないのに、イチロー選手が「皮膚から体内に吸収される」と言っていた。ご丁寧に、ワインを吐き出すためのカップまで用意されている。（そうは言われても、美味しいワインの場合、私は躊躇なく頂きます。）

「水もあまり飲まないほうが賢明でしょう。」（「えっ？マジですか？」）「水とアルコールでは浸透圧が違いますから、あまりお勧めはできません。バゲットがよいでしょう。」

こんな雰囲気で、6種類を試飲します。「テイスティング・シート」なるものがあり、「外観」、「香り」、「味わい」、「アタック」、「アフター」、「アルコール度」などを、入門クラスでは要素分解的に評価していく。グラスを揺らしながら、両隣りの仲間を見ると、自分とは違うコメント。（ちょっと、ドキドキ。）

ここからが、ワイン・テイスターの本領発揮。第1に、セバージュ（ブドウの品種）を峻別します。シャルドネとか、カベルネ・ソーヴィニオンなどですね。第2に、生産地。同じブドウ品種でも、ブルゴーニュとニュージーランド、カリフォルニアでは、特徴が異なります。このくらいまで分かると、合格です。第3に生産年です。さらに高級ワインの場合、生産者まで、分かるとか……。

マニア間の無言の応酬

先生に指されると、自己のテイスティング感覚を信じて回答。

「外観はパール・グリーンで粘性は弱い。香りは清涼感あふれるハーブ、柑橘系の香りもします。ライム系でしょうか。ただし、燻した灰のような特徴的な香りもします。味わいはフレッシュ＆フルーティー。余韻は短め。アフターには心地よい苦味が残ります。比較的若いワインです。品種はソーヴィニオン・ブランで、生産地はフランス・ロワール。調子に乗ってAOCまで言うと、ピュイフュメでしょうか……」。

と、右隣の仲間が、「そりゃ、中野さん、違うでしょう」というような挑戦的な視線を送ってくる。左隣のセレブな奥様も、余裕の表情で勝ち誇っている。（ふふふ、オレはロワールには強いのだ！マニア間の無言の応酬。先生の答えを待つ一同。）

「正解は、ロワール地方のピュイフュメ。品種は、もちろん、ソーヴィニオン・ブランですね。ヴィンテージは2006年。生産者は……」という先生の説明。（やったあ！オレなんか、ロワール現地に行ったら飲んでるんだよ、外すわけないでしょう。素人はシャブリとか、サンセールと間違えるんだよなあ……以下、蘊蓄につき、10行削除……。）

なんと、マニアックな会話！でも、趣味ってみんな、そうですね。年齢、性別、職業、国籍と関係なく、ひたすら6種類のワインをテイスティングする楽しさよ。もちろんソムリエ協会の認定試験には、飲むだけでなく、お勉強も大切です。世界の地理、地質、ワインの歴史、文化。最新のワイン動向なども学びます。さらには、チーズや料理とのマリアージュという上級課題まで用意されています。

今日もワイン・スクールで、6脚のワイングラスを揺らしています。

地球の風 地域の風



天保12年創業の老舗の大阪寿司店を
going concernとしてさらに発展させる

吉野寿司株式会社 会長
橋本英男氏
Hideo Hashimoto





大学進学に対する 父の思いと私の思い

大学受験のときは、神戸大学か一橋大学のどちらを受験しようかと考えていました。一橋大学の受験科目に数学Ⅲがあったので、高校では理工系クラスにいました。そこで調べてみると、大学案内には卒業後に外交官や公認会計士などの道を進んでいる先輩が多いことが書いてありました。公認会計士に関心がありましたから、これを知って「自分に合った、すばらしい大学だ」と思ったのです。

家は天保12年（1841年）創業の大阪寿司の老舗です。父親からは何も言われませんでした。女3人、男1人の姉弟ですから、うすうすは「自分が家業を継がなければならないだろうな」と感じていました。しかし、大学に行って公認会計士を目指して勉強したいというのが、そのころの私の強い思いだったのです。

父の私に対する希望は、「円満な社会人になってもらいたい」ということでした。昔気質の人でしたから、「大学に行って勉強ばかりすると頭でっかちになってしまって、社会人としてのバランスが取れなくなってしまうのではないかと」恐れているようでした。しかし、私が大学に行くことについては、表だっては反対しませんでした。

なお、入学試験に英語のヒアリングがありましたから一橋大学の受験に当たっては英語をかなり勉強しましたし、大阪弁の英語でしたが、入学してからもそれなりに勉強しました。しかし、満足にしゃべれるようにならなかったことを寂しいと思っています。そんなこともあって、長男はアメリカに留学させました。大学にお願いしたいのは、卒業時には英語が上手にしゃべれるような教育をしてほしいということです。

公認会計士を目指して 飯野ゼミで勉強に励む

公認会計士を目指していましたから、大学では飯野利夫先生のゼミで学びました。ゼミテンが少なかったこともあって、飯野先生にはかわいがっていただきました。家業を継いでからも、大阪にお出でになると必ず店に寄ってくださったものです。長男が公認会計士になったことを報告したときには、自分のことのように喜んでくださいました。私は公認会計士にはならなかったのですが、その夢を息子が叶えてくれたようなものです。

大学の勉強では、もともと数学が好きだったので、蛍光灯などの取り替え時期の算出法などが今でも記憶に残っています。百貨店などで蛍光灯を変える際に、切れたものを一本ずつ変えるのでは効率的ではありません。そこで、いつ蛍光灯を一斉に変えるのが効率的かといったことを、数学を使って計算するのです。

部活では山岳部に所属しました。2年になったとき、前穂高で一人の部員が滑落して宙吊りになってしまったことがありました。事故というわけではなかったのですが、それを知った父が心配して「山岳部をやめてくれ」と言います。大学進学をあえて反対せずに送り出してくれた父の気持ちを慮って、結局、山岳部は2年次でやめることにしました。

銀行員生活3年半で 父親に呼び戻される

卒業後には銀行に勤めることにしました。実家はもちろん親戚も商売人ばかりでしたから、勤め人生活に興味があったのです。なかでも、若くして店主たちと渡り合っている銀行の支店長へのあこがれがありました。こうして大阪での銀行員生活が始まったのですが、入行してみると当然のことで

すが、新入行員生活は想像していたような華やかなものではありませんでした。

勤務して3年半ほど経ったころ、父から店を手伝ってくれるように要請がありました。いろいろ悩みましたが、結局、父の希望を容れて、実家に戻ることにしました。それは、約40年も前のことです。

3年半ではありましたが、銀行員生活で実家とは違った仕事をかいま見ることができたのはよかったと思います。もし、いきなり「家業を継げ」と言われたとすると、どうしても「もし、勤めていたら……」と勝手にバラ色の世界を思い描いてしまうかもしれません。

大学の勉強で、企業は「going concern（継続企業体）」であることをはじめ、企業のあり方を学んできました。銀行員生活では、ビジネスの世界を体感してきました。こうした体験を活かして、1841年創業以来続いている大阪では名門の寿司店を発展させなければなりません。父が頑張っている背中を見ているから、いやでも私も頑張らなければならぬと気を引き締めたものです。

船場のど真ん中の店で 船場の歴史とともに発展

吉野寿司は船場のど真ん中に位置しています。船場の歴史を紐解くと、元禄時代に最も繁栄していました。それは、ちょうど淀屋橋ができた時代で、中ノ島や堂島に諸藩の蔵屋敷が並び、全国の富の7割が大阪にあり、その7割が船場にあるといわれたほどです。

なかでも淀屋橋をつくった淀屋辰五郎は、淀の築堤工事で財をなし、中ノ島の開拓に成功して大阪随一の財閥となりました。「西国33カ国、淀屋から金を借りぬ大名なし」といわれたほどで、諸大名への貸銀1億貫目、手持ち現金は金12万両、銀8万5000両といわれています。この淀屋が1705年に關所（けっしょ：財産没収）になってしまいました。

この教訓から大阪町人が学んだのは、何よりも分限を大切にしようということです。拡大より安定で、経営多角化を避け一業専心を旨とする経営へと変わってきました。低成長期を迎えた享保期には、すっかり守りの経営へと変わっていききました。

よく「大阪の食い倒れ」といいます。語源をみると、この意味は巷間いわれているのとかなり違います。それは、淀屋

辰五郎が活躍したころのことです。秀吉は淀川を中心に諸国との流通の便を図るために運河をつくりました。川には橋が必要で、その橋を商人たちにつくらせたのです。寄付を強いられた商人は橋が一つできるたびに倒産。しまいには、橋の杭一本打つたびに倒れたので、「杭倒れ」といわれました。実は、こうしたシビアな史実がその背景にあったのです。寿司屋の6代目としては、どんどん召し上がってくれる今の「食い倒れ」のほうがいいですが……。

伝統の味を墨守しつつ 販路を拡大する

明治の初めは、船場には大きなお店が軒を並べ、いわゆる旦那さんや御料さんがそこに住んでいる場所でした。口の肥



寿司券。明治から大正期まで使用されていた吉野寿司の商品券。贈答品として人気があった証である。



「すし詰め」に入れた3人前の折詰。魚のすり身入り厚焼きタマゴとエビ（こけら）、小鯛、焼きアナゴを乗せ、寿司飯にはシイタケ、焼き海苔を挟んで押している。



えた人が住んでいるリッチな土地柄だったのです。

かつての大阪寿司は下魚を使った押し寿司で、ご馳走というより一時しのぎのものにすぎませんでした。3代目の寅蔵はこの船場という土地柄を生かして、従来のお寿司をエビや小鯛、焼きアナゴ、厚焼きタマゴなどの高級素材を使った箱寿司として作り始めました。これが爆発的にヒットしたのです。旦那さんや御料さん、番頭さんが食べているのを横目に見て、丁稚さんは「いつか吉野寿司を食べられるようになりたい」と思ったといいます。箱寿司が食べられるようになるのが一人前の証であり、それを具体的な目標にして早く自立できるようになりたいと頑張って仕事に励んだのです。も

っとも、若い人たちですから単純に食べてみたいという願望のほうが強かったのでしょうか……。

戦後になると船場の旦那衆は西宮や芦屋などに住まいを移すようになりました。つまり、船場には店だけになってしまったのです。寿司屋にとっては上得意先が減ってしまったわけですから、販路の拡大に励まなければなりません。そこで、5代目の父の代には、阪神百貨店や高島屋などのデパートに出店するようになりました。6代目の私の代にはロイヤルホテルなどホテルにも販路を広げています。さらに、保存が利く冷凍蒸し寿司などで、全国発送に対応できるようにいち早く取り組んできました。



二寸六分の世界に展開する 大阪ならではの食文化

吉野寿司は正式には「吉野^十煮」と表記しています。寿司は本来「魚」偏に「差」と書き、中国の文献によれば、魚肉を飯の上に置いて発酵させたものを意味します。つまり、「なれずし」のことで、「鮓」や「鮓」はその俗字なのです。吉野寿司は、寿司の大本の意味を忘れないために「煮」の字を使っているのです。ちなみに、店には明治の書の大家である比田井天来先生の書が掲げられています。

箱寿司の木型。木型は内り二寸六分、深さ一寸二分。酢の物、蒸し物、焼き物、煮物のすべてが凝縮されている箱寿司を「二寸六分の懐石」と称するゆえんである。



橋本英男氏の次男であり、吉野寿司株式会社の現専務である橋本卓児氏とともに。

地球の風
地域の風



二寸六分の木枠に重しの代わりに両手で寿司を「漬ける」のが、大阪寿司の原点です。保存食的な要素も残っており、時間が経ってもおいしく食べられます。なお、すし飯はかみ締めればかみ締めるほどおいしくなる日本晴などの硬質米を使用しています。

大阪寿司には、「巻き寿司」「鯛寿司」「サバ寿司」「関西ちらし」「蒸し寿司」「箱寿司」があります。なかでも箱寿司は大阪寿司の究極の姿といってもいいでしょう。シイタケを煮込んで、その煮汁をベースにするなど、仕込みに時間が掛かることもあって、現在では箱寿司を作れる店が減っています。それだけ、希少価値が高まっているといえます。

大阪寿司はじっくりかみ締めて味わうお寿司で、醤油はつけません。その点が江戸前寿司との違いといえます。その味を表すのが、「まったくした味」という表現です。

ちなみに、「すし詰め」という言葉があります。これは、箱寿司が3人前ピチッと箱に入っている状況から生まれた言葉です。

6代目就任の際の決意は働いている人の幸せづくり

私が6代目になって考えたのが、「働いている人が幸せになるように」ということです。従業員がハッピーでなければ、何のために店を開いているのかわかりません。ちなみに、支配人は現在74歳で、伝統の味を守ってくれています。長男は公認会計士ですが、経営を見てくれていますし、次男は後を継いでくれています。

「鐘ひとつ 売れぬ日はなし 江戸の春」という、芭蕉の弟子が作ったという俳句があります（つり鐘のようなものでも売れぬ日はない。さすが江戸の春だなあ。という俳句です

が）。当時はどんなに高いものでも、珍しいものにもお金を出すだけのゆとりがあったのです。

伝統の継承も大切ですが、周りに育ててくれる人がいなければ食の文化は育ちません。

最近きびしい時代になってきたという実感がします。

大阪の食文化というと、お好み焼きやたこ焼きのイメージが強いですが、「箱寿司もある」ことを強くアピールしたいですね。実際に、前大阪府知事時代には府庁に出向いてデモンストレーションを行いました。

伝統の味を守り続けてきたお陰で、ロイヤルホテルの元社長である山本孝氏の知己を得て、「大阪の食文化の一つ」としてホテルのパーティーに出してもらうようになりました。また、韓国の雑誌で紹介されたこともあり、箱寿司に興味を持って雑誌片手に食べにきてくれる韓国人の方もいます。

なお、農林水産省の「郷土料理百選」に大阪からは、「白みそ雑煮」と並んで「箱寿司」が選ばれています。それが発表されてから、箱寿司を知らなかった人からの問い合わせが数多くあります。今では、お中元やお歳暮の時期には冷凍の蒸し寿司の6個セットがよく売れています。技術の進歩で、遠くにお住まいの多くの方にも召し上がっていただけるようになってきたのです。

課題もあります。最近では、寿司向け高級素材の確保が難しくなってきたのです。例えば、瀬戸内海のアナゴはだんだん取れなくなっています。箱寿司は素材が命ですから対策を考えていかなければなりません。

ときには、「こうまでして昔の味にこだわらなければならないのか」と思うこともあります。しかし、お客様から「おいしかったで」と言っていたりすると、やはり170年近く続いたこだわりの味を追求し、発展させていかなければならないと意を新たにします。



◆橋本英男（はしもと・ひでお）

昭和41年一橋大学商学部卒業
吉野寿司株式会社 会長

一橋大学基金へのご協力、心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2009年1月末現在で、総額約20億5,700万円に達しました（うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ）。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2008年9月11日から2009年1月末日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載しておりません。また、ご寄付者で万が一お名前がもれている

場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡ください。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に末永く留めさせていただきます。また、30万円以上（法人100万円以上）のご寄付に関しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。

なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。



ご寄付のお申し込みについて

- お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。
- 一橋大学基金ホームページより、クレジットカードに

よるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申し込み」メニューからお進みください。

一橋大学基金ホームページ

<http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

遺贈による寄付についてのお知らせ

一橋大学の教育・研究活動に対し、日頃より温かいご理解とご支援を賜り、深く感謝申し上げます。

本学は教育・研究環境の拡充や、国際交流の展開、およびそれらを通じた社会発展への貢献を使命としております。

現在、一橋大学基金をはじめとする本学への寄付について、遺言による寄付（遺贈）をお考えの方に、本学の提携した信託銀行をご紹介させていただき、便宜を図らせていただくことに致しております。

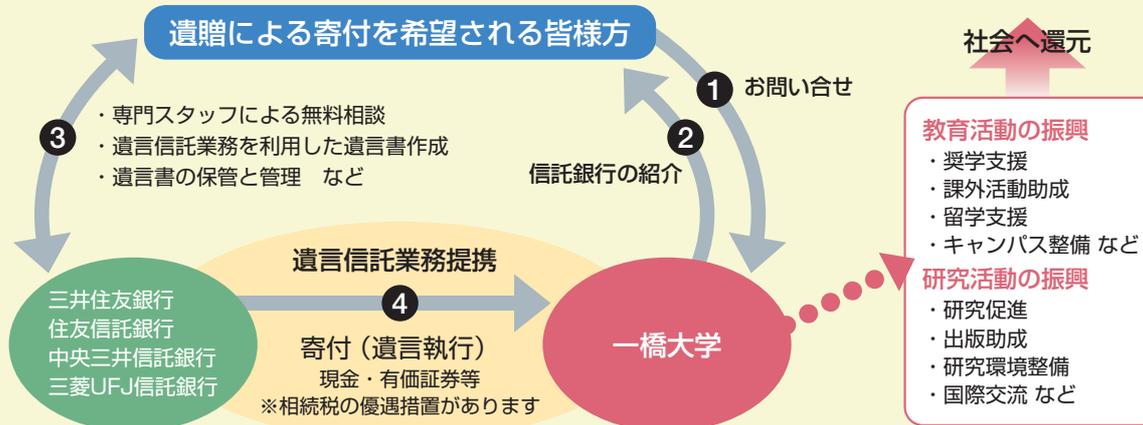
この度、三井住友銀行と新たに提携を結び、下記の銀行が提携銀行となりましたので、お知らせいたします。

本学も国立大学法人化し、将来に向けた財政基盤の確保を図るとともに、更なる本学の教育・研究活動の振興に全学を挙げて一層の努力をいたしているところであります。

皆様からのご寄付は、次代の発展を担う本学の教育・研究の振興である奨学支援や課外活動助成、研究促進等に大切に活用させて頂き、社会へ還元してまいりたいと存じております。

この趣旨にご賛同頂き、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

一橋大学



● お問い合わせ先：一橋大学基金事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1 TEL/FAX：042-580-8888 E-mail：kikin@ad.hit-u.ac.jp

《ご相談などの内容についての秘密は厳守いたします》

卒業生のご家族

3名 (230,000円)

松本登美枝 様
他2名

在学生の保護者・一般の方

10名 (391,000円)

岡崎健一 様
岡田裕二 様
小原道雄 様
小原康史 様
千賀俊光 様
竹中 清 様
丹羽 一 様
八木 晃 様
矢崎正一 様
他1名

企業・法人等

35団体 (143,073,700円)

旭有機材工業株式会社 様
アドバンスウエー・マネジメント株式会社 様
大塚製菓株式会社 様
株式会社岡村製作所 様
国立市観光まちづくり協会 様
国立市商業協同組合 様
国立市商工会 様
国立商工振興株式会社 様
株式会社ぐるなび 様
京浜急行電鉄株式会社 様
株式会社コトブキ 様
株式会社小松製作所 様
サッポロホールディングス株式会社 様
山九株式会社 様
株式会社資生堂 様
新日本製鐵株式会社 様
第一三共株式会社 様
株式会社電通 様
名古屋製酪株式会社 様
日本製紙株式会社 様
日本製粉株式会社 様
日本電気株式会社 様
日本電信電話株式会社 様
株式会社フジテレビジョン 様
Berge y Compania S.A. 様
三井不動産株式会社 様
三菱化学株式会社 様
三菱UFJリース株式会社 様
山崎製パン株式会社 様
他6団体

本学役職員

20名 (5,067,000円)

田中佑一郎 様	中前 涉 様	平泉 翔 様	三浦典義 様	山岸紀夫 様
田中洋祐 様	中村 元 様	平出浩一 様	三浦博之 様	山口剛広 様
田中芳郎 様	中村謹三 様	平形芳郎 様	水上尚史 様	山口藤夫 様
谷 和久 様	中村圭佑 様	平古場志郎 様	水上裕康 様	山崎貴暁 様
谷口尚也 様	中村剛康 様	平塚 崇 様	水野喜一郎 様	山崎 光 様
谷口 誠 様	中村佛一郎 様	平塚弥志 様	水野健吉 様	山下国久 様
谷本春二 様	中村 達 様	平本道治 様	水野隆喜 様	山下 聡 様
田原裕次郎 様	中山慎太郎 様	廣嶋捷治 様	三隅元夫 様	山下寛行 様
樽 央也 様	中山秀彦 様	広瀬国基 様	水村広明 様	山下善久 様
丹治清吉 様	鍋島元彦 様	廣瀬長藏 様	三谷谷弘 様	山田耕司 様
千野 亘 様	新里英雄 様	廣野孝夫 様	光瀬靖彦 様	山田 務 様
塚本信男 様	西崎孝盛 様	福井淳二 様	三橋秀方 様	山田英夫 様
塚元佑樹 様	西島宏幸 様	福島征男 様	葉袋政彦 様	山田宗一 様
月岡 昌 様	西畑隆昭 様	福島武夫 様	皆川 耕 様	山田泰広 様
辻 壯一郎 様	西村 晃 様	福田武二 様	南 熹 様	山本昭男 様
辻本雄太郎 様	仁平真希 様	福田 寛 様	嶺 恭輔 様	山本 晃 様
津田樹己 様	二瓶廣志 様	福西惣兵衛 様	峰 茂寛 様	山本陽茂 様
土田 進 様	根岸 正 様	藤井孝充 様	三村八郎 様	山本洋一 様
土橋久男 様	納富清孝 様	藤井和雄 様	宮木修司 様	由川潤一郎 様
土屋宏明 様	野尻七郎 様	藤井 智 様	三宅康平 様	吉里 格 様
堤 哲児 様	野田莞爾 様	藤井質文 様	三宅啓之 様	吉田 斌 様
角川和男 様	野田雄也 様	藤澤陽藏 様	宮崎真一 様	吉田卓矢 様
角田喜之 様	野村正彦 様	藤塚 啓 様	宮後隆治 様	吉田 肇 様
弦巻 修 様	萩森昭二 様	藤本静男 様	宮田和夫 様	吉田元一 様
寺澤康行 様	橋田邦康 様	藤森久弘 様	宮田昌之 様	吉原 雍 様
寺田武男 様	橋本昭一 様	布施正義 様	宮野友次郎 様	吉峯英虎 様
寺田佳正 様	橋本哲次 様	二木太三 様	宮部玲子 様	吉本康德 様
土肥幸之助 様	橋本光彦 様	瀧上玲子 様	宮本照武 様	依田竹史 様
東樹茂夫 様	蓮見俊夫 様	古莊 清 様	宮本弘司 様	米濱泰英 様
當麻友代 様	長谷川彰宏 様	古谷太一 様	向山雄三 様	米村研史 様
戸田年昭 様	長谷川圭一 様	保泉昌範 様	武藤嘉孝 様	四方田康博 様
戸田裕一 様	長谷川俊彦 様	穂刈 公 様	宗像克彦 様	若菜 智 様
戸田陽一郎 様	長谷川暢洋 様	星 亮 様	村岡美菜子 様	脇 孝二 様
栃尾七郎 様	畠中春男 様	細見恒雄 様	村川守中 様	渡辺佑民恵 様
戸塚源二 様	畠山かや子 様	甫出 弘 様	村田潤一 様	渡辺 功 様
殿村哲也 様	花輪公一 様	堀内俊助 様	村田 博 様	渡邊太郎 様
富澤 薫 様	羽田 弥 様	前里耿一 様	村原良祐 様	渡辺菜摘 様
富山英明 様	馬場佳一郎 様	前田征四郎 様	村松賢一 様	渡辺保元 様
豊島忠雄 様	馬場 肇 様	牧野隆夫 様	村山昇平 様	渡邊竜介 様
内藤元巳 様	浜渦昭男 様	増田 修 様	室井和弘 様	昭和37年 悠々会 様
永井新也 様	濱田博英 様	松井 毅 様	茂住重昭 様	一橋大学昭和47年卒 (同期ご一同) 様
長江雄平 様	浜辺 弘 様	松浦洋明 様	望月重里 様	如水会多摩稲城支部 様
中尾卯作 様	早川晴雄 様	松生雅好 様	茂木信豊 様	如水会町田支部 様
中川良雄 様	林 俊介 様	松岡具視 様	森 三郎 様	如水會長崎支部 様
中澤寛之 様	林 修樹 様	松岡廣志 様	森 英兄 様	長船如水会 様
中島郁夫 様	林 浩一 様	松木 茂 様	森鍵多知夫 様	他84名
中島 航 様	早瀬浩三 様	松崎和男 様	森本浩通 様	
中島満三 様	原 恭一 様	松崎信介 様	森本恭弘 様	
長島一成 様	原 節夫 様	松下 功 様	森谷英樹 様	
中田敦之 様	原田 穰 様	松丸敏市 様	八木功治 様	
中津川忠正 様	原田禎忠 様	松本 将 様	矢口晴彦 様	
中津川輝夫 様	樋川義樹 様	松本勇一 様	安川三四吉 様	
中津山正昭 様	樋口誠一 様	松吉定男 様	安田 功 様	
中西 巖 様	久本浩二 様	真山 健 様	柳沢 寛 様	
永沼直行 様	久本真史 様	丸山達雄 様	矢野一夫 様	
中野 篤 様	樋田久樹 様	三浦慶介 様	矢野哲史 様	
中野重幸 様	平 拓郎 様	三浦 弾 様	山内稔彦 様	

「祈るように語り続けたい—— 吉永小百合さん原爆詩朗読会」を開催



2008年11月16日（日）15：00～16：30、兼松講堂にてCsPR特別企画「祈るように語り続けたい——吉永小百合さん原爆詩朗読会」が開催されました。運営には学生ボランティア約50名も参加。国立市長、杉山学長、被爆者の団体の国立さくら会、国分寺こくぶ会のメンバー約80名も出席し、1000席ある会場はほぼ満席でした。

主催の「平和と和解研究センター（CsPR）」は、社会科学による平和と和解についての総合的研究と教育の中核的拠点形成を推進。学術的研究に加えて、広く社会に開かれた活動により市民や学生と一緒に考える姿勢が特徴で、今回の特別企画もその一環です。

構成の第1部は濱谷正晴社会学研究科教授による「原爆体験：記憶と記録」。DVD上映もあり、被爆者の体の傷、心の傷の深さ、不安の大きさが共感を呼びました。そして、第2部が吉永小百合さんによる原爆詩の朗読。「こんなに感動するとは思わなかった」という学生や、「吉永さんが詩で語ってくれる被爆経験を、若い人と一緒に聴けるという特別な空間ができた」と語る被爆者の方もいて、世代を超えた交流ができました。

原爆詩の朗読や歌、絵に接することで、研究の重要性とともに、「平和と和解」の営みのひとつである表現方法の幅広さと深さを実感しました。

『第二楽章 ヒロシマの風』
吉永小百合 角川文庫編集部 角川文庫刊



プログラム

第一部	15：00～	「原爆体験：記憶と記録」 濱谷正晴社会学研究科教授
第二部	15：40～	吉永小百合さんによる原爆詩の朗読
	16：10～	学生と市民による合唱 「花こそ心のいこい」「折りづる」
展示	15：00～	男鹿和雄エピグラフ展 「画文集 第二楽章長崎から」より

当日のアンケートより抜粋

私たちが語り継がなければいけないという想いになりました。(10代女性)

どんなに小さなことからでも、始めてみようとおもいました。(30代女性)

帰宅したら、今大学生の息子に今日の事を伝えました。(50代女性)

吉永さんの活動が若い人達に大切な力を与えて下さっていることをうれしく思います。(70代男性)

このような会ができたことを誇りに思いながら、残りの学生生活に活かせればと思います。

(学生スタッフから吉永小百合さんへ送った手紙から抜粋)



前回に引き続き、AAAを取得しました

本学は、株式会社日本格付研究所における格付について、

前回（2007年実施）に引き続き最高の「AAA」を取得しました。

今回は、国立大学法人評価や認証評価への取り組みに加えて、教育研究活動を展開するための基盤である財務・経営の状況についても再度評価を受ける必要があるとの観点から、見直しを依頼したものです。

評価のポイント

※株式会社日本格付研究所 News Releaseより引用

我が国の社会科学分野における高等教育・研究の拠点校である。

少数精鋭教育に定評があり、各界にリーダーを輩出している。

学生獲得力があり、合格者の歩留まり率は、100%に近い。

卒業生との結束力が強く、支援団体である「如水会」の強固な経済面、教育面、人材育成面での支援体制が確立されている。

科学研究費補助金の新規採択率が4年連続トップである。

グローバルCOEプログラムへの申請が全て採択されている。

研究水準が高く、学部横断的な研究体制の構築が、法人化後一段と高まっている。

行政、学生、卒業生、産業界等のステークホルダーからの広範かつ高い支持・支援によって築かれた経営基盤は強固である。

東京工業大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学との間による四大学連合はじめ、慶應義塾大学との戦略的連携等、今後高等教育行政が志向する「連携」についても積極的な対応を続けている。



Topics 2

本学学生が、
第107回文学界新人賞を
受賞しました

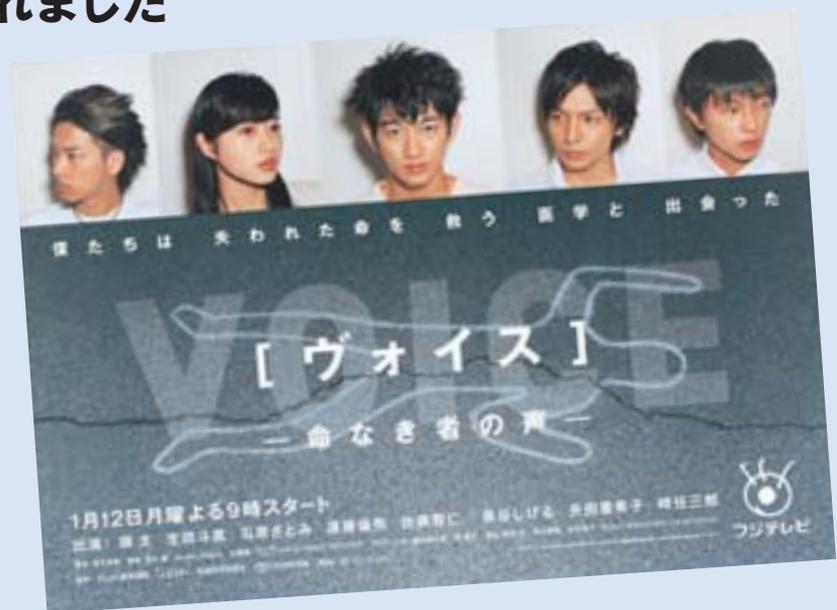
本学言語社会研究科修士課程に学ぶ
松波太郎さんが、
第107回文学界新人賞（文藝春秋主催）を
受賞しました。
受賞作「廃車」は、
『文学界』2008年12月号に掲載されています。



Topics 3

大学キャンパスが、
テレビドラマ『ヴォイス—命なき者の声—』の
ロケ地として使用されました

フジテレビより
月曜日夜9時に放映された、
法医学をテーマにしたドラマ
「ヴォイス—命なき者の声—」
（平成21年1月12日～3月23日）で
一橋大学キャンパスが
撮影ロケ地として使われました。



アルコール・ハラスメント対策

副学長 山内 進 Susumu Yamauchi

学生の自主性重視と
コンプライアンスの両立を図る

飲酒の強要といったアルコール・ハラスメント対策から、一橋寮では酒類の持ち込みを制限していました。しかし、昨年4月27日に寮内で行われた新入生歓迎コンパで飲酒事故が発生してしまいました。そこで、この件に関する「学生死亡事故対策本部」を即日設置し、同本部と学内関係委員会とで事故原因の究明を進めました。

再発防止策としては、現在、「飲酒に関する基本原則」を作成しています。そして、学内情報の収集と対応の仕組みづくりを行っています。さらに、社会倫理、法令遵守に向けたコンプライアンス委員会の設置も検討しています。寮担当、学生担当、教職員関係など各分野の責任者が主要メンバーとなります。

アルコール強要ばかりでなく、さまざまなハラスメントについては、教職員ばかりでなく学生も交えて考えていかなければなりません。その意味でも、学内各分野で抱えている問題に対する情報共有が重要なのです。

情報収集の窓口は一本化して、入ってきた情報についてみんなで対応したり、気づいた問題について議論したり、喫緊の課題に個別対応する仕組みづくりをしようとしています。現在、国内やアメリカの大学のコンプライアンスの状況を調査しているところです。

学生にはアルコールに対する認識の甘さがありました。過剰摂取は死に至る危険性があることを伝えていくことも重要になります。危険に対するセンスを身につけることは生きていくうえで大きなメリットがあります。危機管理を通じて自分の利益を自分自身で守ることは、他人の利益を尊重すること、コンプライアンスにつながります。

大学はこれまで学生の自主性を尊重してきました。もう少し踏み込んでやるべきことがあったと反省しています。「学生だから……」では済みません。そこで、再発防止に向けて、授業にも飲酒やドラッグ、ハラスメントといった包括的な内容を取り扱う科目を取り入れていく必要性を感じています。さらに、寮にはカウンセラーを配置して、日常的に相談に乗っていただける体制を築いていきます。(談)

一橋大学広報誌「HQ」

〈編集・発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長(社会連携・財務担当) 山内 進

〈編集長〉

言語社会研究科教授 坂井洋史

〈編集部員〉

商学研究科准教授 山下裕子

経済学研究科准教授 笹倉一広

法学研究科准教授 屋敷二郎

社会学研究科教授 足羽與志子

国際企業戦略研究科准教授 大上慎吾

経済研究所教授 北村行伸

〈外部編集部員〉

有限会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉

光村印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学学長室広報担当

〒186-8601 東京都国立市中2-1

Tel: 042-580-8032 Fax: 042-580-8016

http://www.hit-u.ac.jp/

koho@ad.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。

一橋大学学長室広報担当 koho@ad.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の

無断転載はお断りします。

● 広告掲載お問い合わせ先
一橋大学学長室広報担当
TEL: 042-580-8032

編集部から

新学期になると生協の店頭で外国語の辞書が山積みになる。昨今では朝鮮語やスペイン語の辞書も仲間入りしている。新入生は新しく高校までの英語以外のチャンネルから世界を見ることになる。最近学力の低下とか英語運用能力向上を理由にいわれる第二外国語の必修を外す大学が増えているという。国際化の中、英語のスキルアップは勿論必要だが、世界を多角的に見る視点の養成に複数の外国語の学習は不可欠だ。お隣の中国では毛沢東が外国を知らなかったばかりに、建国後の舵取りを誤ったといえよう。いち早く英語教育を廃した陸軍に対し、海軍兵学校では井上成美校長の「外国語の出来ない海軍士官がどこの国におけるか!」の一喝のもと、終戦まで続けられたそうである。今ならさしずめ、「英語以外の外国語ができないビジネスマンがどこの国におけるか!」であろうか。新しい辞書を抱えてレジに並ぶ新入生に世界を雄飛する姿を頼もしく見るのである。(瓢箪子)



Hitotsubashi Quarterly

冬・春合併号 April 2009 Vol.22